

五輪堂遺跡

—塩尻東地区県営圃場整備事業
埋蔵文化財包藏地発掘調査報告書—

1989

塩尻市教育委員会

五輪堂遺跡

—塩尻東地区県営圃場整備事業
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—

1989

塩尻市教育委員会

序

塩尻東地区の県営整備事業は、昭和58年の施工開始以来これまでに柿沢、東山、長畠、町区、下西条、中西条の6地区12遺跡の発掘調査が行われ、数多くの貴重な成果を提供してまいりました。最終年度にあたる今年度は、1ヶ所残されていた金井の五輪堂遺跡が工事区域内にはいることから、事業主体である長野県松本地方事務所では工事施工に先立ち発掘調査を行ない、記録保存をはかるために塩尻市教育委員会に調査の委託をされ、調査は地元の考古学研究者、市教委、考古学専攻学生を中心地元の方々の御協力により実施されました。

発掘調査は5月上旬から6月末にかけて行われ、その結果、数多くの成果をあげることができました。特に弥生時代初頭の集落址の発見は当市周辺では前例がなく、貴重な資料となるとともに同地域の古代史解明に大きな前進をもたらしたものといえましょう。

終わりにあたり本調査に御理解、御協力下さいました調査員の先生方をはじめ、地元改良区役員の方々、また作業に献身的に御協力いただいた地元の方々など関係各位に深甚の謝意を表すものであります。

平成元年2月

塩尻市教育委員会

教育長 小松 優一

例　　言

1. 本書は、昭和63年度塩尻東地区県営圃場整備事業に伴う、松本地方事務所と塩尻市教育委員会との契約に基づいて昭和63年5月10日から6月29日にわたって発掘調査した塩尻市大字金井の五輪堂遺跡発掘調査報告書である。
2. 調査経費については、松本地方事務所からの委託金および国庫・県費補助金を受けている。
3. 遺物および記録類の整理作業から報告書作成は、昭和63年7月から平成元年2月にかけて行なった。分担は次のとおりである。

遺構…整理、トレース：鳥羽、桜井。

遺物…洗浄、註記：古厩、中村、太田。

土器復元：市川、小口、小松、一ノ瀬、足立。

土器実測：鳥羽、小林、小口。

土器拓本：小林、古厩、中村、太田。

石器実測：小林、小口。

図版組み…鳥羽、小林、桜井、中村。

写真…鳥羽。

4. 本書の執筆は各調査員が分担して行なった。分担は次のとおりである。

第Ⅰ章、第Ⅱ章第1節、第Ⅲ章、第Ⅳ章遺構1) 5H~14H・3)・4)

.....鳥羽嘉彦

第Ⅱ章第2節、第Ⅳ章遺構1) 1H~4H市川二三夫

第Ⅳ章遺構2)、遺物、第V章小林康男

付章西沢寿晃

5. 本書の編集は鳥羽が行なった。

6. 出土人骨については西沢寿晃氏の御指導を得た。記して感謝申し上げたい。

7. 調査にあたり塩尻東土地改良区理事長平林袈裟男氏ならびに関係役員の各氏、および地元の方々の御理解、御援助をいただいたことを明記し、お礼としたい。

8. 本調査の出土品、諸記録は平出遺跡考古博物館に保管している。

目 次

序	
例 言	
第 I 章	調査状況 1
第 1 節	発掘調査に至る経過 1
第 2 節	調査体制 2
第 3 節	調査日誌 3
第 4 節	遺跡の状況と面積 5
第 II 章	遺跡周辺の環境 7
第 1 節	自然環境 7
第 2 節	周辺遺跡 10
第 III 章	遺跡の概要 11
第 1 節	遺跡の概要 11
第 2 節	発掘区の設定 11
第 IV 章	遺構・遺物 15
第 1 節	住居址 15
第 2 節	小竪穴 37
第 3 節	溝 91
第 4 節	遺構外出土遺物 92
第 V 章	まとめ 99
付 章	五輪堂遺跡出土の人骨 100

第Ⅰ章 調査状況

第1節 発掘調査に至る経過

- 12月27日 昭和63年度文化財関係補助事業計画について（提出）
3月9日 市耕地林務課、市教育委員会により、五輪堂遺跡調査箇所についての現地協議
3月17日 地区は場整備役員、市耕地林務課、市教育委員会により、五輪堂遺跡の調査時期および調査箇所についての協議
4月7日 昭和63年度文化財関係国庫補助事業の内定について（通知）
4月21日 県営は場整備事業塩尻東地区埋蔵文化財包蔵地発掘調査について（依頼）
4月26日 昭和63年度国庫重要文化財等保存整備費補助金交付申請書について（提出）
4月27日 県営は場整備事業塩尻東地区埋蔵文化財包蔵地発掘調査について（回答）
5月2日 県営は場整備事業塩尻東地区埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託について（契約）
5月2日 埋蔵文化財五輪堂遺跡の発掘調査について（通知）
5月31日 昭和63年度文化財保護事業県費補助金の内示について（通知）
6月16日 昭和63年度文化財保護事業県費補助金交付申請書について（提出）
6月21日 昭和63年度国宝重要文化財等保存整備費補助金の交付決定について（通知）
7月9日 五輪堂遺跡発掘調査の終了について（届）
7月9日 五輪堂遺跡埋蔵文化財の拾得について（通知）
8月17日 五輪堂遺跡埋蔵物の文化財認定について（通知）
8月25日 昭和63年度文化財保護事業県費補助金の交付決定について（通知）

発掘調査実施計画書（一部のみ記載）

2. 遺跡名 五輪堂遺跡

4. 発掘調査の目的及び概要 開発事業県営は場整備事業塩尻東地区に先立ち1,000m²以上を発掘調査して記録保存をはかる。遺跡における発掘作業は昭和63年6月30日までに終了する。調査報告書は昭和64年3月25日までに刊行するものとする。

5. 調査の作業日数 発掲作業28日 整理作業28日 合計56日

6. 調査に要する費用 発掘調査総額 6,500,000円

文化財保護部局負担額（22.5%） 1,463,000円

農政部局負担額（77.5%） 5,037,000円

7. 調査報告書作成部数 300部

第2節 調査体制

団長	小松 優一	(塩尻市教育長)
担当者	鳥羽 嘉彦	(長野県考古学会員、市教委)
調査員	小林 康男	(日本考古学協会会員、市教委)
	市川二三夫	(長野県考古学会員)
調査補助員	小口達志、小松 学。	
参加者	赤羽喜巳男、青木豊子、青木智子、青木玲子、今井今朝人、小沢甲子郎、川上奈美江、上條鉢子、小松重久、小松義丸、小松静子、小松幸美、小松照雄、小松信章、小松知子、桜井洋子、澤口ハルミ、佐倉元一郎、高橋島億、高橋阿や子、中野やすみ、中野善一、中村洋子、藤松謙一、保高愛子、松下おもと、山口仲司、吉野宗治、吉江正男、吉江さかえ、米庭さだゑ、渡辺 明、柳沢 一、小松弘一、藤森千秋、稻葉敏夫、市川きぬえ、村山 明、村上久男、横山知咲、古厩馨子、中村ふき子、太田正子、一ノ瀬 文、足立幸子。	
事務局	市教委総合文化センター所長	清水良次
	〃 文化教養担当課長	横山哲宣
	〃 文化教養担当副主幹	三澤 深
	〃 平出遺跡考古博物館館長	小林康男
	〃 平出遺跡考古博物館学芸員	鳥羽嘉彦
協力者	塩尻東土地改良区理事長	平林袈裟男
	塩尻東土地改良区工事委員長	笠原和晃
	塩尻東土地改良区理事(柿沢地区長)	笠原 進
	〃 (金井地区長)	小林高茂
	〃 (塩尻町地区長)	小沢龟子男
	塩尻東土地改良区柿沢南地区補助監督員	笠原春人
	塩尻東土地改良区事務長	保高紀保
地権者	上条成実、武居常雄、武居恒雄、小松 真、桑原 優、中村寛男、二木嘉晴、村上通雄、小沢 勝、上条新二、上条憲司、沢口恭治、一ノ瀬速人。	

第3節 調査日誌

- 昭和63年5月10（火）晴 バックホーとブルドーザーによる表土除去。調査区東側を平均40cmの厚さで削平。北側で住居址と思われる落ち込みを数ヶ所検出。器材搬入。
- 5月11日（水）晴 昨日に引き続き重機による表土除去。器材搬入。周辺の表面踏査。
- 5月12日（木）雨のち晴 重機休み。午後器材搬入。ブレハブ、トイレを現地に設営。
- 5月13日（金）曇時々小雨 本日より発掘作業開始。事務局より挨拶および発掘日程、作業方法等の説明があったのち、器材準備、テント設営。調査区東側よりジョレンによる遺構検出作業を開始する。風雨と寒さで作業難行する。塩尻日報記者來訪。
- 5月14日（土）曇 東側を昨日に引き続き検出作業。住居址と思われる落ち込みを数軒発見し、縄文時代前、中期、弥生前期土器、石鎚、打製石斧が出土する。調査区南東隅にみられる大形の円形落ち込みに十字のトレーナーを設定する。
- 5月15日（日）定休日。
- 5月16日（月）晴 一昨日に引き続き東側の遺構検出作業を行う。住居址、小豎穴のプランが多数見えられたが、中央付近は擾乱が著しい。十字トレーナーの北隅で住居址の壁および床の一部を検出したため、トレーナーをベルトに切り替え、全面掘りとする。
- 5月17日（火）晴 東側の遺構検出作業をほぼ終了し、中央へはいる。5m間隔のクイ打ちを終了し、全グリッドを設定し終わる。
- 5月18日（水）晴 昨日に引き続き中央域と西側の遺構検出作業。西側には住居址らしき落ち込みは確認されず、多数の小豎穴と東西方向の溝を検出する。
- 5月19日（木）晴 西半域の検出作業続行。東半域と比べて住居址の激減が特徴であるが、小豎穴はむしろ濃密である。溝の輪郭が次第に明確になる。
- 5月20日（金）晴 西半域の検出作業続行。住居址の検出がほぼ終了する。台地縁辺部に密集する小豎穴群については、検出面が荒れているためやや不明確な状態になっている。南東隅の落ち込み部では中位層まで掘り下げが進行したが、ここで著しい遺物包含層にあたる。縄文時代早期から前期にかけての複合遺物である。
- 5月21日（土）雨天中止。
- 5月22日（日）～25日（水）会計検査があり現場作業休み。
- 5月26日（木）晴 休みが長かったため午前中もう一度、遺構検出作業を行う。南西隅の落ち込み部では遺物の出土量が多くなったため、ジョレンを移植ゴテに代えて掘り下げを続ける。調査区北東隅から住居址の掘り下げを始める。
- 5月27日（金）晴 第1号住居址、タタキの床面を確認。中央付近に埋ガメが出土。セクション図を測図し、ベルトをはずす。第2号住居址、床面および壁を確認。平面プランは検出時のプランとかなりくい違いがあり、著しい擾乱を反映していた。第3号住居址、掘り込みが深く底に

良好な床面を確認。南側隅落ち込み部、北壁沿いに検出されていた住居址の床面を精査していたところ高さの異なる床面を確認し、2軒の重複の可能性を伺う。

○5月28日（土）曇のち晴 第1号住居址、床面精査。第2号住居址、南壁が予想以上に張り出し、隅丸長方形プランとなる。セクション図測図。第3号住居址、セクション図測図。ベルトをはずしたところ床面中央に地床炉確認。第4号住居址、壁が浅いためセクション図をとらずベルトをはずす。床面は比較的良好であるが、柱穴、炉などの施設なし。

○5月29日（日）定休日。

○5月30日（月）晴 第1号住居址、平面図測図、写真撮影。第2号住居址、遺物取上、床面精査。第3号住居址、遺物取上、壁外柱穴を確認。第4号住居址、遺物取上、平面図測図、写真撮影。

○5月31日（火）晴 第2号住居址、床面精査、地床炉確認。第3号住居址、平面図測図、写真撮影。第8号住居址、セクション図測図。I・J-3南北ベルトセクション図測図。

○6月1日（水）曇 第1号住居址、埋甕炉セクション図測図。第2号住居址、平面図測図、写真撮影。第8号住居址、遺物取上。第9号住居址完掘。小豎穴群掘り下げ開始。

○6月2日（木）雨天中止。

○6月3日（金）雨天中止。台風2号の影響。

○6月4日（土）第8号住居址、写真撮影。第9号住居址、遺物取上、写真撮影。第11号住居址、床面に石圓炉を確認。第12号址、遺物取上。

○6月5日（日）定休日。

○6月6日（月）晴 第7号住居址、遺物取上。第10、11号住居址、セクション図測図。第14号、28号小豎穴、縄群写真撮影。小豎穴群、セクション図測図。

○6月7日（火）晴 第5号、6号住居址、遺物取上。第10号、11号住居址、遺物取上、平面図測図。第28号小豎穴、集石実測、写真撮影。第71号小豎穴の底から縄文時代晚期の土偶出土。

○6月8日（水）曇時々小雨 第11号住居址、写真撮影、炉掘り込み半截。第12号住居址、平面図測図。小豎穴群、セクション図測図。本日梅雨入り。

○6月9日（木）曇 住居址、小豎穴掘り下げ。一昨日出土した人骨の掘り出し、鑑定を信州大学医学部西沢寿晃先生に依頼。推定年齢7～8才で縄を数個載せる座屈葬の形態をとる。縄埋設状態写真撮影。

○6月10日（金）晴 小豎穴群掘り下げ、セレクション図測図。人骨埋設状態平面図測図。中日新聞、塩尻日報來訪。

○6月11日（土）晴 人骨、バインダーで固定し取り上げ。ロームマウンド、実測、遺物取上。小豎穴群、掘り下げ、遺物取上、セクション図測図。テレビ松本、読光新聞來訪。

○6月12日（日）定休日。

○6月13日（月）晴 小豎穴群掘下、セクション図測図。南東隅落ち込み、東西セクション図測図。

- 6月14日（火）晴 第11号住居址、石圓炉セクション図測図、写真撮影。小豎穴群掘下、セクション図測図、平面図測図測図。第86号、135号小豎穴群実測。
- 6月15日（水）晴 小豎穴群掘下、セクション図測図測図、平面図測図。第161号小豎穴で骨出土。
- 6月16日（木）曇 小豎穴群掘下、セクション図測図、平面図測図。第58号、59号小豎穴群群実測。
- 6月17日（金）曇 小豎穴群セクション図測図、平面図測図。南東隅落ち込み、南北セクション図測図。
- 6月18日（土）担当者の都合により現場作業休み。
- 6月19日（日）定休日。
- 6月20日（月）曇 小豎穴群掘下、セクション図測図、平面図測図。溝掘り下げ。
- 6月21日（火）晴 小豎穴群下、セクション図測図、平面図測図。第161号小豎穴出土の骨、取り上げ。溝掘り下げ、掘り込みが浅いため底が露呈し始める。南西隅落ち込み、立位の完形土器、半截し実測。
- 6月22日（水）晴 第13号住居址、炉半截、床面に出土した一括土器の写真撮影。第14号住居址、床面および一部壁を確認。小豎穴群セクション図測図、平面図測図。
- 6月23日（木）曇 小豎穴群遺物取上、平面図測図。南東隅落ち込み、底付近から黒曜石片数点出土。調査区全体図測図。
- 6月24日（金）雨 雨天中止。
- 6月25日（土）雨 雨天中止。
- 6月26日（日）定休日。
- 6月27日（月）曇のち雨 第14号住居址、セクション図測図。溝セクション図測図。小豎穴群、平面図測図。曇、降雨となつたため作業を中止する。
- 6月28日（火）曇 第14号住居址、溝、小豎穴群、南東隅落ち込みの平面図測図。調査区全体写真。器材片付、撤収作業。本日にて、現場における全調査日程を終了する。

整理作業は、7～2月、平出遺跡考古博物館において実施された。出土品、記録類の整理、報告書の図版作成、原稿執筆作業。

第4節 遺跡の状況と面積

遺跡名	場所	現況	種類	全体面積	事業対象面積	最低調査予定面積	調査面積	発掘経費
五輪堂	塙尻市大字金井 332-2番地外	畠地	包蔵地	7,000m ²	7,000m ²	1,000m ²	5,300m ²	6,500,000円

第1表 発掘調査経過表

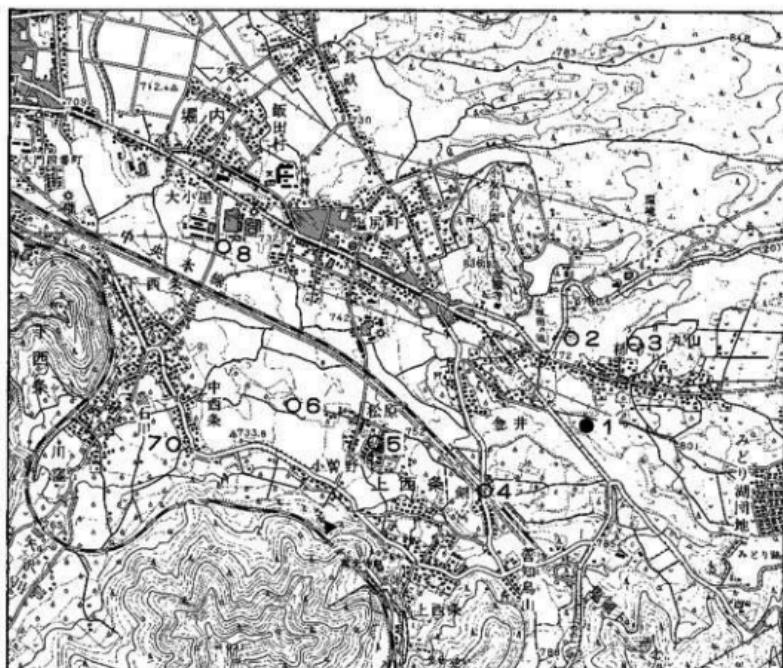
月 遺跡名	5	6	7~2	主な遺構	主な遺物	
五輪堂	10 発掘	29 遺物整理 図面作成 原稿執筆		繩文時代早期住居址 繩文時代前期住居址 繩文時代中期住居址 繩文晩~弥生中期初住居址 小豈穴 溝	1 2 3 8 221 1	繩文時代 土器、石器 弥生時代 土器、石器

第II章 遺跡周辺の環境

第1節 自然環境

塩尻東地区は塩尻市街地の東側を流れる田川から東は塩尻峠まで、南は伊那路へ連絡する善知鳥峠までを地区域としている。ここは中山道（国道20号線）と三州街道（国道153号線）の分岐点として交通の要衝地となり、塩尻宿を中心として繁栄してきた。

地形的にみると塩嶺山塊に展開する広大な西向山麓斜面と田川によって形成された扇状地形か



1:25,000

500m 0 500 1000 1500

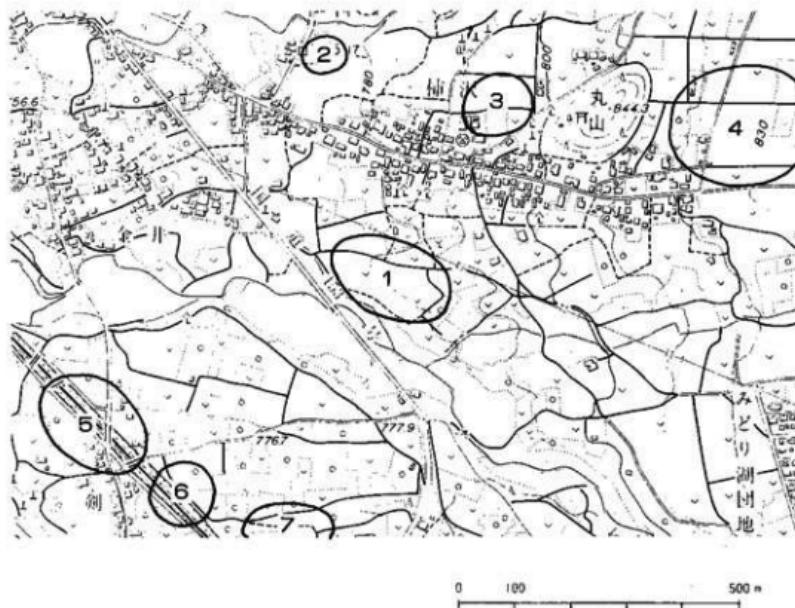
- 1.五輪堂
- 2.中島
- 3.柿沢東
- 4.岩畠・剣ノ宮
- 5.焼町
- 6.田川端
- 7.三峠西
- 8.砂田

第1図 五輪堂遺跡位置図

らなり、その中を數本の小河川が開折流下している。扇状地は約4.5km、幅2kmの広大な規模を持ち、その扇端は下西条西福寺の付近から棧敷、入道部落に至る狭長な低窪地を挟んで奈良井川扇状地（桔梗ヶ原台地）に連なっている。標高は扇頂で900m、扇端で710m、平均斜度3°である。

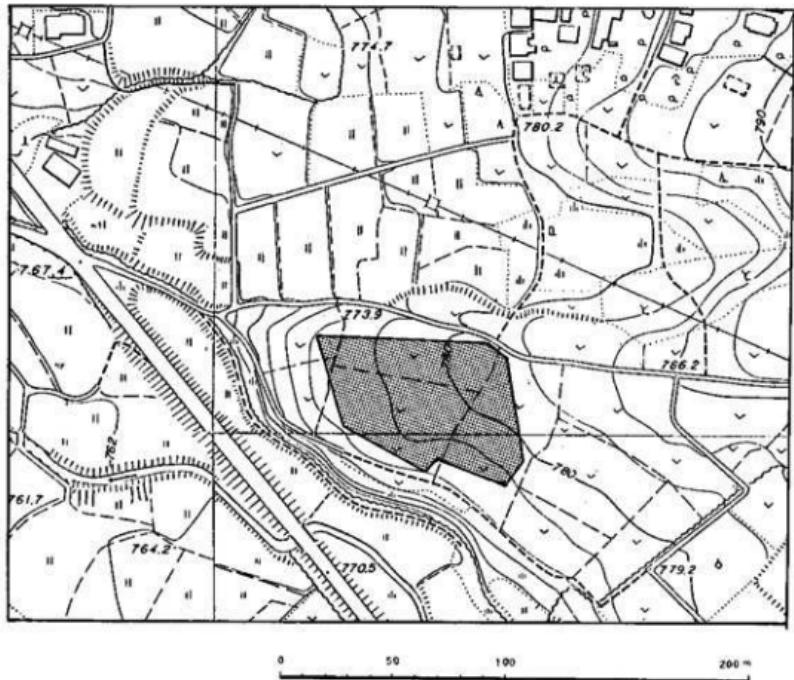
田川は東山山麓に源を発しており、塩尻峠の山間渓谷を西へ下り、中・下西条周辺で樅現沢川、四沢川、矢沢川などを集めながら下西条の北側で向きを北に変え、松本平の東側を一直線に北流し奈良井川に合流している。みどり湖より上流では極めて深い谷を形成しているだけの裁頭扇状地であるが、湖より下流では地盤隆起に伴ない浸食量が大きく、一種の開析扇状地を形成している。田川沿いに発達するこれらの台地の縁辺部には今回の五輪堂遺跡をはじめとして、柿沢東（柿沢）、峯畠・剣ノ宮（上西条）、焼町（上西条）、田川端（中西条）など数多くの市内を代表する遺跡が密集しており、古代よりかなり好条件な立地環境であったと考えられる。

五輪堂遺跡は柿沢集落と国道153号線に挟まれた丘陵上に位置する。ここは南側を田川に、北側を柿沢集落との間に走る谷地形（現在、表流水は流れていない）によって開析された東西に延びる尾根状地形となっており、西端は国道に面してやや急峻な斜面となり落ちている。また東側は



1.五輪堂 2.中島 3.柿沢東 4.大原
5.剣ノ宮 6.峯畠 7.青木巾

第2図 遺跡範囲図



第3図 調査地区図

次第に緩く上り勾配となっており、上方にみどり湖団地が広がっている。遺跡の展開している箇所はこの丘陵上の先端に近い南西向斜面であり、ここからは金井、上西条の集落を眼下に東塙尻駅付近の南部山麓を正面に臨むことができる。

発掘地点の標高は776～782mで、田川の現河床との比高差は約12mである。地形は概ね北東隅が最も高く南西方向へ緩く傾斜する単純地形をなしているが、一ヶ所、南東隅に擂鉢状を呈する谷地形がみられる（第5・6図）。後章で述べるようにこの地形の斜面には住居址、小窓穴などが設けられており、明らかにそれらが構築される以前の自然地形と推察される。底付近の覆土はかなり油臭の漆黒土となっており、湿润な状態に置かれていたことを物語っている。またここは上方からの遺物の流入量がおびただしく、一種の「土器だまり」となっていた。

第2節 周辺遺跡

今回発掘調査された五輪堂遺跡の所在する塙尻東地区は、松本平でも稠密な遺跡群を有する地域の一つである。ここには先土器時代から中世にかけての数多くの遺跡が田川流域を中心として広く分布している。以下時代を追って遺跡の在り方を概観してみたい。

先土器時代 昭和59年に発掘された青木沢が最も古く、大いに櫛の神、柿沢で尖頭器、ナイフ型石器、石刀などが発見されている。

縄文時代 草創期時代では青木沢、柿沢東で神子柴型石斧、尖頭器が出土している。前期になると田川端で住民址が、宗張で集石が発見されている。中期に入ると遺跡の数も増え、焼町、柿沢東、中島ではそれぞれ住居址が検出され、中でも金沢東では環状集落や敷石住居址が発見されている。やがて後期になると遺跡数は急激に減少する。御堂垣外で該期の住居址が4軒発見されているにとどまり、柿沢、ちんじゅでは遺物の出土のみが報告されている。

弥生時代 この時期になると田川沿いに遺跡が密集し、河川との深いつながりを示している。ちんじゅ、鐵宮、砂田、田川端など代表的な遺跡が多く、とりわけ田川端では40軒もの住居址が検出され数多くの遺物が出土した。その他に久能井、西福寺前、銅鐸を出土した柴宮などが知られている。

古墳時代 櫛の神、記常塚、鐵宮と田川沿いに5基の古墳が築造されており、前時代の繁栄ぶりを踏襲しているが、該期の集落跡はまだ発見されていない。

奈良平安時代 奈良時代の遺跡はまだ見つかっていない。平安時代では田川端、高山城、栗木沢、樋口、中島で住居址が発見されている。田川端では数多くの土器、鉄器類、漆書土器が出土した。

中世 中世に属する遺構も微少ではあるが徐々に解明しつつある。中島の館跡、砂田の掘建柱跡、剣の宮の墓壇など多様な遺構が検出され、中世の資料も次第に整いつつある。

第III章 遺跡の概要

第1節 遺跡の概要

今回発掘調査の対象となった五輪堂遺跡は、塙尻市東部の金井地籍に位置し、田川と四沢川によって形成された複合扇状地の扇端部に存在する。発掘地区は田川を眼下に臨む南西向きの緩斜面に設定され、調査面積は5,300m²に及んだ。

調査の結果、遺構には縄文早期末から弥生中期初頭にかけての4時期14軒の堅穴住居址と小堅穴221、溝1が検出され、これらの遺構に伴って縄文土器、石鎌、打製石斧、ピエスエスキーユ、土偶、弥生土器等の遺物が出土した。

住居址は縄文早期1、縄文前期2、縄文中期3、縄文晩期末～弥生中期初頭8という内訳であり、特に縄文晩期末～弥生中期初頭の時期はこれまで市内でも出土遺物は数例あったが、住居址の発見は初めてであり、しかも状況からかなりの集落の存在が伺えよう。小堅穴もやはり5時期に分類され、上記4時期の他に人骨が出土した近世の小堅穴（墓壙）が検出されている。

遺物は、検出された遺構数の割には量的に少ない感があった。おそらく表土の流出や耕作による搅乱等でかなり消失しているものと思われる。しかし、縄文早期、縄文前期末～中期初頭、縄文晩期末～弥生中期初頭のそれぞれの土器資料は稀少価値があり、注目に値するものである。

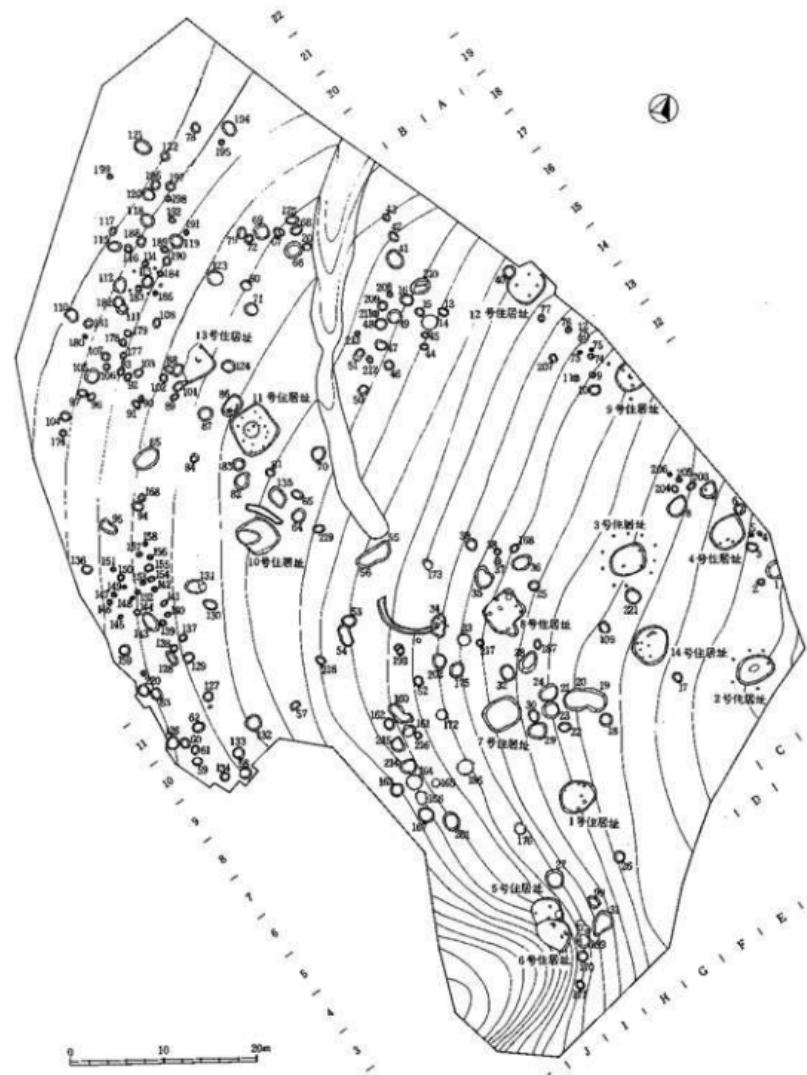
以上、今回の調査結果についてその概要を記した。

第2節 発掘区の設定

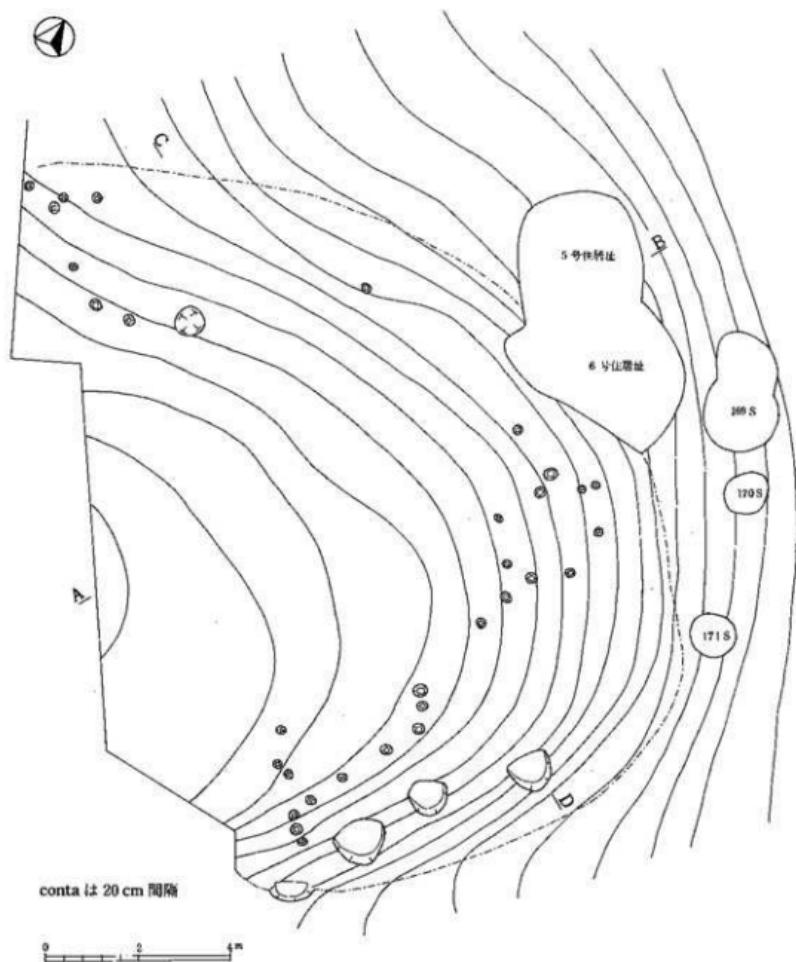
遺跡の立地する丘陵は南北両側を谷によって開析された東西方向に延びるやせ尾根を形成しており、先端はやや急峻な崖をもって国道153号線に臨んでいる。昨年度は国道より西側であった圃場地区が今年度は東側に移り、丘陵が全て圃場対象地区となった。このため事前にこの丘陵全体の詳細分布調査を行なったところ、丘陵先端の南西向きの緩斜面が遺跡の中心であることが判明し、調査地区間にみられる範囲を今回の調査対象地区とした。

発掘調査に先立つ試掘調査によれば、調査区のうち最も高所の北東域が約60～70cmの表土厚となっているが、斜面方向に漸次薄くなり、西側および南側の丘陵縁では約20cm厚を測るにすぎない。調査地区内のローム面は比高差550cmの急勾配となっているところから、かなり表土の押し出ししがあったものと推察される。

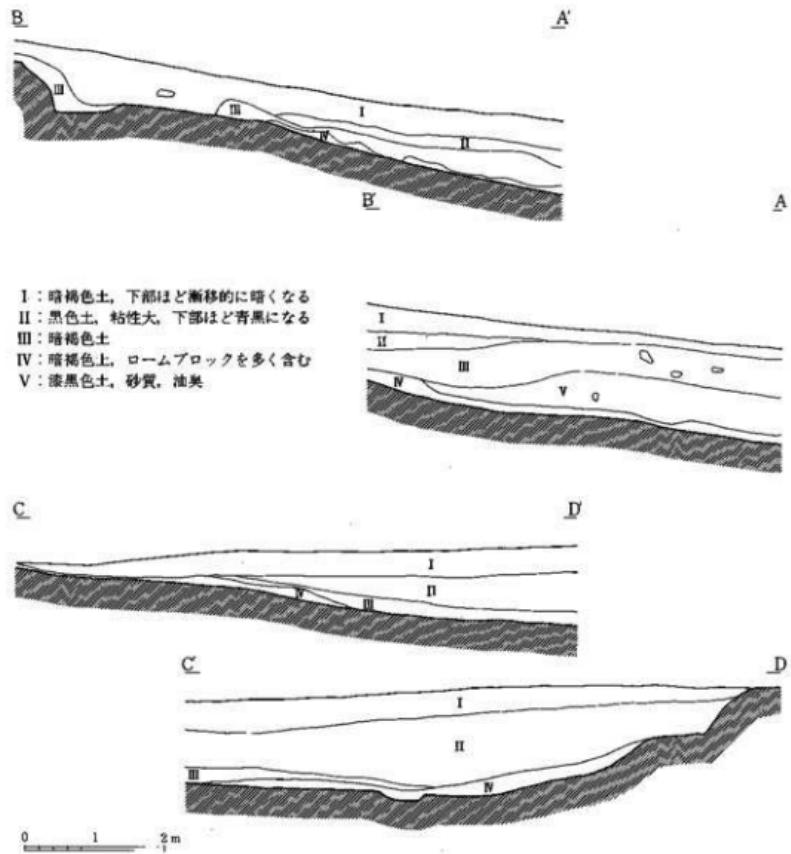
調査はまずバックホーとブルドーザーによる表土除去を行なったのちグリッドを設定した。グリッドは5m間隔で北から南へ向かってA～M、東から西へ向かって1～22のクイを設けた。発掘総面積は5,300m²である。



第4図 五輪堂遺跡全体図



第5図 南東域の地形



第6図 推跡状地形セクション図

第IV章 遺構・遺物

第1節 住居址

第1号住居址

遺構 本址は発掘区東側のG・H-5・6グリッドに位置する。本址を境に南側は斜面が急峻になり別項で述べる調査区南東隅の棱鉢状地形へ続いているが、本址はちょうどその上方縁にある位置に立地している。

プランは楕円形の平面形態を有し、N-18°-Eの主軸方向を指す。規模は南北410cm、東西364cmを測る。

壁はほぼ垂直に掘られているが浅く、各壁高とも8cm前後を測るにすぎない。

床面は堅く締っているが凸凹が著しく、また全体的に西側へ傾斜しており、その比高差は21cmを測る。床面上にはピット、周溝等の施設はみられない。

床面中央には深鉢の上半部を再利用した埋甕炉が出土し、付近には若干の焼土が散在していた。

遺物 出土遺物は少く、埋甕炉体土器のほかに21図に示したわずかばかりの土器片が得られたにすぎない。21図1は、深鉢形土器の胴上半部で、埋甕炉に使用されていたものである。口径23.7cm、現在高16.3cm。頭部でくの字形に強く外反する器形をもち、口唇部は直立する。文様は、胴上半部に集約され、胴下半は繩文が施文される。口縁部は状線による格子目、頭部は、横位の平行沈線文と縦位の密な沈線文とを組み合わせている。赤褐色を呈し、胎土に石英、長石を含む。焼成は良い。21図1は、浅鉢形の破片で、口縁内部に押し引き文を、口唇部に刻み目を入れている。2~4は、混入の前期諸磯式の破片である。石器の出土はない。

本址出土の遺物は、繩文中期初頭、九兵衛尾根II式に該当しよう。

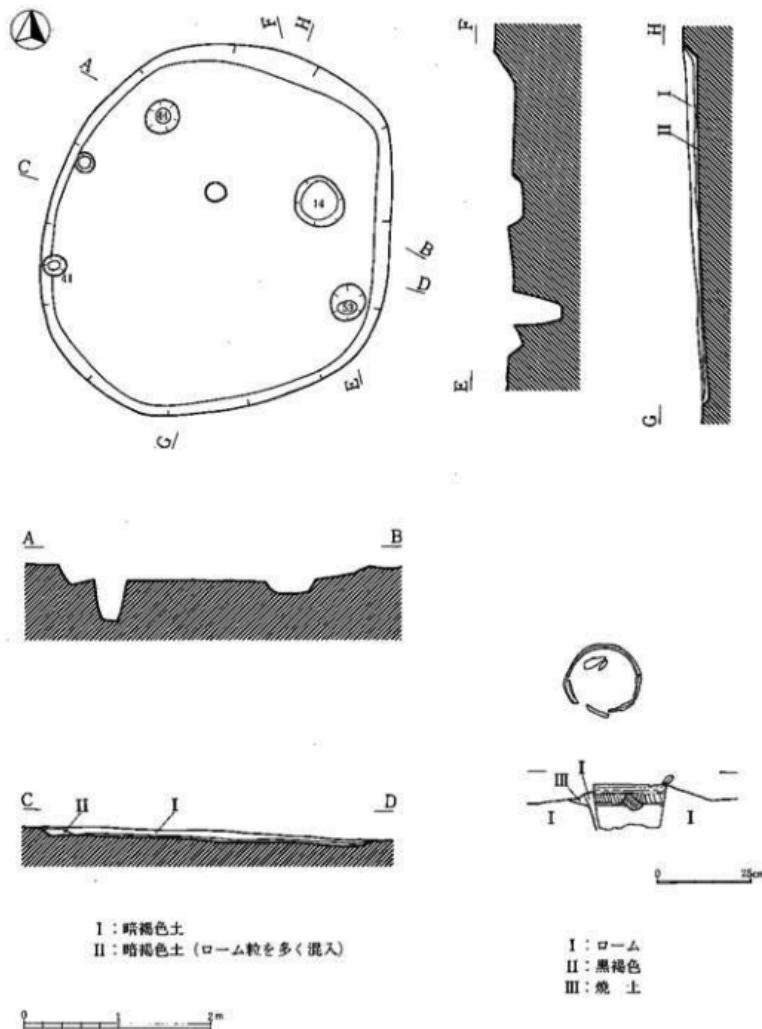
第2号住居址

遺構 本址は調査区北東隅に位置し、C-5・6グリッドに存在する。本址の西側には第14、3、4号住居址がそれぞれ独立して存在している。

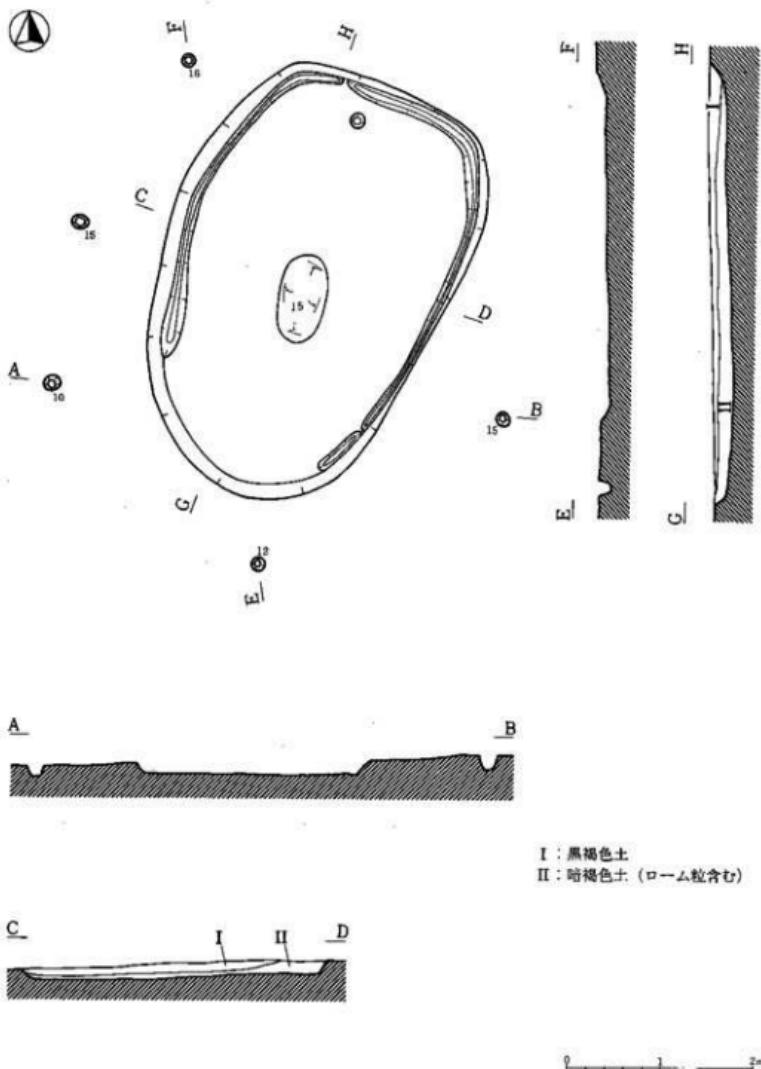
プランは楕円形を呈し、N-35°-Eの主軸方向を指す。規模は東西360cm、南北300cmを測る。壁は全周にわたり良好な面を残し、壁高は各辺10~17cmを測る。

床面は全体に平坦でよく踏み固められている。周溝は壁に沿って存在し、南側が一部欠陥している。幅5~8cm、深さ3~5cmを測る。ピットは床面上には北壁下に1基検出されたのみであるが、同規模のものが壁外に5基検出された。配置にやや規則性が伺われるが、柱穴的な性格を持ち得るかは不明である。

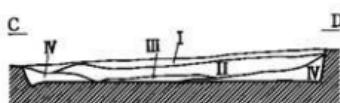
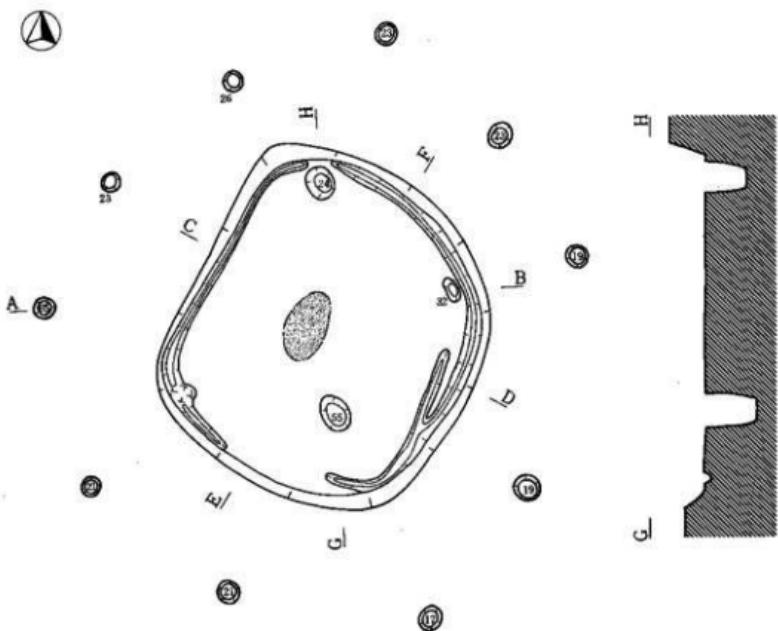
炉は床面中央に掘込炉が設けられている。深さ15cmで、覆土中に焼土が介在している。この焼



第7図 第1号住居址



第8図 第2号住居址



I : 黒褐色土
 II : 暗褐色土 (ローム粒少し含む)
 III : 黒褐色土 (ローム粒含む)
 IV : 暗褐色土 (ローム粒を多く含む)



— 1 —

第9図 第3号住居址

土中からは10数点の黒曜石フレークが出土している。

遺物 本址出土の遺物には21図5・6の土器小片が得られたのみである。ともに条痕文を施す。縄文晩期後半から弥生中期初頭に位置づけられよう。

第3号住居址

遺構 本住居址は調査区東側のC・D-8・9グリッドに位置し、東隣りには第14号住居址が、北隣りには第4号住居址が存在する。

プランは隅丸方形を呈し、N-40°-Eの主軸方向を示す。規模は南北360cm、東西320cmを測る。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、堅緻で良好な面をもっている。壁高は全体に高く、深い所で17cm、最も深い所で41cmを測る。

床面はよく踏み固められ堅緻であり、若干の凸凹が見られたもののはば平坦である。ピットは床面上には3基検出されているが、柱穴という観点からみればむしろ屋外のものに注目される。深さのはば一定したピットが住居に沿って計10基、規則性をもって配してあり、屋外柱穴の可能性が強い。壁下にはほぼ全周する周溝が検出された。深さ3~5cm、幅15cm程で一部、枝分れや途切れているもののしっかりした周溝である。

炉は床面中央に南北40cm、東西30cm、厚さ8cmの規模で焼土が堆積しており、これが地床炉と思われる。

本住居址は小型ながら形態、壁、炉、柱穴などが極めて整っており、今回検出された住居址の中では最も遺存状態がよかつた。

遺物 遺物の出土は極めて少ない。21図7~11に示した5片の土器片が出土したにすぎない。11は布目痕をもつ底部破片。7は幅広の条痕文、8は口唇部下の隆帯びに圧痕をつけ、9は縄文を施す。10は波文をもつ壺形土器。

本址出土の遺物は、弥生中期初頭に位置づけられる。

第4号住居址

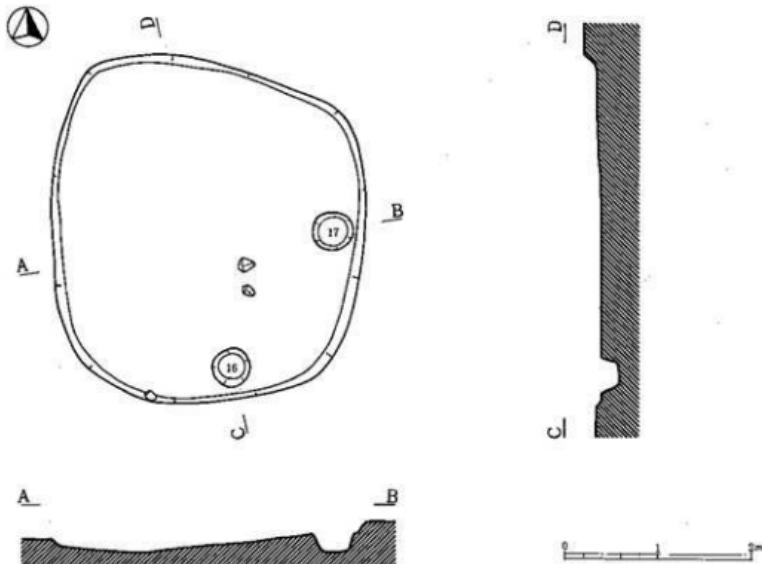
遺構 本址は調査区北側のA・B-7・8グリッドに位置し、道路のすぐ南側に存在する。付近は表土が薄いため耕作による攪乱が検出面まで及んでおり、住居址の壁上部が削平されているものの、床面にまでは及んでいなかった。

プランはやや北西隅の張り出した隅丸方形の平面形態を呈し、ほぼ南北の主軸方向を指す。規模は南北378cm、東西328cmを測る。

壁は垂直に掘り込まれており、全周にわたり各辺が10cm前後と浅い。

床面はゆるやかな勾配となっているのがほぼ平坦であり、よく踏み固められた堅緻な面を残している。ピットは床面上に2基検出されたが、性格は不明である。周溝は検出されなかった。

床面中央東寄りに握り拳大の礫が2個発見された。炉が確認されていないところから、あるいは



第10図 第4号住居址

は炉石の崩壊したものとも推察される。

遺物 本址出土の遺物は、21図12~15の4片の土器片が図示できる全てである。出土遺物は極めて少ない。12、13は胎土に纖維を含み、縦条体圧痕文を施す。13・14は纖維を含まず、表面にのみ条痕文を残し、比較的硬くしまった器壁を呈する。

本址出土の遺物は、繩文早期末の縦条体圧痕文系の時期の所産である。

第5号住居址

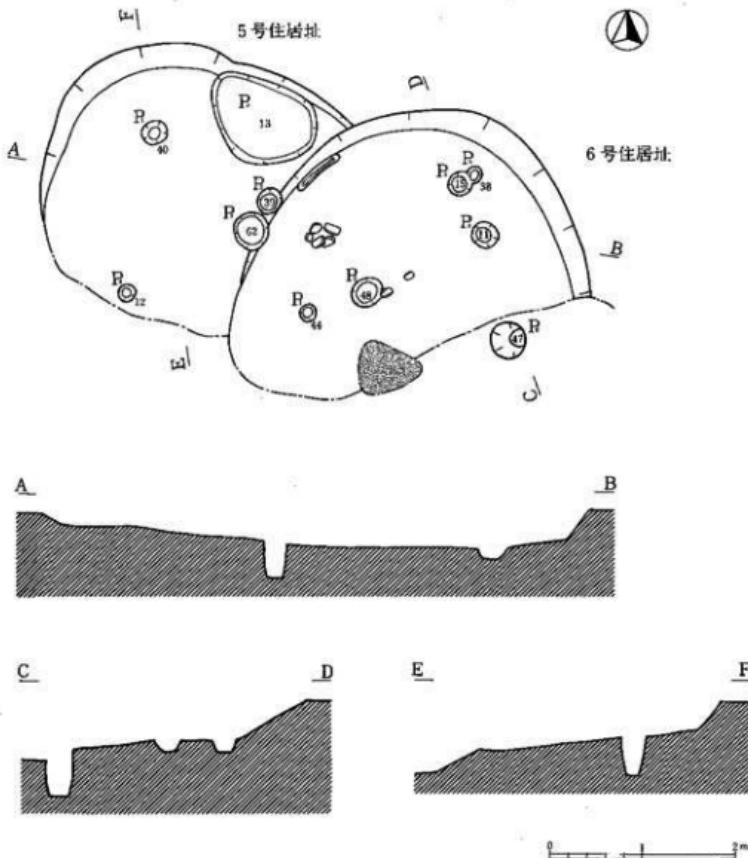
遺構 本址は調査区南東隅にあり、I-3、4グリットに位置する。付近は擂鉢状の自然地形を形成しており、その斜面はかなりの傾斜を持っている。本址と第6号住居址はその北側斜面の中腹に立地し、南側が共に流れているため、テラス状の形態を有している。第6号住居址は本址の東隣りに一部、重複し、本址を漸っている。本址は前述した擂鉢状の落ち込みの性格をえるために南北に設定したトレンチによって壁と床面が検出され、住居址と断定された。

プランは東側を第6号住居址によって、また南側を擂鉢状地形によって漸られているため全容を把握することはできないが、楕円もしくは円形の平面形態を有すると思われる。確認規模で東西290cm、南北240cmを測る。

壁は斜面上方側の北壁がほぼ垂直に掘り込まれた良好な壁面を残している。北壁で27cm、西壁で24cmの壁高を測る。

床面はよく踏み固められ堅緻な床面をもつ。概して平坦域をなしているが、北から南へ向かって緩く傾斜しており、47cmの比高差がある。主柱穴は4本と考えられP₁、P₂が該当する。本址北壁沿いのP₃については性格不明である。また炉、周溝等の施設も発見されなかった。

遺物 本址出土の遺物は、21図16~21の土器片がある程度で、出土量は多くない。17は、繊維を含み、条痕文をもつ縄文早期末に位置づけられるもの、18、20は刻みを持つ同心円状の浮線を



第11図 第5・6号住居址

もつ縄文前期諸磯C式である。16・19は縄文中期初頭の九兵衛尾根II式で、16は小さな山形を呈する口縁形態をなし、口唇部に刻み目を、口辺に交互刺突と縦位の平行沈線を施す。口縁内面にも同心円、平行線が施されている。19も、16と同様の文様をもつ。

本址は、諸磯C式を主体とすることから、この時期に比定される。16・19の中期初頭土器は、1号址付近からの流れ込みと考えられる。

第6号住居址

遺構 本址は調査区南東隅のI・J-3グリッドにあり、第5号住居址の東隣りに一部重複で漸り合い関係になっている。トレンチ掘削の際、第5号住居址の壁および床面が露呈したため、トレンチをベルトに替え全面掘り下げを行なったところ、ベルトを挟んで高さの異なる床面が検出され、また壁の回りも不自然であったため第6号住居址の存在が明らかになった。

南側が擂鉢状地形により流れているためプランの全容は把握できないが、楕円形の平面プランを有すると思われ、確認規模で東西390cm、南北230cmを測る。

壁は北半球が残されており、ほぼ垂直に掘り込まれた良好な壁面をもっている。壁高は東壁30cm、西壁7cm、北壁24cmを測る。

床面は平坦でよく踏み固められているが、第5号住居址と同様に南傾へ緩傾斜をなしている。ピットは計6基検出されたが配列が不規則で主柱穴を確認することはできなかった。炉は中央西寄りに石囲炉が発見され、角礫5個を並べて構築している。また中央南寄りに床面上直10cmの高さで焼土塊が発見されたが本址に伴うものであるかは不明である。周溝は住居址北西隅の壁沿いに幅10cmのものが60cmにわたって検出された。掘り込みは2cmと浅い。

遺物 住居址としては、比較的多彩な土器が出土した。22図1は、鶴ヶ島台式の破片、2は条痕文をもつもので、3~7は、刻みを入れた隆縁、ボタン状貼付文を有する諸磯C式、そして8~11は押引文、三角陰刻文の中頃初頭土器である。

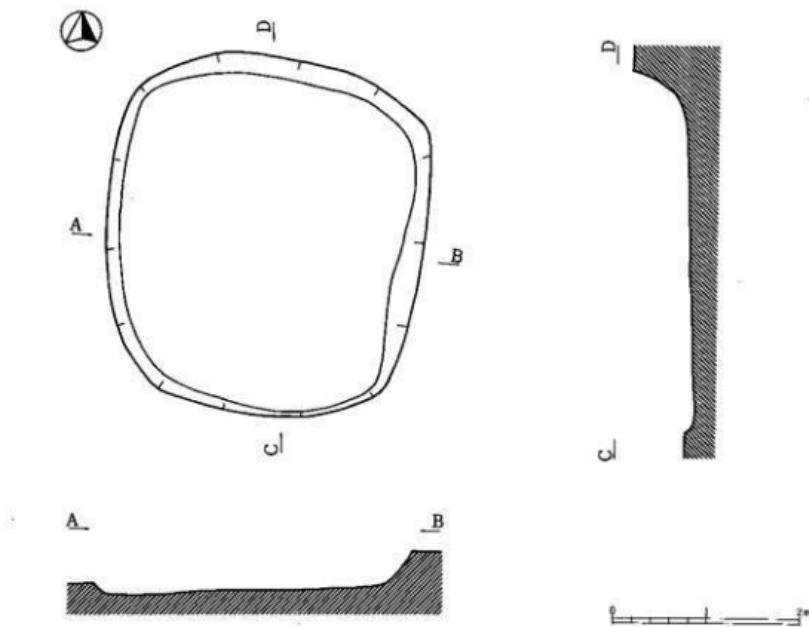
本址の時期であるが、諸磯Cないし九兵衛尾根式が出土しており判断に迷うが、量的には諸磯C式が上回っているため一応、諸磯C式期としておきたい。

第7号住居址

遺構 本址は調査区中央のH-7・8グリッドに位置し、北西側に第8号住居址が隣接している。遺構検出の際、ローム面に方形を呈する黒色の落ち込みが明瞭に検出されたため住居址の存在が伺えたが、床面がはっきりせず、出土遺物も僅少であったため住居址の確認が遅れた。

プランはやや南西壁が潰れた隅丸方形の平面形態を有し、南北380cm、東西340cmとやや小形の竪穴住居址である。主軸方向はほぼ南北を指している。

壁はほぼ垂直に掘り込まれており、壁高は東壁35cm、西壁11cm、南壁8cm、北壁54cmを測る。



第12図 第7号住居址

この壁高の著しい違いは遺構検出面の高さの違いに起因し、北東から南西方向へ比較的急な勾配をもっている。

床面は遺構検出面と同様に北東から南西方向へ傾斜しており、北高差は18cmを測る。またかなり起伏にとんでおり、軟弱なはっきりしない床面である。

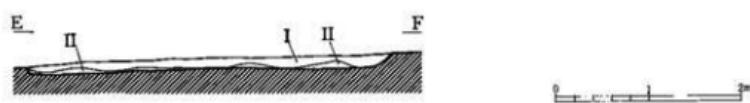
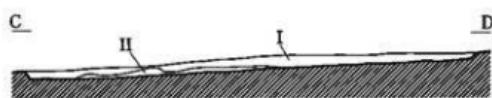
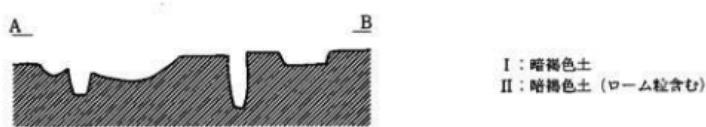
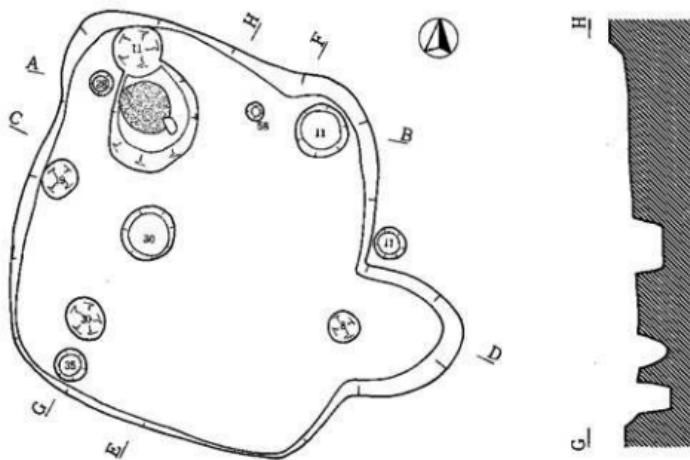
ピット、炉、周溝等は発見されなかった。

遺物 本址出土の遺物は少なく、22図13～16の4片が図示できたにすぎない。14は、口端に刺突を、そして下位には斜位の条痕を施す。磨消縄文が用いられている。13、16は粗い条痕文である。本址は、縄文晩期末から弥生中期初頭に位置づけられる。

第8号住居址

遺構 本址は調査区中央域にあり、F、G-9グリッドに存在する。遺構検出段階において隅丸方形の明瞭なプランが検出され掘り下げを行なった。壁が浅く、床面も起伏が激しいことよりやや住居址と断定する根拠が弱かったが、プランの形、ピットの存在などを勘案して住居址とした。

プランはやや不整な隅丸方形を呈し、南北410cm、東西370cmの規模を測る。住居址の東壁中央に張り出した部分がみられるが、床面が同じため住居址に不隨するものであるかどうかは不明で



第13図 第8号住居址

ある。住居址の主軸方向はN-15°-Eとグリッドの方向とはほぼ一致する。

壁はほぼ垂直に掘り込まれているが浅く、壁高は東壁13cm、西壁12cm、南壁8cm、北壁15cmを測るにすぎない。

床面は概して堅緻であるが、タタキによって縮った箇所はない。ピットは床面に10基みられるが、中には擾乱により形成されたと思われるものもあり、住居址に不隨するものは少ないと想われる。北西隅のピット内には炭を含む焼土塊がみられ、位置的にやや疑問が残るが、掘込炉の可能性が強い。

遺物 22図17~24の土器片と66図1の石鐵とが出土した。17は隆線風の沈線を、18は沈線による渦巻文と摩消繩文が施されている。19はボタン状の隆線と繩文を組み合わせている。20~24は条痕文施文の土器で、20・23・24が右斜位、21が横位、22が左斜位である。石鐵は、有茎鐵で、鋭利な定形品である。

本址の出土遺物は、繩文晩期末から弥生中期初頭に位置づけられる。

第9号住居址

遺構 本址は調査区北側のA・B-12グリッドに位置する。北側が調査区外となるため、南半部のみの検出となった。

住居址の全容が検出されなかつたためプランは用意には把握できないが、確認された壁より推してやや辺が張り出した隅丸方形を呈すると推察される。規模は東西300cmを測る。

壁はほぼ垂直に掘り込まれており、東壁が最も高く、以下、南壁、西壁と漸減する。これは表土が薄いため西側ほど削平を受けているものと考えられる。東壁18cm、南壁11cm、西壁6cmの壁高を測る。

床面は平坦でよく縮っている。ピットは東西に2基検出され、4本柱の主柱穴が推察される。炉は住居址中央に石囲炉が設けられている。床面に石を配し、そのまわりにロームを盛り上げて固定するといった独特的の構築方法を用いている。石は全て焼けているが、焼土、炭などはほとんどみられなかった。

遺物 遺物の出土量は極めて少ない。わずかに22図25・26の土器片と66図2の石鐵1が出土したのみである。25は深鉢形土器の頸部で、角押文を施文し、26は縦位への隆帯を付している。石鐵は、下半部を欠くが、粗雑な作りものである。

本址は、繩文中期前半、粗沢ないし新道式期に位置する。

第10号住居址

遺構 本址は調査区の中央西寄りに位置し、J-13・14グリッドに存在する。付近は耕作による擾乱痕が甚しかったが、ここは検出段階において明瞭な隅丸方形のプランが確認され住居址と

した。

プランは住居址の南東隅の張り出しが弱いためやや潰れた隅丸方形の形態をとり、主軸方向は東西を指す。規模は東西400cm、南北360cmを測る。

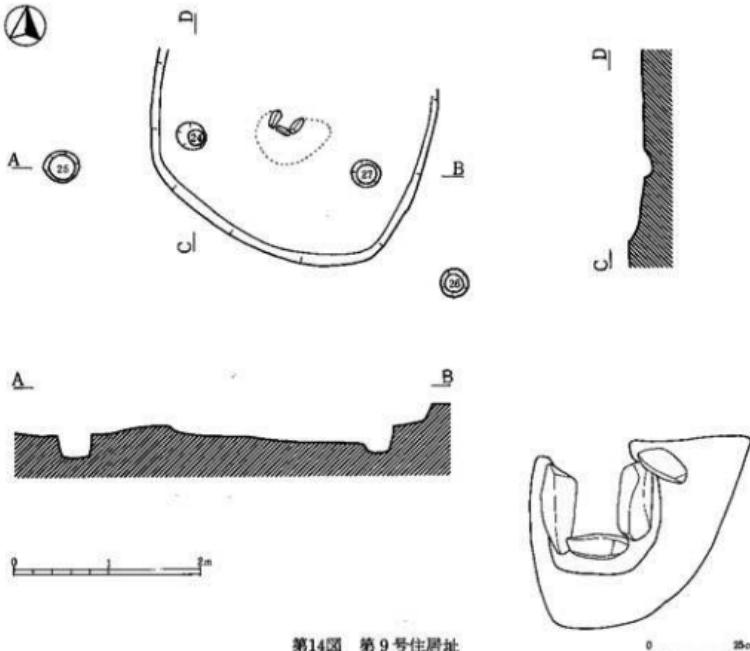
壁は垂直に深く掘り込まれており、凸凹の少ない良好な面を残す。壁高は東壁57cm、西壁38cm、南壁21cm・北壁36cmを測る。東壁高が突出するのは遺構検出面でのレベルが高いことによる。

床面は南北隅にタタキの良好な床面が発見されたが、図に示すように広がりはなく、他は一段上がって凸凹の激しい床面である。床面上にはピット、炉、周溝等の施設は確認されなかった。

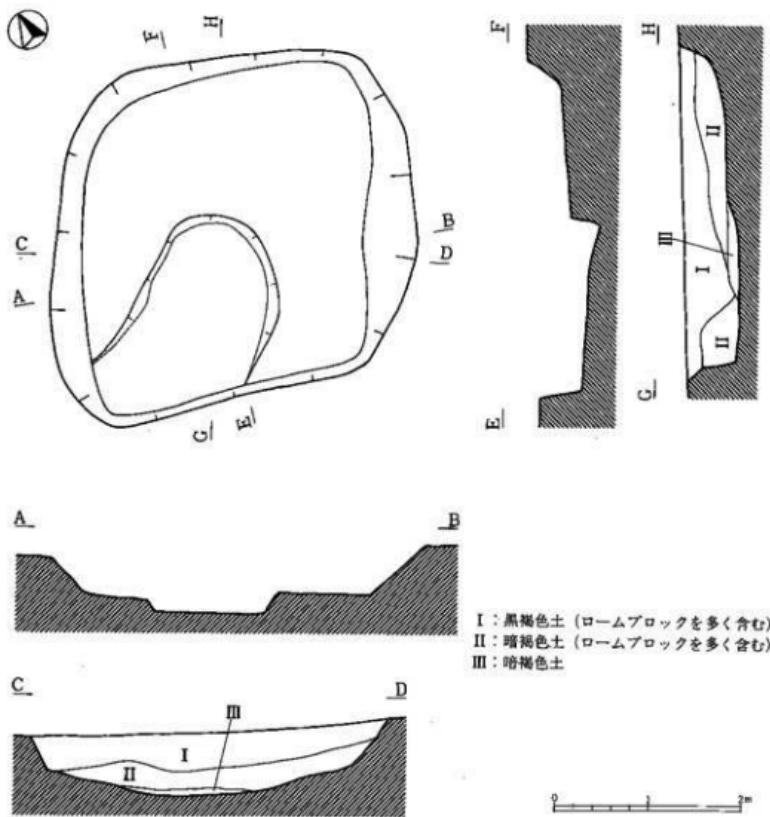
遺物 23図1は、壺形土器で鋸歯状の沈線文を、2は刺突文を施す。3~11は条痕文施文土器で、横位施文を主とする。他の住居址出土の遺物を比較すると、その出土量は多い方であるが、内容的には条痕文土器を中心とする単純なものである。

土器の他に、67図1に示した打製石斧がある。下半部を欠いた短冊形である。

本址の遺物は、縄文晩期末から弥生中期初頭に該当する。



第14図 第9号住居址



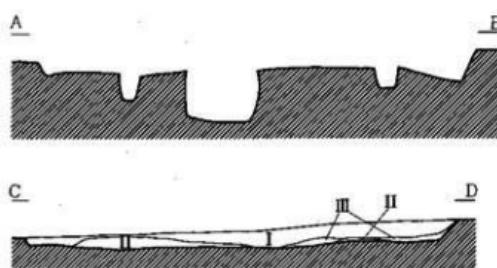
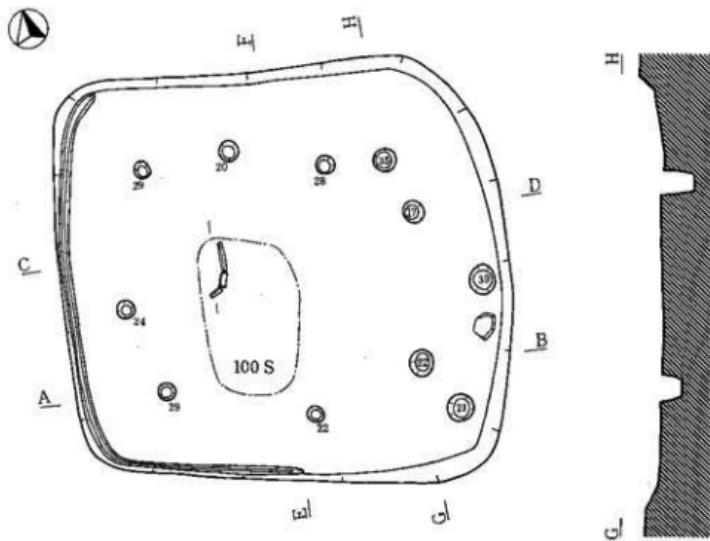
第15図 第10号住居址

第11号住居址

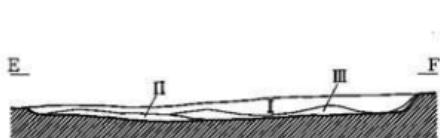
遺構 本址は調査区の西側にあり、H・I-15・16グリッドに存在する。遺構検出面で隅丸方形の明瞭なプランが検出され、掘り下げを行なったところ良好な床面が露呈したため住居址と断定された。

プランはやや東側が張り出した隅丸方形を呈し、ほぼ東西の主軸方向を指す。規模は東西480cm、南北440cmと調査区内で検出された住居址の中では比較的大型に属する。

壁はほぼ垂直に掘り込まれており、凹凸の少ない良好な面を有している。壁高は東壁22cm、西



I : 喀褐色土 (炭・焼土混り)
II : 焼土
III : 褐色土 (再堆積ローム)



I : 喀褐色土
II : 喀褐色土 (炭焼土を多量に含む)
III : 喀褐色土 (ローム鉱含む)



第16図 第11号住居址

壁15cm、南壁24cm、北壁16cmを測る。

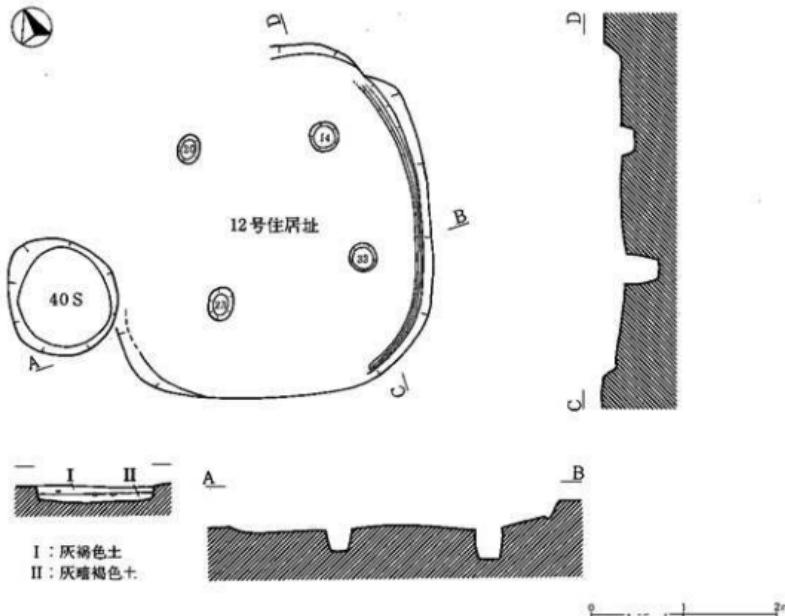
床面はやや西側へ傾斜をもつが、平坦で堅緻な面である。床面上には11基のピットが存在し、東壁沿いの2基を除くと、壁から80cm前後内側に円形状に配列している。主柱穴は40本柱である。周溝は西壁から南壁の中央まで設けられており、南壁沿いが深さ3cmを測るが、西壁の北寄りでは僅か1.5cmを測る浅いものである。

中央西寄りには板状の礫を立て構築した石匂炉が配されている。現存する礫は東側の3枚だけであるが、掘り込みは良好に遺存しており、焼土、炭が介在している。

本址の中央床下には第100号小堅穴が埋没している。本址の石匂炉がその直上に設けられていることから、本址が構築される以前に使用されたものだろう。

遺物 23図12~18の土器片が出土している。12は、隆線風の沈線と刻みをもつ小突起を施した深鉢である。13~18は条痕施文土器で、13、1417、18は縦位羽状条痕、15は横位、16は斜位の条痕を施している。

本地出土土器は、縄文晩期末から、弥生中期初頭に位置づけられる。



第17図 第12号住居址・第40号小堅穴

第12号住居址

遺構 本址は調査区北壁沿いに位置し、B・C-14・15グリッドに存在する。この北壁沿いは表土が薄く、擾乱が著しかったため検出段階では明瞭なプランは把えられなかった。このため覆土である黒色土をベルトを残して掘り下げたところ、良好なタタキの床面が露呈したため住居址と判断した。壁はあまり明瞭ではなかったが、周溝を伴う比較的わかりやすい東壁を追ったところ調査区外へ出たため、約1m調査区を北側へ拡張し住居の北壁を確認することができた。

プランは隅丸方形の平面形態を有し、南北376cm、東西340cmの規模を測る小形の住居址である。主軸方向はN-8°-Eである。

壁は比較的保存状態のよい東壁の他に、北壁と西壁の一部が検出されたのみであった。これは表土が薄いため耕作による擾乱が遺構に及んでおり、壁が崩壊したことによるものである。壁高は東壁で17cm、西壁で6cm、北壁で6cmを測る。

床面は水平でよく綺麗な良好な面であるが、長芋の筋が縦横模様をつくっており、とりわけ西側は起伏が激しくなっている。柱穴は4本であるが、やや不規則な方形を配している。周溝は東壁沿いにみられ、幅10cm、深さ2cmと浅いものである。炉は検出されなかった。

遺物 23図19~26の土器片と、66図3の石器が出土した。19は、厚口鉢口縁部であり、櫛状具による条痕文がみられる。20~25は、主として横位の条痕を持ち、20は口厚部に刺突を施している。26は無文土器。石器3は、基部が平基の三角形鎌。

本址出土の遺物は、縄文晩期末~弥生中期初頭に位置づけられる。

第13号住居址

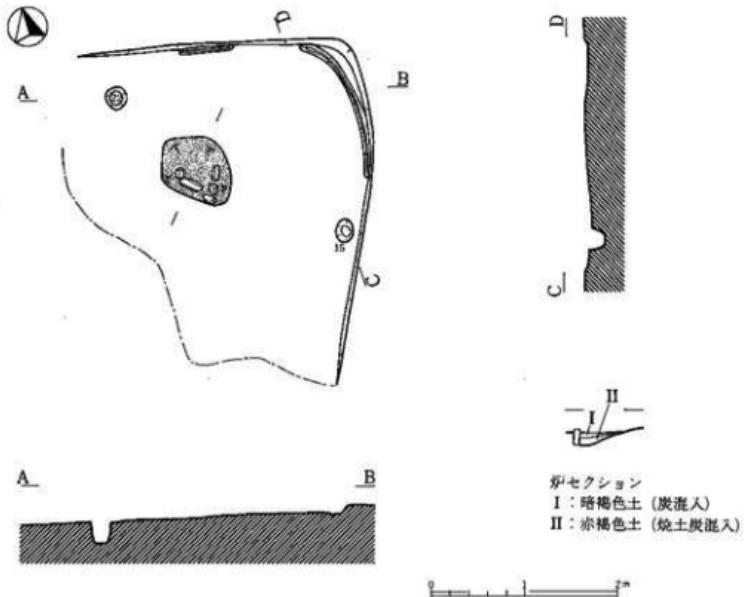
遺構 調査区の西側に位置し、I-17、18グリッドに存在する。付近は耕作による擾乱が著しく、本址の壁と含土がかなり削平されていたため、遺構検出の段階ですでにタタキの床面が局所的に露呈し始めた。ほぼ中央に石囲炉の存在を確認して住居址と断定した。

遺構は南西域半分が削平されているため住居址のプランは把握できないが、遺存する北東隅の壁から推察して隅丸片形プランを有するものと思われる。主軸方向はほぼ南北を指し、確認規模は南北340cm、東西320cmを測る。

壁は東壁と北壁の一部が検出されたが、共に軟弱でしっかりしていない。また壁高も極端に低く、それぞれ9cm、3cmを測るにすぎない。

床面は南西域が削平され、すでに消滅しているが、依存する部分についてはよく踏み固められた堅緻である。北東隅を基点に放射状に緩やかな傾斜をもっている。ピットは床面上に2基検出されたが配置から主柱穴を伺うことはできなかった。周溝は北壁及び東壁沿いに一部検出された。深さ2cmと浅いものである。

床面の中央北寄りには数個の礫を用いて石囲炉を構築している。含土が薄いため礫が一部散逸してしまっているが、南側はかろうじて原形をとどめている。掘り込みは5cmの深さをもち、焼



第18図 第13号住居址

土や炭が多量に混入していた。

遺物 28図2に示した土器底部と66図4のピエス・エスキーユとが出土している。2は、底径7.7cmで、細密条痕を全面施す。灰褐色を呈し、長石・岩片を含み、焼成は良い。縄文晩期末から弥生中期初頭に属しよう。

第14号住居址

遺構 本址は調査区の東側にあり、E-E-7グリッドに存在する。付近は長芋耕作による搅乱が著しく、遺構検出面が荒れていたためプランの検出が難しかったが、調査終了間近に行なった再精査により、かろうじて不明瞭なプランをえたものである。ベルトを残し掘り下げたところ堅緻な床面を確認し、住居址と断定した。

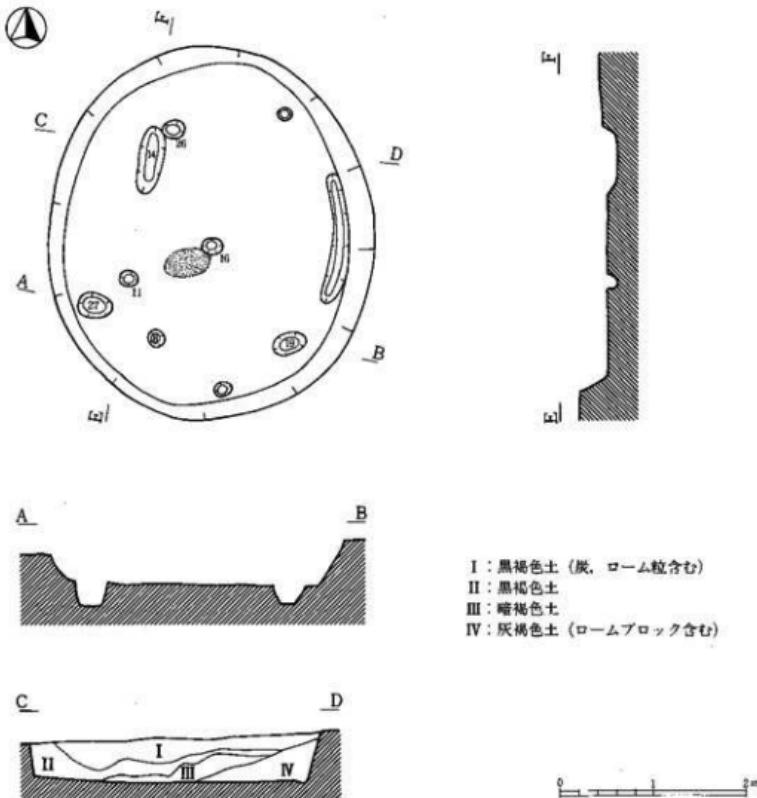
プランは梢円形の平面形態を有し、主軸方向はN-10°-Wを指す。検出面での規模は南北400cm、東西350cmを測る。

壁はほぼ垂直に掘り込まれており、締って堅緻である。壁高は本調査で発見された住居址中、最も深く、東壁61cm、西壁32cm、南壁27cm、北壁39cmを測る。東壁が著しく高いのは検出面が最も高く、床面が最も低いことによる。

床面はよく踏み固められ堅緻である。前述したように中央から東側にかけての部分が窪んでおり、最も高い北壁下床面との比高差は15cmを測る。ピットは床面上に数基あり、主柱穴は4本柱と思われる。周溝は東壁下に僅かに設けられており、幅20cm、深さ7cmを測る。

炉は床面中央に僅かながら焼土痕があり、地床炉の存在が伺える。

遺物 土器は細片が出土したのみで図示し得ないが、石器は66図5～7、67図2が出土した。5は、底辺にゆるい挟りを入れた石錐、6はつまみの作出されていない石錐、7は横型の石匙である。2は、凹石の残欠品で、打痕の集中により浅い凹みが作出されている。

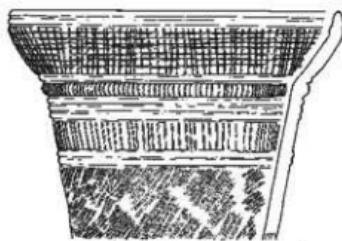


第19図 第14号住居址

土器から本址の時期を知ることはできないが、石器の様相からは縄文中期に属するものと考えられる。

第2表 住居址一覧表

住居	アリッド	平面形	方向	規模	壁 高	炉構造	焼 砕	周溝	土柱穴	切合い 關係	時 期
1	G-H-5-6	不規格円	N-18°-E	410×364	8-9-7-21	埋煙炉	中央北寄	なし			縄文中期
2	C 5-6	楕 円	N-35°-E	460×300	17-11-10-14	埋込炉	中央	外	壁外		縄文晩～弥生中期
3	C-D-8-9	隅丸方形	N-40°-E	360×320	33-23-17-41	地床炉	中央	炎	外		弥生中期
4	A-B-8-8	隅丸方形	N-S	378×328	12-8-6-12	—	—	なし			縄文早期
5	I-3-4	楕 円	—	(290)×240	—-24---27	—	—	なし	(4)	→6H	縄文前期
6	I-J-3	楕 円	—	(390)×(230)	30-7---24	石窯炉	中央西寄	一部		5H	縄文前期
7	H-7-8	隅丸方形	N-S	380×340	35-11-8-54	—	—	なし			縄文晩～弥生中期
8	F-G-9	隅丸方形	N-15°-E	410×370	13-12-8-15	埋込炉	中央北西寄	なし			縄文晩～弥生中期
9	A-R-12	隅丸方形	—	300×—	18-6-11-—	石窯炉	中央	炎	なし	(4)	縄文中期
10	J-13-14	隅丸方形	E-W	400×360	57-38-21-36	—	—	なし			縄文晩～弥生中期
11	H-I-15-16	隅丸方形	E-W	480×440	22-15-24-16	石窯炉	中央西寄	半周	4		縄文晩～弥生中期
12	B-C-14-15	隅丸方形	N-8°-E	376×340	17-6---6	—	—	一部	4		縄文晩～弥生中期
13	I-17-18	隅丸方形	N-S	(340)×(320)	9-—-3	石窯炉	中央北寄	一部			縄文晩～弥生中期
14	D-E-7	楕 円	N-10°-W	400×350	61-32-27-39	地床炉	中央	炎	一部	(4)	縄文中期



1

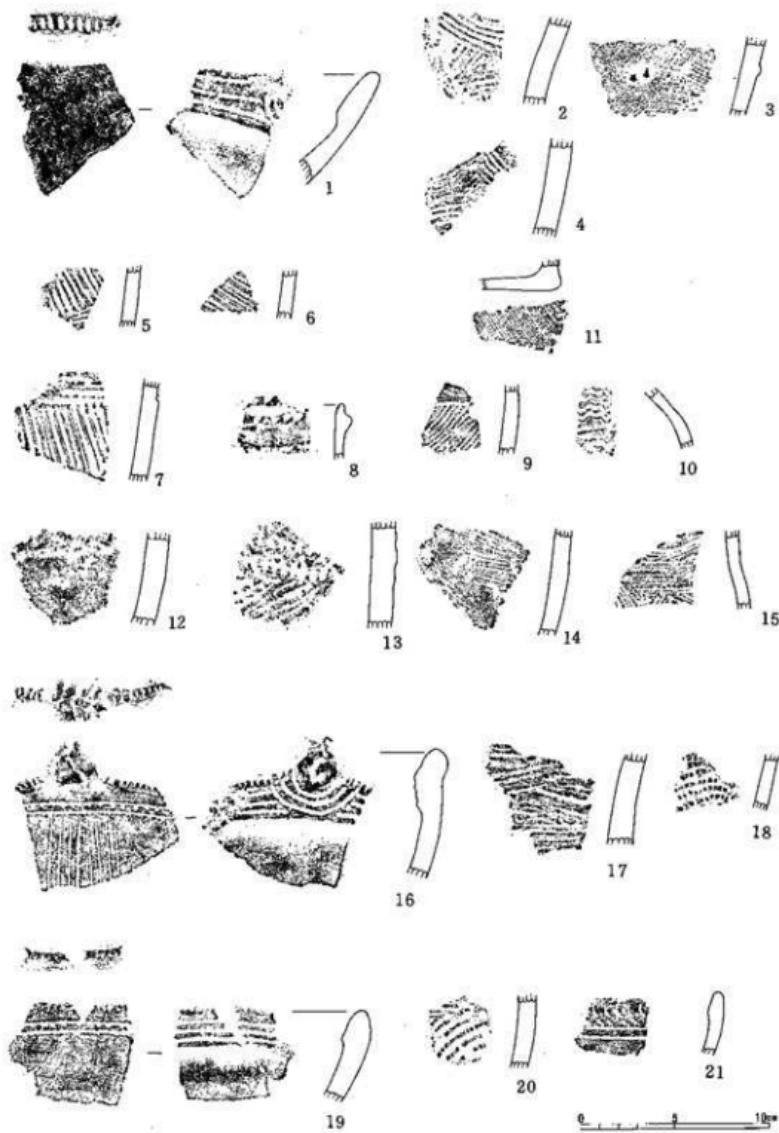


2

0 10cm

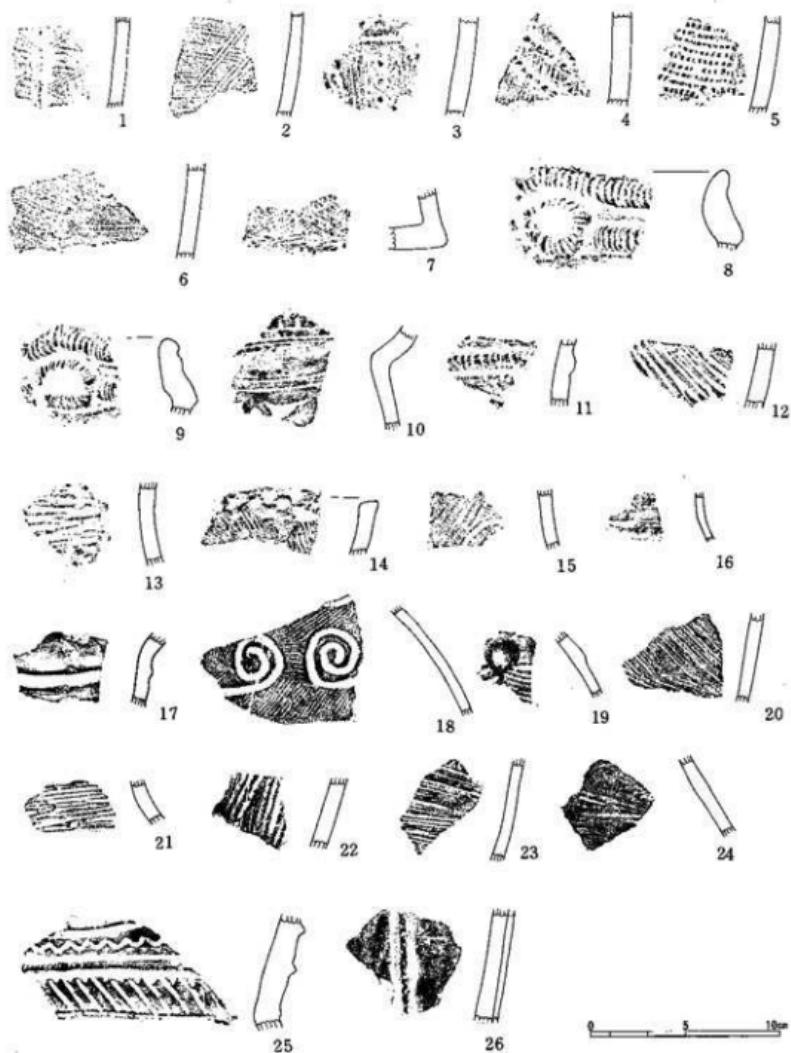
1:1号住、2:13号住

第20図 住居址出土土器 (1)



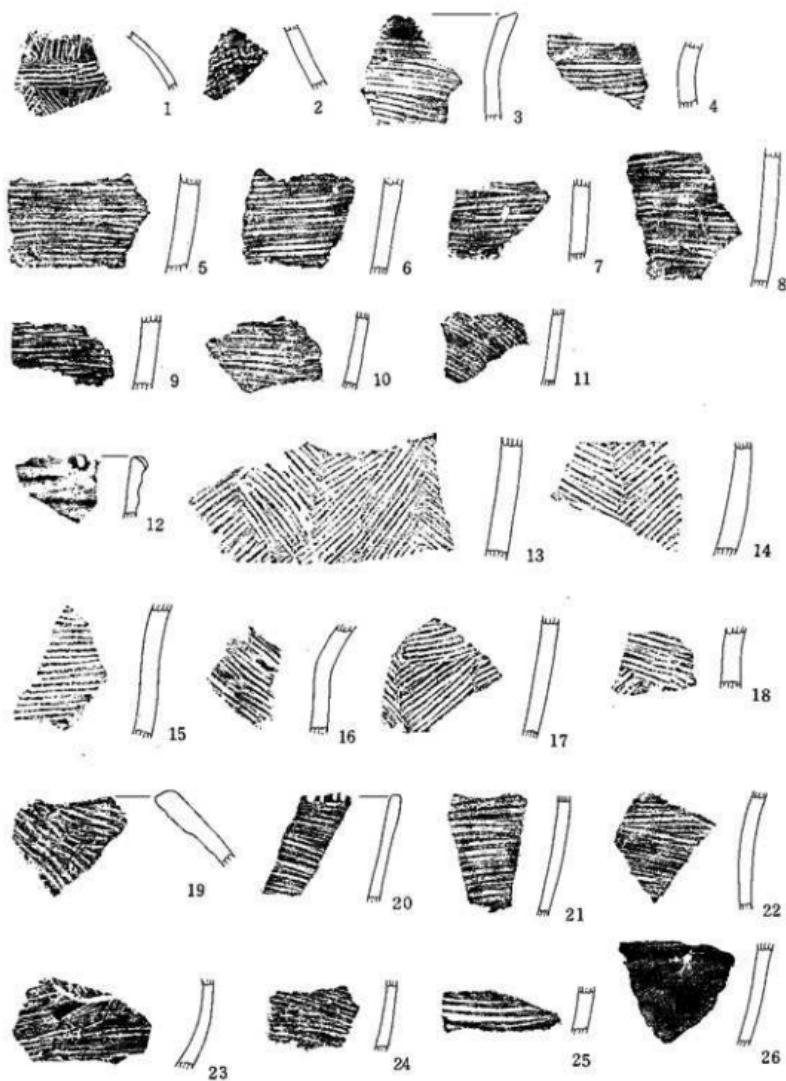
第21图 住居址出土土器 (2)

1~4: 1号住, 5~6: 2号住, 7~11: 3号住
15~15: 4号住, 16~21: 5号住



1~12: 6号住、13~16: 7号住、17~24: 8号住、25·26: 9号住

第22図 住居址出土土器 (3)



1~11: 10号住, 12~18: 11号住, 19~26: 12号住

第23図 住居址出土土器 (4)

第2節 小堅穴

小堅穴は、总数221基が発見され、調査区全域にわたって分布している。溝址の右手（東側）が空白地帯となっているが、この区域は後世の擾乱により当初の姿を全くとどめていないことを考慮すると、この部分にも小堅穴は存在していると考えることが妥当であろう。

小堅穴は、内部からの出土土器によってその時期を確定した。221基中、時期が把えられるもの115基で、約半数は時期が不詳である。判明した時期は縄文早期末、同前期、同中期、同晚期末から弥生中期初頭、近世の各期にわたっている。以下、時期ごとにその概要を述べる。

（1）縄文時代早期末

遺構 8・31・3436・94・99号の6基が該当する。分布は、調査区の東半分に集中し、同時期の第4号住居址および同時期の遺物集中地区のI・J・K-1・2・3区を中心とする地域に検出されている。平面形は、長軸250cm、短軸200cm前後の楕円形（8・31）と、直径100~150cmのはば円形（94・99）を呈するものを主体に、不整形（34）もみられる。深さは30~40cmを普通とし、99号のように87cmの深さをもつものも存在する。上面および内部に環を配するものがあり、8号は掘り込み上面を床面に、34号は床面に主として置かれている。

遺物 内部から土器の小片がそれぞれ出土している。8号からは胎土に纖維を含んだ隆帯上に絹条体圧痕文施文土器小片（54図9）と条痕文（同10）、31号からは纖維を含んだ条痕文（56図13）、34号からは隆帯上に圧痕を付したもの、36号からは撚糸文（56図23）、94号からは含纖維の条痕文（61図14）、99号からは纖維を含んだ条痕文、絹条体圧痕文（61図19~24）がそれぞれ出土している。

（2）縄文時代前期

遺構 194号の1基のみ検出された。調査区域中の最も西北端に位置する。縄文前期の5・6号住居址および遺物集中出土のJ・K-2・3地区が調査区の最東南端に位置していることから、同時期の遺構としては最も遠距離に位置する。形態は楕円を呈し、掘り込みもきれいにされている。

遺物 14図15~18に示した土器片が出土。ともに浮線文を施し、地文に縄文を施している。

（3）縄文時代中期

遺構 19、20・52・214号の4基が該当する。同時期の1・14号住居址の西側20mの範囲に集中して存在する。平面形は4基とも楕円形を呈するが、長楕円のものはなく円形に近い楕円を示す。クライ状の掘り込みをなし、10号には床面に小穴を1孔もっている。

遺物 19号からは55図25の押引文を、20号からは同28の押引文と同26の隆帯上に指圧痕をもつ土器片が出土し、52号からは沈線施文の口縁部破片、214号からは55図2の隆帯上に指圧痕をもつ

ものとがそれぞれ出土している。

(4) 縄文時代晩期末から弥生時代中期初頭

遺構 縄文時代晩期末から弥生時代中期初頭に位置づけられる小豎穴は104基あり、その分布は調査区全域にわたって展開している。内部からの出土遺物がなく時期を確定することができない小豎穴も多くはこの時期に含まれるものと思われる。ここでは時期が判明したもののみについて記述を進めることとする。

平面形は、円、楕円、三角、方、長方・不整形にそれぞれ分類できる。円形を呈するものには、6・10・14・27・33号など総数24基あり、この時期の全小豎穴中23%を占め、楕円形に次いで多い。規模は40×36cmの75号から210×200cmの27号までの大きさがあるが、主体をなすのは直径100~150cmを測るものである。掘り込みは、タライ状をなすものが多いが、袋状を呈するものが33%を占め、袋状の占める割合が他形に比較して多い。楕円形を呈するものは、3・9・11号など62基あり、時期の判明している小豎穴の約半数をこの楕円形が占めていることが分かる。規模は、小は73号の50×34cmのものから大は85号の272×224cmのものまで種々あるが、主体をなすのは、長軸100×150cmのものである。掘り込みは、大半がタライ状をなすが、39・59・104・105・162・164~167の各号は袋状を呈する。この袋状を呈するものは概して深く、その分布は調査地域南端のJ・K・L-6-10の各区に偏在する特徴を指摘できる。そして、104と105号が西端に位置していることを考えると、地形的に低い部分にこの袋状小豎穴は掘り込まれたといえる。三角形を呈するものは120号の1基があるが、円形の崩れたものとも考えられる。方形を呈するものは、7・16・102・132・196号の5基ある。一辺100cmほどの規模を有し、掘り込みは、132号が袋状を呈し、他の4基はタライ状をなす。長方形のものは12・135・155号の3基あり、タライ状に掘り込まれている。これら定形化した平面形のほかに、51・53・54号などのように不整形のものが10基ある。51号は内部に箱型に礫を組んでおり、54号は擂鉢状の掘り込みをなしている。

以上、縄文晩期末から弥生中期初頭に属する小豎穴について略記したが、個々の小豎穴については第3表を参照願いたい。

遺物 各小豎穴からは当期に属する土器が出土しているが、その大半は量も少なく、しかも細片が多い。極力図示することに努めたが、割あいせざるをえなかつたものも少なくない。一覧表中で時期欄に表示があるものにもかかわらず、図版がないものは小片のため割あいしたものであると理解していただきたい。以下図掲載遺物の代表的なものについて概観する。

3号の54図2~5は斜位の条痕文を施し、口縁部2には刺突を施す。7号の7は沈線文を、8は縦位の条痕を付す。13号15~19は、ヘラ描状の条痕を主とし、18は波文をもった壺形土器である。15号21は、刺突を施した小突起を付した口縁形態を呈する。

14号からは52図1の壺の胴下半部が出土している。条痕に類似した細い半截竹管による条痕文が施される。市内下西条ちんじゅ、松本市針塚出土に類例がみられる。このほか14号では破片の

出土が多く、55図1～17の土器、67図の打製石斧が得られている。1、3、4は口縁部下に沈線を、7、8は口唇部に刺みを、9は口唇に刻み、口辺に押圧、その下位に横位条痕を施文する。16号では、55図18～22があり、18は条痕施文の大甕、21は波文をもつ壺、22は縄文地に沈線文をもつ壺である。28号56図8は波線施文、33号56図15は工字文風沈線文を、16は沈線文を施す。38号56図24は工字文施文土器、39号では、25～27が沈線文、28～31が細密条痕をもつ。

40号では、57図4は波文、7は網代痕をもち、41号8は口縁部に刺突文を施す。46号の15は、沈線文を無難作に施した大形壺形土器。

57号の58図8は、押圧凸帯、内面に波文を施文し、9は横線と波文をもつ壺形土器である。

58号からは52図2・3の2個体の土器が一括して出土した。2は頸部で強くくびれた壺形で、口縁に4単位の小突起を付し、文様は口辺に集約する。沈線文を横位に施すが、小突起下の一部を工字文風に変化させている。3は、底部から直線的に開き、口辺でゆるくくびれる器形を呈し、口縁は山形の小突起を複数付している。

62号の59図1も、58号2と類似した工字文風の文様を施文し、63年の4・5も変形工字文を付している。64号12の底部には布目压痕が認められる。68号の14は大振りな波文を、15はヘラ状工具による縦位羽状の条痕を施した壺形土器の肩部である。

69号の60図1～4は斜位条痕を、5は縦位の波文を施文する。96号15は工字文を、98号18を107号26は口縁に刺突し、下位置に波線を配している。

100号の61図1～3・7は細密条痕文の甕、5は大雜把な斜位条痕文、9はボタン条突起と沈線文とを組み合わせている。

135号の62図3は、16号出土の55図22と同似した文様をもつ。164号の30は、口辺に刺突、平行沈線文を配した壺形土器である。

162号出土の52図5は、小型の壺形土器で、胴上半部に沈線で大きな長方区画を描き、磨消縄文を用いた工字文風モチーフの系譜をひく文様を施文している。

167号の53図1は、斜位の条痕文を施した大型甕で、口径27cmを測る。

172号の63図25は、口唇に刻みを入れ、口辺下位には条痕を施す。173号の64図1～5、175号の64図6～8は条痕施文の土器。

186号の53図2・3は、口辺に沈線を巡らし、無文部をおいて胴下半に細い半截竹管による条痕文を施した壺形土器。同址には他に、磨消縄文風の64図10、12～14の条痕施文の土器もある。

本期出土の土器は多量で、時間的および掲載スペースの制約の中で充分な報告が困難なため、後日、報告、分析の機会を持ちたいと考えている。

これらの土器のほかに、71号と101号からは土偶が出土している。71号からは76図1の胴下半部の土偶が出土した。現長7.3cmを測り、板状の胴部に脚部が丸くまとめるように造形されている。体部には、その裏面に縦縞が一条付けられているのみで、文様は一切見られず、ミガキを丁寧に施している。床面よりやや浮い状態で出土した。また、101号出土の土偶76図2は、肩部の一部と

思われる破片で、刺突が施されている。この種の小豎穴に土偶が埋納されていたことはこの用途をも考え合わせて重要である。

(5) 近世

遺構 近世に位置づけることができる小豎穴は77号の1基のみである。調査地内の北端にあり、第12号住居址の東に隣接する。

形態は、78×68cmの楕円形を呈し、底面は71×51cmで、ほぼ垂直の掘り込みとなっている。深さは22cm。西・南壁に沿って4個の礎を縦に配置し、その間に入れられたようにして人骨が検出された。疎の1部は人骨の上に倒れ込んだようにのっており、土圧で埋葬後、移動したものようであった。人骨は、豎穴内きっちりに埋葬され、頭部を北に向か、顔は西方を向き、手、足を強く折り曲げた横臥屈葬の状態であった。人骨の遺存状況は極めて良い。

人骨の詳細については、付章の西沢寿光先生の研究成果を参照していただきたい。

遺物 遺物としては、人骨の腹部付近から出土した漆片がある。箱ないし椀の一部と思われるがはっきりしない。漆片の幾つかに、赤色の梅鉢文様が認められることから、根来塗りの椀など近世初頭以降に位置づけられるものと考えられる。

第3表 小豎穴一覧表

No.	確認規模	平面形	主軸方向	断面図	底面規格	底面	深さ	時期	備考	図版
1	(226)×186	楕円	N-8°E	たらい状	(160)×112	平坦	22	IV		1
2	80×60	三角形	N-63°-E	たらい状	64×46	平坦	31			1
3	116×94	楕円	N-17°-E	たらい状	94×78	平坦	14	IV		1
4	68×56	楕円	N-85°-E	たらい状	52×40	平坦	13			1
5	56×54	円	N-43°-E	たらい状	42×36	平坦(二段)	18			1
6	124×120	円	N-52°-E	たらい状	100×100	平坦(二段)	25	IV		2
7	172×156	方形	N-22°-W	たらい状	160×136	平坦(二段)	21	IV		1
8	230×180	長楕円	N-13°-E	不整形	208×150	段々	37	I	集石	1
9	80×60	楕円	N-60°-W	たらい状	64×40	平坦	32	IV		3
10	120×116	円	N-12°-E	たらい状	92×92	平坦(三段)	25	IV		3
11	78×64	楕円	N-17°-W	播鉢状	50×38	丸底	26	IV		3
12	136×110	長方形	N-67°-W	たらい状	64×46	平坦	12	IV		3
13	120×94	楕円	N-72°-E	たらい状	98×74	やや丸底	23	IV		4
14	174×160	円	N-55°-W	たらい状	180×170	平坦	56	IV		4
15	130×114	楕円	E-W	たらい状	102×92	やや丸底	22	IV		4
16	146×126	方形	N-87°-E	たらい状	126×100	平坦	39	IV		4
17	106×96	円	N-5°-W	たらい状	90×84	平坦(小穴2)	22			2
18	140×124	楕円	N-45°-W	たらい状	104×100	平坦	50			5
19	230×214	楕円	N-50°-E	たらい状	190×164	平坦	26	III		5
20	270×130	楕円	N-50°-W	たらい状	164×120	平坦(小穴1)	23	III		5
21	250×140	楕円	N-50°-W	たらい状	214×130	平坦	34	IV		5

No.	確認規模	平面形	主軸方向	断面図	底面規模	底 面	深さ	時期	備 考	図版
22	144×106	横 円	N-45°-E	たらい状	126×90	平 坦	20			5
23	188×144	横 円	N-52°-E	たらい状	180×140	段々	23			5
24	200×170	方 形	N-40°-E	たらい状	160×140	平 坦	26			5
25	104×94	方 形	N- 5°-W	たらい状	60×60	平 坦	37			7
26	126×120	円 E-W		たらい状	110×106	平 坦	31			2
27	210×200	円	N-15°-W	たらい状	188×180	平 坦	12	IV		2
28	234×182	長楕円	N-13°-W	たらい状	184×90	やや丸底	25	IV		6
29	136×116	横 円	N-S	たらい状	96×90	平 坦	18	IV		5
30	150×110	横 円	N-67°-E	たらい状	144×80	平 坦	22			5
31	260×190	不整形	N-S	不 整 形	240×160	段々	42	I		2
32	168×142	横 円	N-72°-W	たらい状	144×124	平 坦	23			6
33	118×112	円	N-27°-E	袋 状	154×144	平 坦	71	IV		6
34	254×180	不整形	N-52°-W	不 整 形	110×—	段々	24	I	集石	6
35	242×200	不整形	N-80°-W	たらい状	200×144	やや丸底	50			7
36	200×190	横 円	N-14°-E	たらい状	168×154	平坦(小穴1)	26	I		7
37	78×52	不整形	N-69°-W	擂 鈎 状	38×28	丸底	33			7
38	76×72	円	N-37°-W	たらい状	56×52	平 坦	23	IV		7
39	130×120	横 円	N-38°-E	袋 状	120×100	平 坦	60	IV		7
40	132×120	横 円	N-28°-W	たらい状	100×98	平 坦	20	IV		12H
41	200×152	長楕円	N-86°-E	たらい状	164×110	平 坦	46	IV		8
42	110×80	横 円	N-78°-E	たらい状	70×46	やや丸底	43	IV		8
43	90×74	横 円	N-82°-E	たらい状	80×62	平 坦	25	IV		8
44	90×74	横 円	N-78°-E	たらい状	70×60	平 坦	14			4
45	90×80	横 円	N-40°-W	たらい状	80×54	平 坦	13			4
46	102×90	横 円	E-W	たらい状	84×80	平 坦	23	IV		9
47	120×100	横 円	N-18°-E	たらい状	110×84	平 坦	44			9
48	120×110	円	N-S	袋 状	134×134	平 坦	43	IV		9
49	160×120	横 円	N-18°-W	たらい状	144×120	平 坦	30	IV		4
50	110×96	横 円	N-86°-E	たらい状	100×74	平 坦	33	IV		9
51	144×90	不整形	N-18°-W	たらい状	126×80	平 坦	37	IV	集石	9
52	134×124	横 円	N-24°-W	たらい状	116×108	平坦(二段)	43	III		10
53	174×104	不整形	N-45°-E	不 整 形	148×80	段々	18	IV		11
54	240×126	不整形	N-73°-W	擂 鈎 状	206×102	やや丸底	12	IV		11
55	210×170	横 円	N-S	たらい状	190×130	やや丸底	27			8
56	210×180	横 円	N-S	擂 鈎 状	170×130	丸底	30	IV	集石	8
57	110×96	横 円	N- 8°-W	たらい状	90×76	平 坦	68	IV		11
58	122×110	横 円	N-30°-E	たらい状	110×90	平 坦	26			12
59	96×90	横 円	N- 4°-W	袋 状	108×98	平 坦	56	IV	集石	12
60	106×102	円	N-84°-E	袋 状	118×112	平 坦	65	IV		12
61	90×88	円	N-78°-E	たらい状	66×64	平 坦	26			12
62	120×102	横 円	N-S	たらい状	104×100	平 坦	48	IV		12

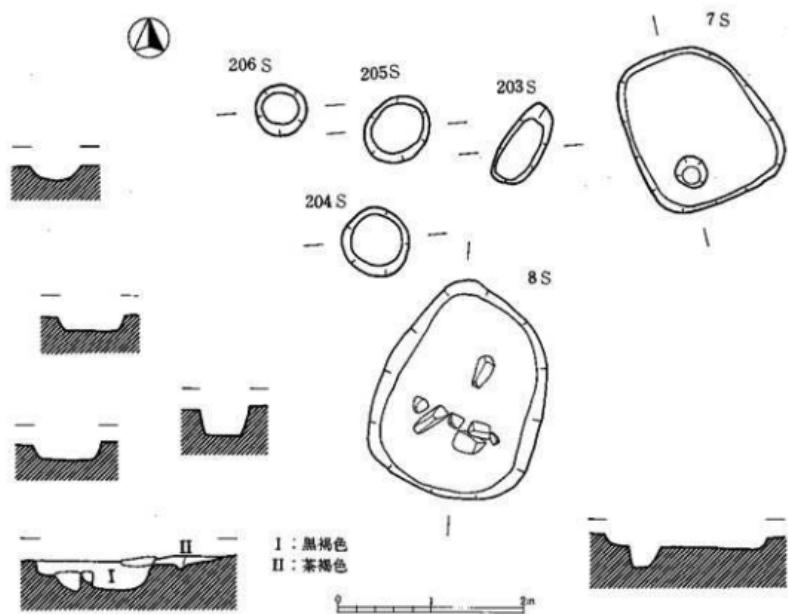
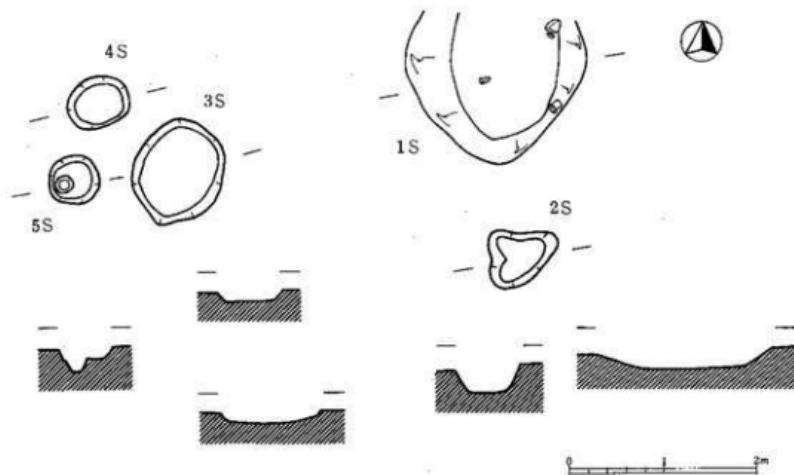
No.	確認規模	平面形	主軸方向	断面図	底面規模	底面	深さ	時期	備考	図版
63	128×120	楕円	N-78°-W	たらい状	104×90	平坦	66	IV		13
64	150×114	楕円	N-17°-W	たらい状	120×94	平坦	55	IV		14
65	120×88	楕円	N-53°-E	たらい状	100×70	平坦(二段)	75	IV		14
66	186×166	楕円	N-24°-E	擂鉢状	140×122	やや丸底	36			15
67	104×100	方形	N-18°-E	たらい状	84×80	平坦	30	IV		15
68	120×110	円	N-25°-E	たらい状	116×94	平坦	49	IV		15
69	160×134	楕円	N-69°-W	たらい状	124×110	平坦	53			15
70	154×146	楕円	N-81°-E	たらい状	110×86	平坦	20			16
71	140×126	楕円	N-32°-E	たらい状	120×108	平坦	28	IV		16
72	98×80	方形	N-6°-W	たらい状	74×60	平坦	44			15
73	50×34	楕円	N-74°-E	たらい状	34×24	平坦	21	IV		3
74	64×44	楕円	N-15°-W	たらい状	60×46	平坦	32			3
75	40×36	円	N-32°-W	擂鉢状	34×32	丸底	22	IV		3
76	60×54	楕円	N-33°-E	たらい状	44×40	平坦	14			3
77	78×67	楕円	N-10°-E	たらい状	71×51	平坦	22	V	人骨	
78	114×102	楕円	N-60°-W	たらい状	88×84	平坦(小穴1)	20			8
79	114×94	楕円	N-53°-W	たらい状	92×64	平坦	33			15
80	116×104	楕円	N-8°-W	たらい状	96×94	平坦	45			16
81	90×84	楕円	N-60°-E	擂鉢状	80×68	丸底	13			17
82	206×150	不整形	N-34°-W	たらい状	194×122	平坦	27	集石	17	
83	120×114	楕円	N-5°-W	擂鉢状	102×90	丸底	45			17
84	100×86	楕円	N-18°-W	たらい状	70×60	平坦	18			18
85	272×224	楕円	N-10°-E	たらい状	236×194	平坦	27	IV		18
86	250×180	長楕円	N-5°-E	擂鉢状	200×140	丸底	38	IV		18
87	150×140	楕円	N-18°-E	たらい状	130×110	平坦	76			18
88	130×122	不整形	N-52°-E	たらい状	110×104	平坦	57	IV		19
89	94×66	楕円	N-S	たらい状	76×52	平坦	39	IV		19
90	60×44	楕円	N-48°-W	たらい状	54×24	平坦(二段)	38	IV		19
91	90×78	楕円	E-W	たらい状	74×54	平坦	34	IV		19
92	90×78	楕円	N-40°-E	たらい状	66×44	平坦	25			19
93	94×82	楕円	N-40°-E	たらい状	70×62	平坦	29			19
94	118×106	楕円	N-8°-W	たらい状	100×100	平坦	40	I		18
95	200×130	長楕円	N-63°-E	たらい状	166×80	平坦	34			20
96	94×92	楕円	N-36°-E	たらい状	80×72	平坦	23	IV		20
97	72×60	楕円	N-22°-E	たらい状	70×64	平坦	25			20
98	204×166	楕円	N-60°-W	たらい状	170×124	平坦(二段)	27	IV	集石	21
99	150×132	楕円	N-52°-W	擂鉢状	100×100	丸底	87	I		2
100	146×146	円	N-20°-E	袋状	170×160	平坦	56	IV		17
101	136×92	不整形	N-15°-W	たらい状	120×80	平坦	44	IV		19
102	80×70	方形	N-57°-W	たらい状	56×48	平坦	17	IV		19
103	106×88	楕円	N-27°-W	たらい状	82×72	平坦	23			19

No.	確認規模	平面形	主軸方向	断面図	底面規模	底面	深さ	時期	備考	図版
104	92×84	横 円	N-32°-W	袋 状	98×94	平坦(二段)	44	IV		20
105	138×126	横 円	N-S	袋 状	150×144	平坦(三段)	72	IV		20
106	94×70	横 円	N-12°-W	たらしい状	54×50	平坦	38			20
107	86×68	横 円	N-28°-W	たらしい状	66×60	平坦	26	IV		24
108	110×90	横 円	N-52°-W	たらしい状	94×74	平坦	66			21
109	140×114	不整形	N-80°-E	たらしい状	100×90	平坦	20	IV		28
110	136×106	不整形	N-80°-E	たらしい状	120×80	平坦(二段)	36	IV		21
111	120×-	横 円	-	たらしい状	90×-	平坦	19			22
112	150×130	不整形	N-22°-W	たらしい状	106×90	平坦	33			22
113	140×120	横 円	N-S	たらしい状	120×100	平坦(二段)	56	IV		22
114	70×64	円	N-22°-W	たらしい状	54×46	平坦	31			22
115	140×110	横 円	N-35°-E	たらしい状	122×110	平坦	31			23
116	90×80	横 円	N-20°-W	たらしい状	84×64	平坦	13			23
117	82×70	横 円	N-78°-E	たらしい状	66×60	平坦	21	IV		23
118	150×136	横 円	N-75°-E	たらしい状	130×120	平坦	19			23
119	174×134	横 円	E-W	たらしい状	144×110	段々	44	IV		23
120	130×110	三角形	N-75°-E	たらしい状	106×80	平坦	8	IV		23
121	222×160	長横円	N-58°-E	たらしい状	172×136	平坦	27	IV		24
122	112×96	横 円	N-48°-E	撓 跡 状	78×70	やや丸底	29			24
123	(81)×83	円	N-49°-E	袋 状	(74)×64	平坦	38	IV		16
124	134×120	横 円	N-50°-W	たらしい状	114×100	平坦	12	IV		16
125	130×80	横 円	N-26°-E	たらしい状	120×80	平坦	25			15
126	122×(120)	円	N-75°-W	袋 状	150×(136)	平坦(穴1)	43	IV		13
127	102×94	横 円	N-87°-E	たらしい状	86×80	平坦	17			13
128	180×96	長横円	E-W	たらしい状	132×60	平坦	34	IV		13
129	110×110	円	N-48°-E	たらしい状	84×80	平坦	44	IV		25
130	156×120	横 円	N-69°-E	たらしい状	126×104	平坦	29	IV		17
131	210×140	長横円	N-24°-E	たらしい状	136×116	平坦(二段)	47	IV		17
132	146×128	方 形	N-53°-E	袋 状	132×166	平坦	36	IV		11
133	124×122	円	N-33°-W	たらしい状	110×96	平坦	16	IV		12
134	84×74	横 円	N-S	たらしい状	74×64	平坦	12	IV		12
135	200×136	長方形	N-87°-E	たらしい状	168×110	平坦	57	IV		14
136	106×104	円	N-80°-E	たらしい状	80×80	平坦(二段)	36	IV		20
137	76×64	横 円	N-16°-W	たらしい状	56×52	平坦	21	IV		25
138	74×60	円	N-52°-E	たらしい状	74×60	平坦	36			25
139	81×70	横 円	N-32°-W	たらしい状	60×50	平坦	33			25
140	66×56	横 円	N 71° E	たらしい状	50×40	平坦	28			25
141	84×60	横 円	N-13°-E	たらしい状	64×46	平坦	48			25
142	60×58	円	N-42°-W	たらしい状	40×40	平坦	34			25
143	240×132	長横円	N-67°-W	不 整 形	186×104	段々	44	IV		25
144	80×74	横 円	N-53°-E	たらしい状	64×56	平坦	39			25

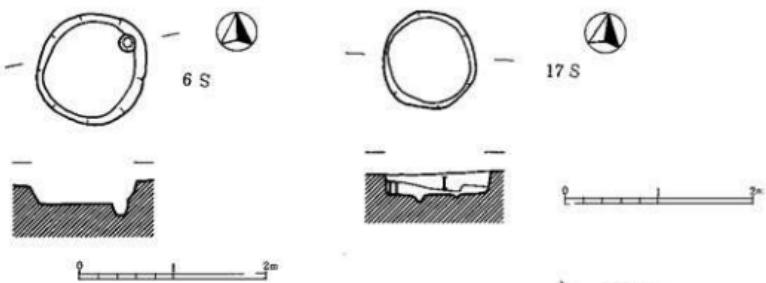
No.	確認規模	平面形	主軸方向	断面図	底面規模	底面	深さ	時期	備考	図版
145	48×48	円	N-55°-W	たらい状	40×34	平坦	25			25
146	54×54	円	N-10°-E	たらい状	40×40	平坦	17	IV		26
147	62×50	横円	E-W	たらい状	40×40	平坦	24	IV		26
148	44×34	横円	N-9°-E	たらい状	34×20	平坦	27			26
149	50×36	横円	E-W	たらい状	34×24	平坦	26			26
150	78×70	円	N-17°-E	たらい状	60×54	平坦	21	IV		26
151	54×48	横円	E-W	たらい状	34×30	平坦	17			26
152	56×50	円	N-21°-E	たらい状	34×32	平坦	28			26
153	64×52	横円	N-36°-E	たらい状	36×32	平坦	26			26
154	74×64	横円	N-S	椎鉢状	54×32	丸底	34			26
155	78×60	長方形	N-31°-E	たらい状	60×46	平坦	31	IV		26
156	62×50	横円	N-35°-E	たらい状	44×34	平坦	23			26
157	56×50	円	N-17°-E	たらい状	32×32	平坦	30			26
158	40×40	円	N-8°-E	たらい状	24×24	平坦	22			26
159	120×108	横円	N-7°-W	たらい状	104×96	平坦	17	IV		11
160	278×124	不整形	N-64°-E	たらい状	266×104	平坦	38	IV		27
161	106×90	横円	N-49°-W	たらい状	100×96	平坦(二段)	79	IV		27
162	116×84	横円	N-40°-W	袋状	140×104	平坦(二段)	100	IV		27
163	140×138	円	N-20°-W	袋状	164×—	平坦	43	IV		28
164	144×124	横円	E-W	袋状	152×136	平坦	53	IV		27
165	90×86	横円	N-15°-E	袋状	96×90	平坦	48	IV		28
166	144×122	横円	N-60°-W	袋状	180×164	平坦	75	IV		28
167	144×124	横円	N-52°-E	袋状	170×160	平坦	70	IV		28
168	72×62	横円	N-33°-W	たらい状	54×46	やや丸底	43			18
169	284×140	不整形	N-45°-W	不整形	—	段々	32	IV		17
170	110×110	円	N-32°-E	たらい状	100×100	平坦	19			17
171	84×70	横	E-W	コップ状	70×54	平坦	80			17
172	122×120	円	N-6°-E	袋状	132×130	平坦	50	IV		10
173	120×112	円	N-70°-W	たらい状	110×100	平坦	48	IV		10
174	70×50	円	N-45°-E	たらい状	70×50	平坦	25			20
175	164×140	横円	N-39°W	たらい状	154×110	平坦(二段)	71	IV		10
176	120×106	円	N-60°-W	たらい状	100×90	平坦	76	IV		10
177	70×64	横円	N-5°-E	たらい状	60×52	平坦	15	IV		21
178	80×70	横円	N-28°-W	たらい状	52×50	平坦	26			21
179	78×78	円	E-W	たらい状	54×50	平坦	43			21
180	44×40	円	N-17°-W	コップ状	24×24	平坦	42			21
181	80×70	横円	N-S	たらい状	64×60	平坦	31			21
182	122×—	横円	—	たらい状	98×—	平坦	12			22
183	96×70	横円	N-72°-W	たらい状	60×50	平坦	32			22
184	50×50	円	N-30°-E	たらい状	36×36	平坦	38			22
185	50×46	円	E-W	たらい状	36×30	平坦	43			22

No.	確認規模	平面形	主軸方向	断面図	底面規模	底面	深さ	時期	備考	図版
186	184×170	楕円	N-25°-W	たらい状	210×190	平坦	86	IV		10
187	110×74	楕円	N-55°-W	たらい状	80×50	平坦	26			6
188	110×90	楕円	N-12°-E	たらい状	100×60	平坦	13			23
189	80×70	楕円	N-52°-E	たらい状	64×54	平坦	31			23
190	80×—	楕円	N-S	たらい状	96×—	平坦	32			23
191	54×46	楕円	N-22°-W	たらい状	40×30	平坦	32			23
192	70×64	円	N-65°-E	たらい状	46×46	平坦	18			23
193	118×76	楕円	E-W	たらい状	110×60	平坦(二段)	44	IV		10
194	160×122	楕円	N-66°-E	たらい状	122×94	平坦	47	II		8
195	54×50	円	N-10°-W	たらい状	40×34	平坦	19			8
196	90×90	方形	E-W	たらい状	64×62	やや丸底	17	IV		24
197	94×94	円	N-S	たらい状	60×60	平坦	17			24
198	60×60	円	N-79°-E	たらい状	40×40	平坦	25			24
199	62×54	楕円	N-20°-E	たらい状	42×36	平坦	46			24
200	90×74	楕円	N-S	たらい状	76×60	平坦	28			15
201	180×172	楕円	N-48°-W	たらい状	158×146	平坦	78	IV		28
202	164×150	円	N-79°-W	たらい状	156×142	平坦(二段)	75	IV		10
203	52×44	楕円	N-37°-E	たらい状	70×32	平坦	31			1
204	76×72	円	N-S	たらい状	56×54	平坦	20	IV		1
205	78×62	楕円	N-41°-E	たらい状	60×48	平坦	16			1
206	54×54	円	N-4°-W	擂鉢状	34×32	丸底	17			1
207	100×80	方形	N-12°-E	たらい状	64×60	平坦(小穴1)	18			3
208	80×70	楕円	N-52°-W	たらい状	60×50	平坦	24			4
209	120×94	楕円	N-5°-W	たらい状	84×70	平坦	23			4
210	220×160	長楕円	N-14°-W	たらい状	174×120	平坦(二段)	47			4
211	70×70	円	N-S	擂鉢状	40×34	丸底	25			4
212	76×64	楕円	N-74°-W	擂鉢状	64×50	丸底	16			10
213	54×50	円	N-18°-W	たらい状	50×40	段々	18			9
214	178×150	楕円	N-7°-E	たらい状	160×132	平坦	63	III		27
215	158×136	楕円	N-75°-W	たらい状	140×118	平坦	55	IV		27
216	80×66	楕円	N-40°-E	たらい状	80×64	平坦	24	IV		27
217	76×76	円	N-5°-E	たらい状	64×62	平坦	22			6
218	92×60	楕円	N-73°-E	たらい状	72×48	平坦	23	IV		11
219	106×72	楕円	N-32°-E	たらい状	96×54	平坦	37			14
220	130×116	円	N-58°-E	擂鉢状	130×114	やや丸底	13			13
221	160×142	楕円	N-70°-W	たらい状	142×130	平坦(小穴1)	24			28

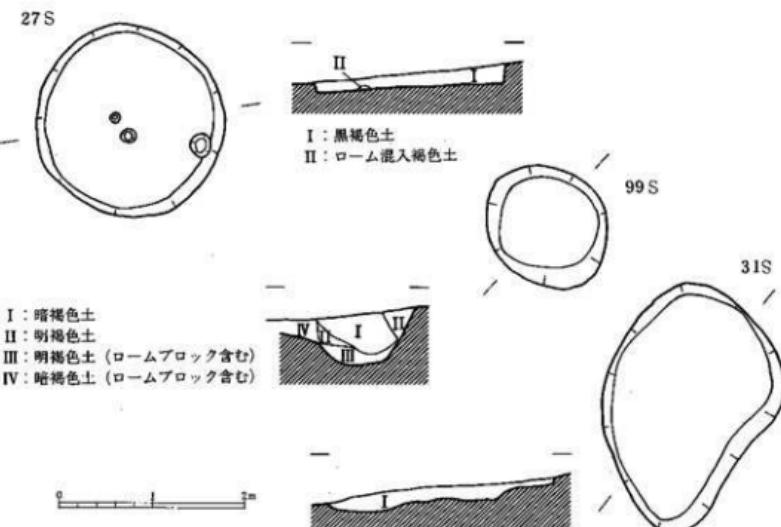
* 時期：縄文早期I、縄文前期II、縄文中期III、縄文晩期末～弥生中期初頭IV、近世V



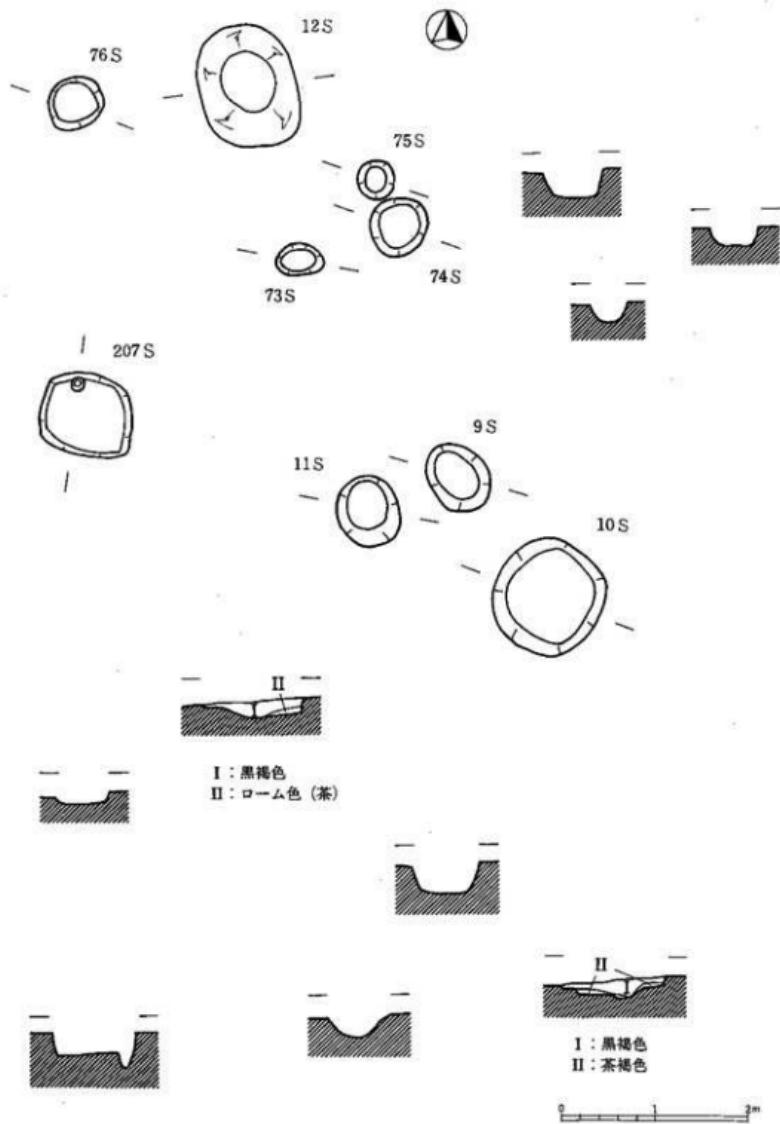
第24図 小豎穴群 (1)



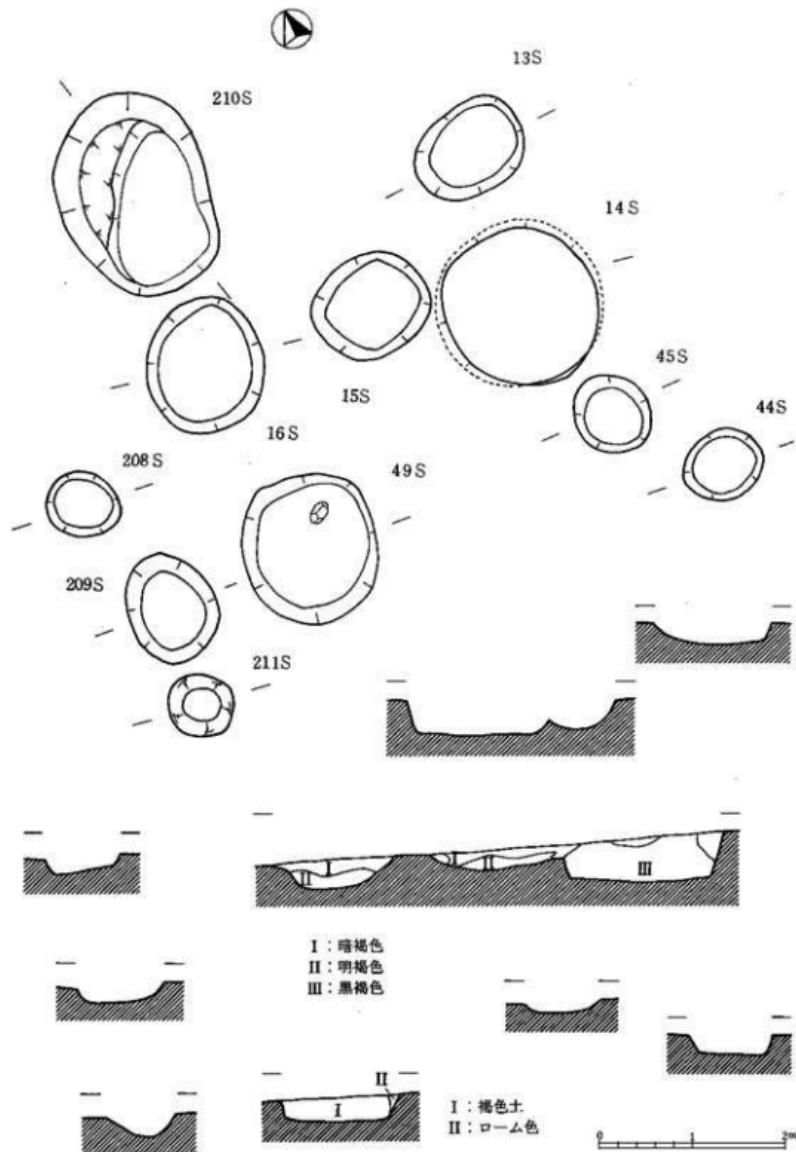
I : ローム混入褐色土



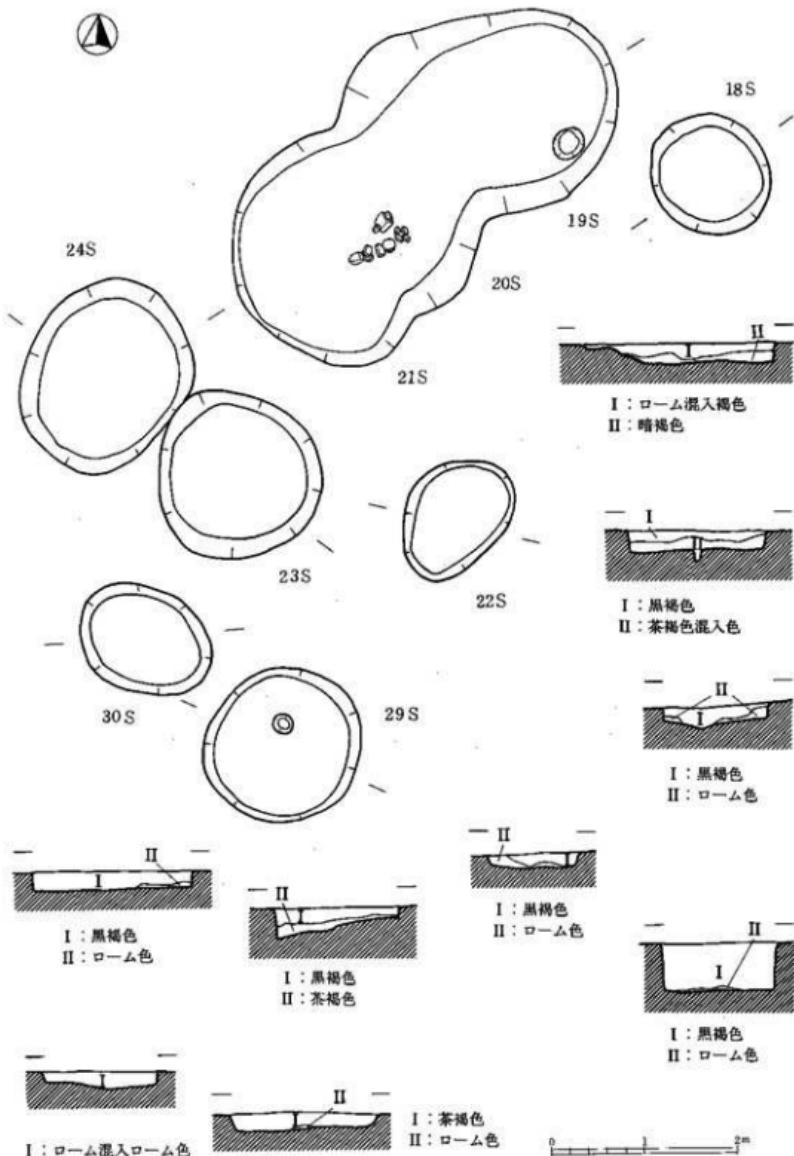
第25図 小豹穴群 (2)



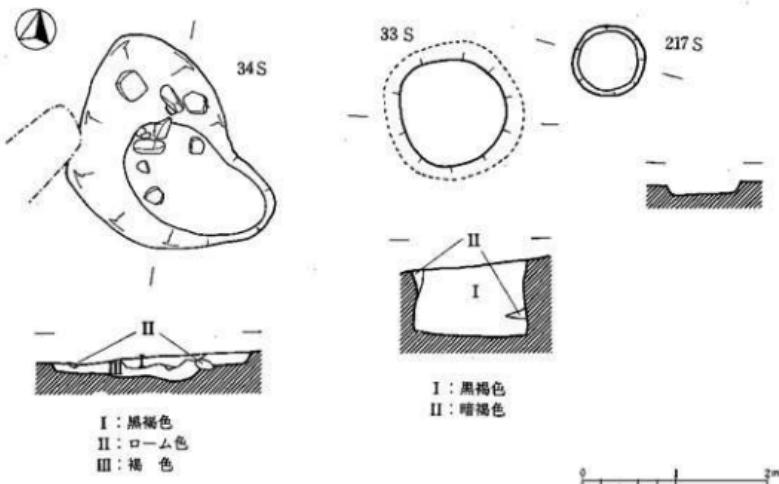
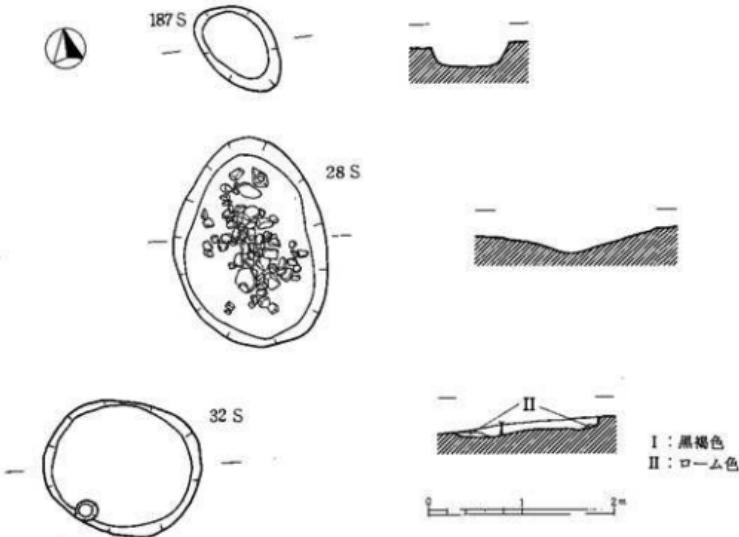
第26図 小豊穴群 (3)



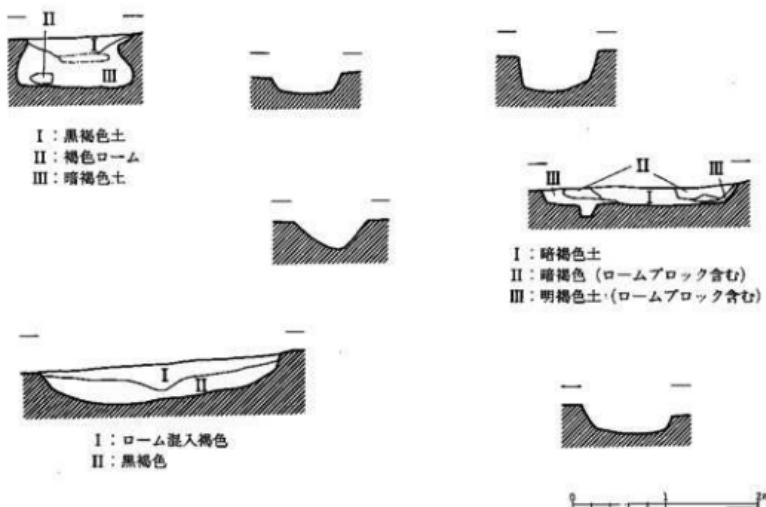
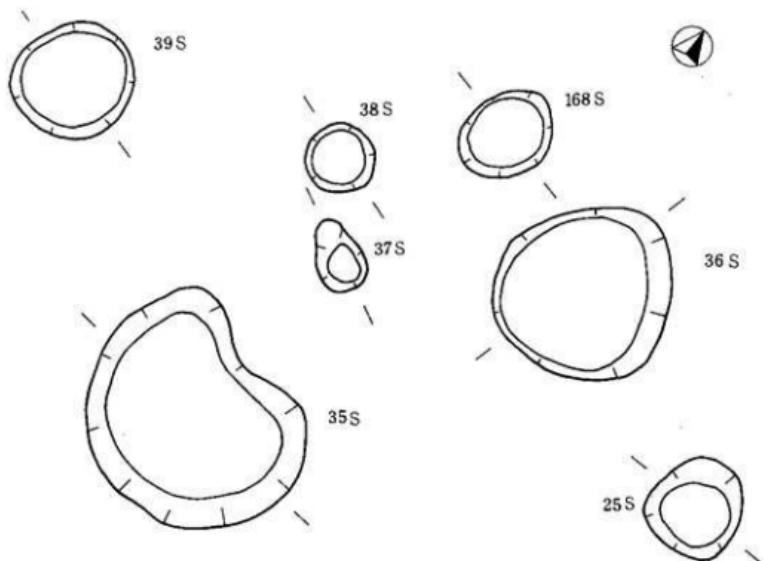
第27図 小堅穴群 (4)



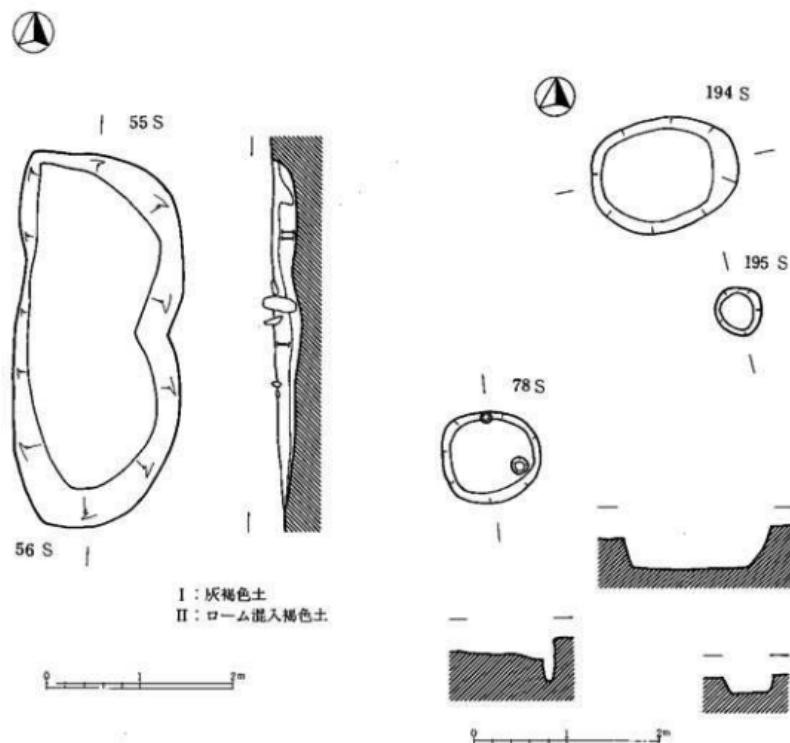
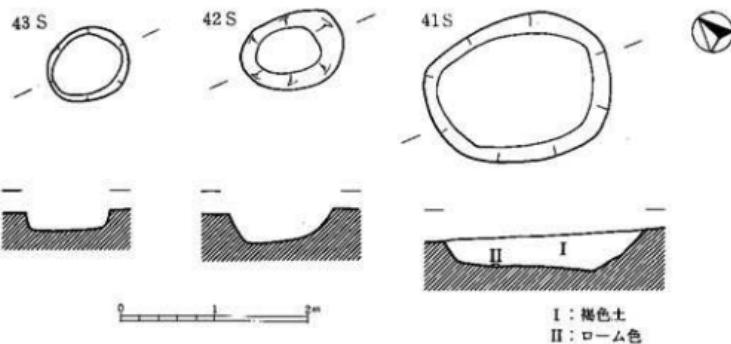
第28図 小堅穴群 (5)



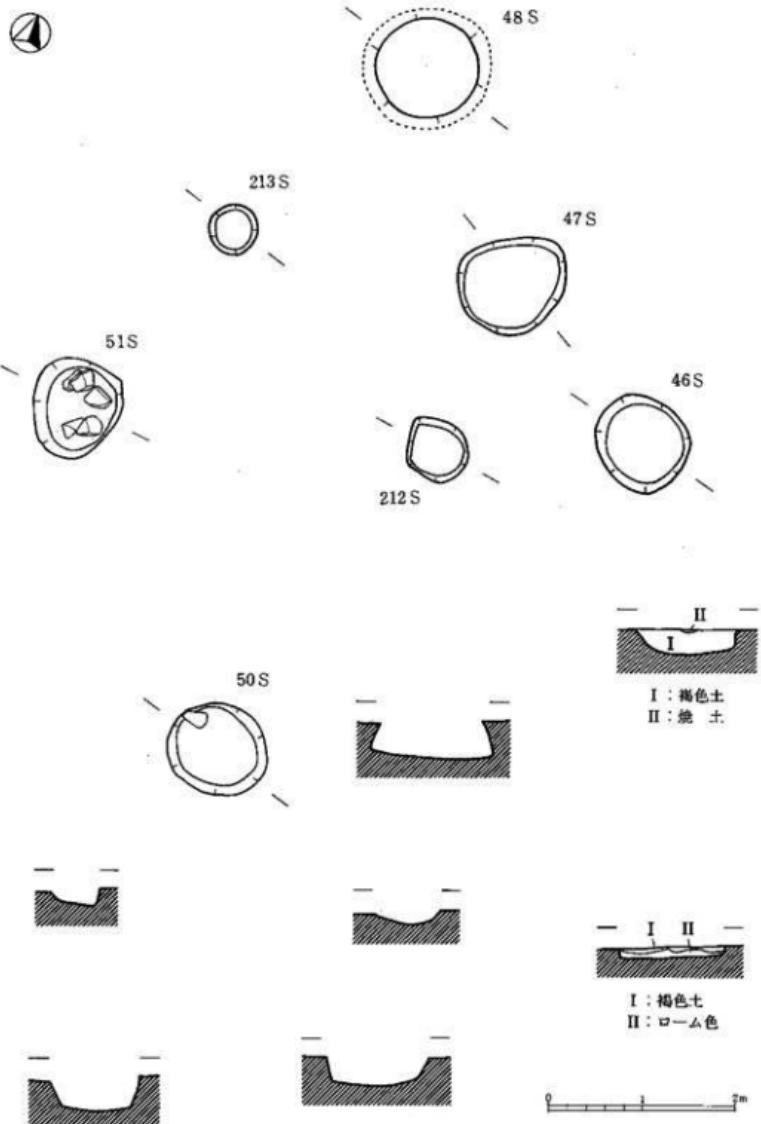
第29図 小空穴群 (6)



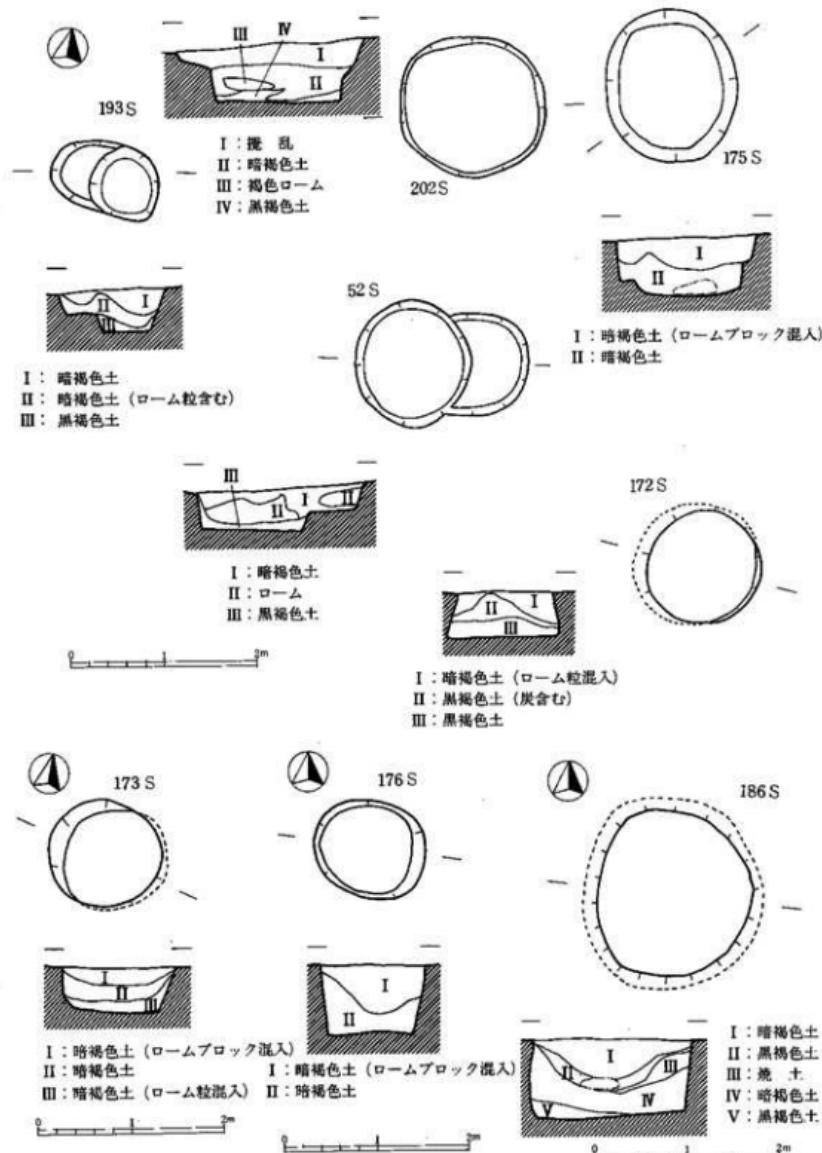
第30図 小竪穴群 (7)



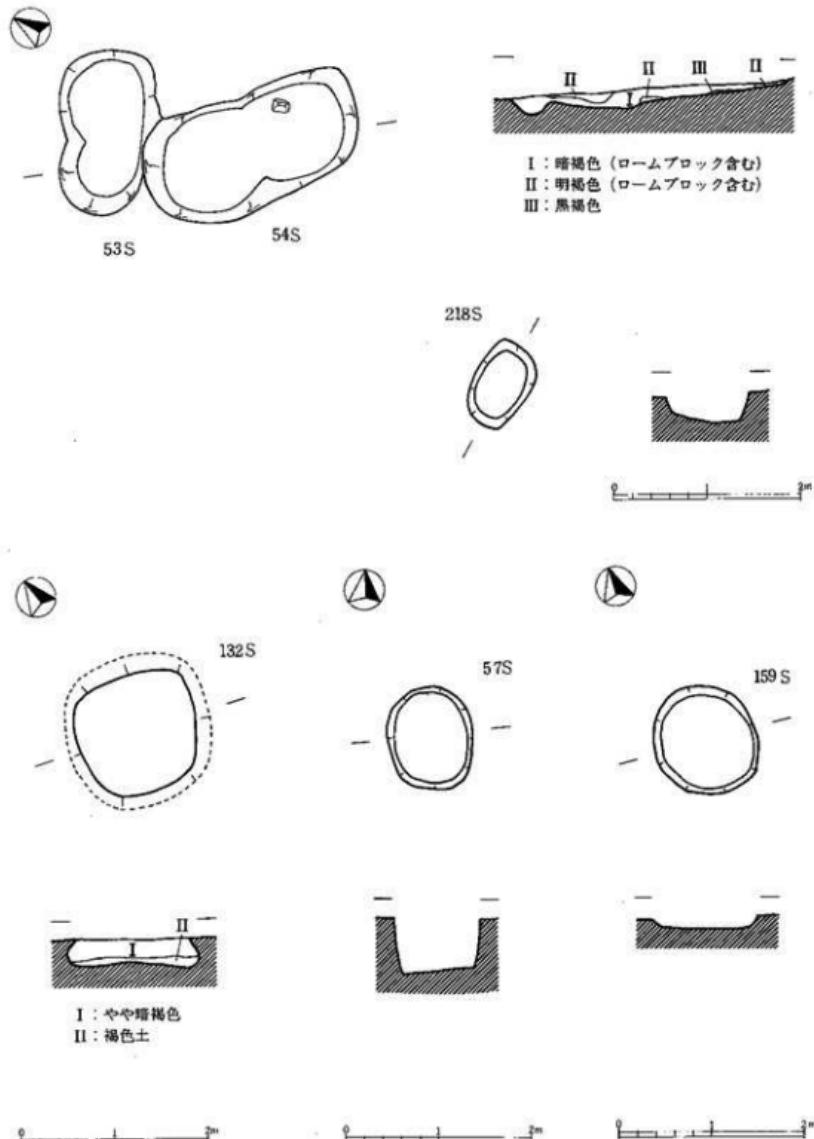
第31図 小甌大群 (8)



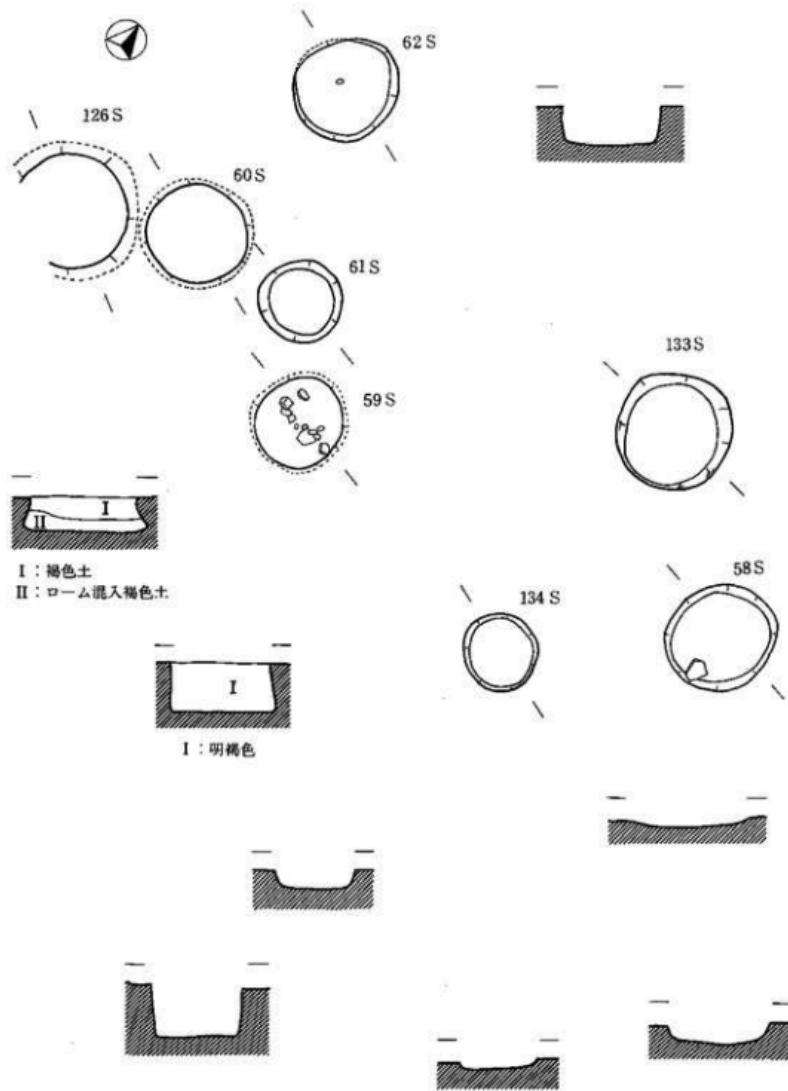
第32図 小竪穴群 (9)



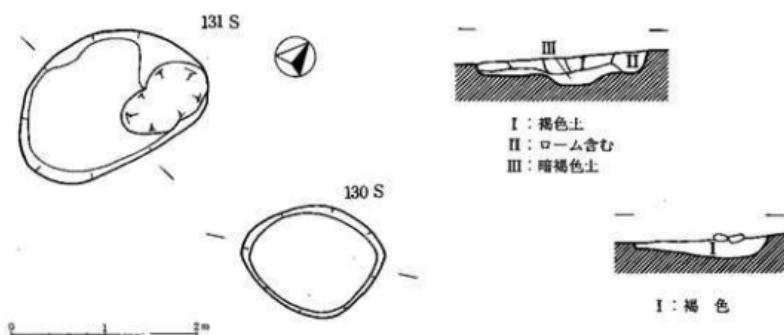
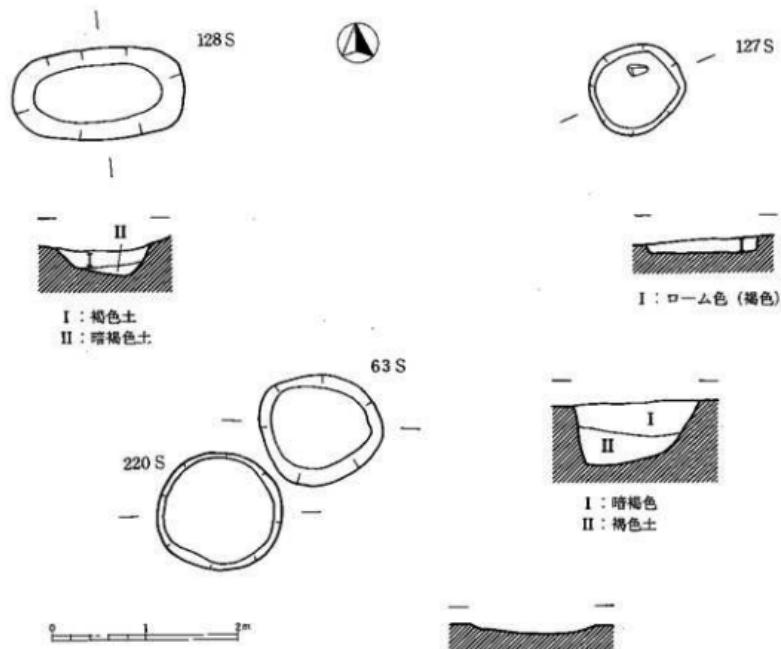
第33図 小豎穴群 (10)



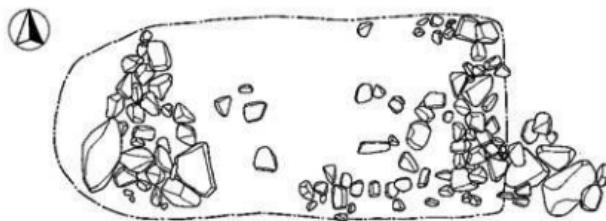
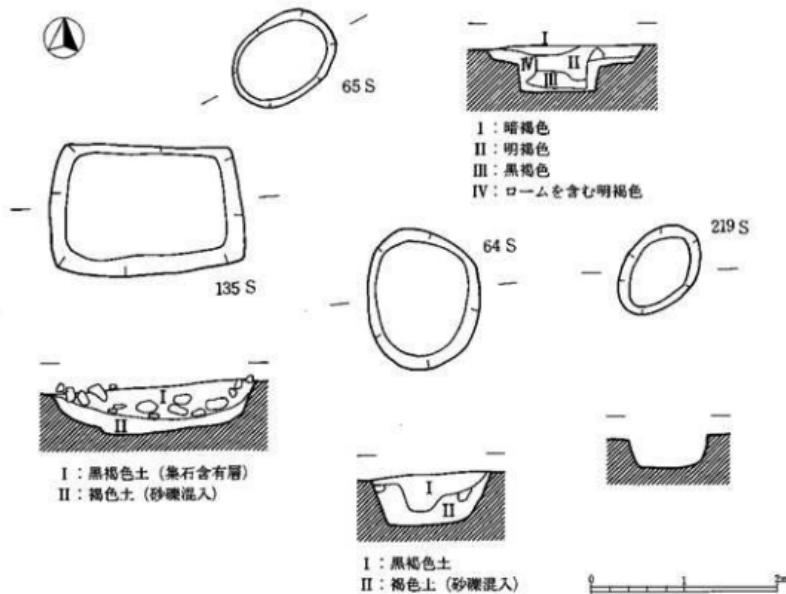
第34図 小竪穴群 (11)



第35図 小竪穴群 (12)

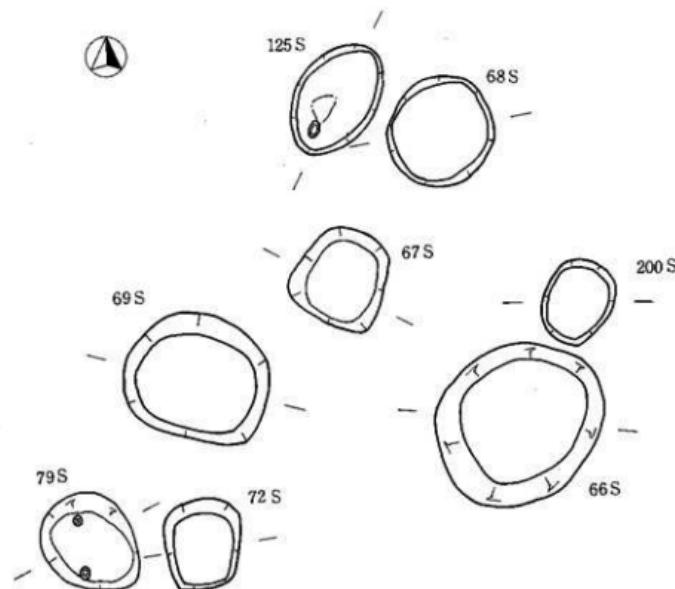


第36図 小型穴群 (13)



第135号小竪穴集石山土状態

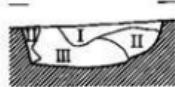
第37図 小竪穴群 (14)



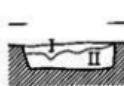
I : 黒褐色
II : 暗褐色



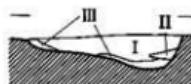
I : 暗褐色
II : 黑褐色
III : 明褐色



I : 明褐色 (ロームを多く含む)
II : 暗褐色
III : 黑褐色



I : 暗褐色
II : 明褐色



I : 黒褐色 (ローム含む)
II : 暗褐色
III : 明褐色



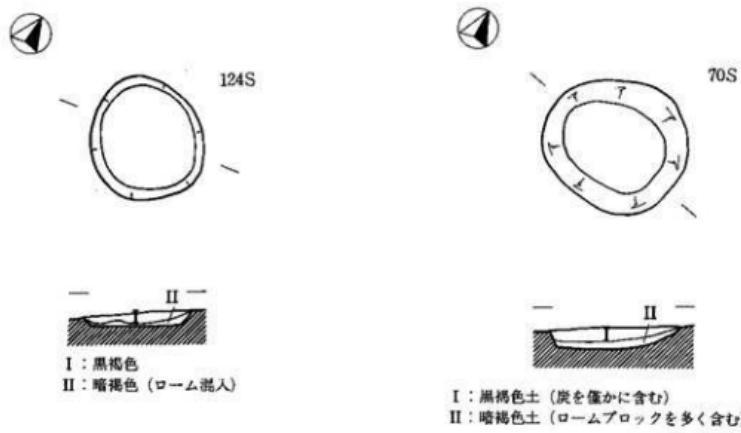
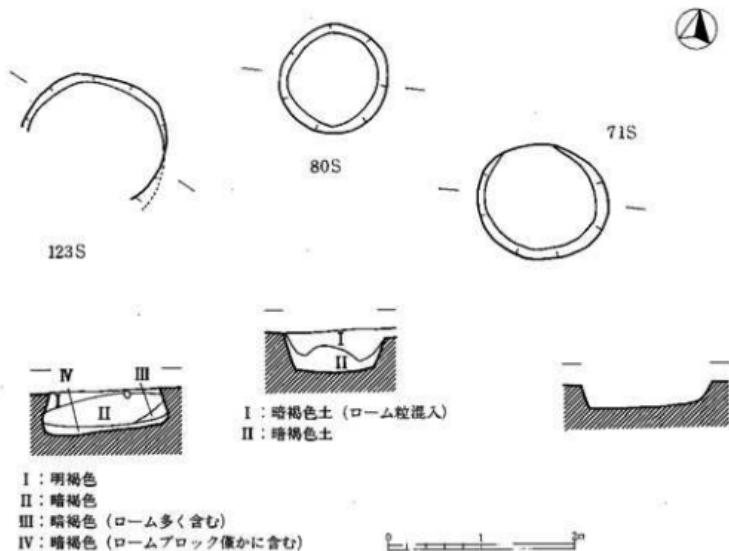
I : 暗褐色
II : 明褐色



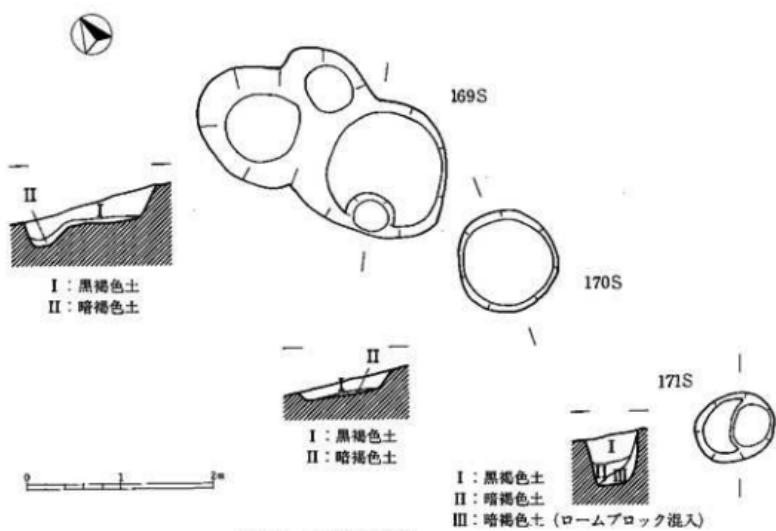
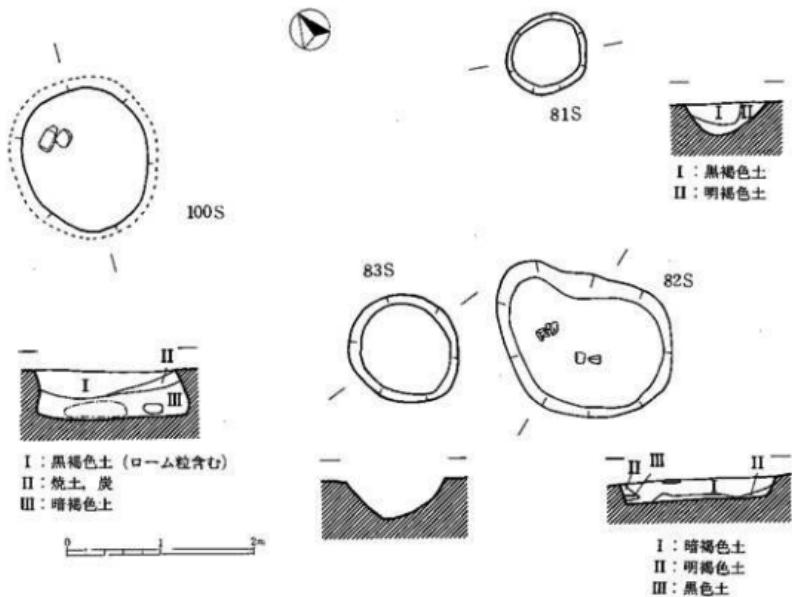
I : 黑褐色
II : 暗褐色



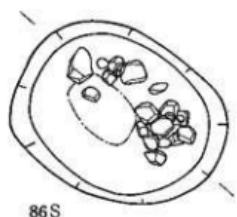
第38図 小堅穴群 (15)



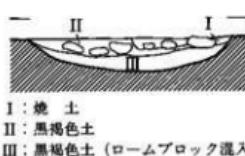
第39図 小豈穴群 (16)



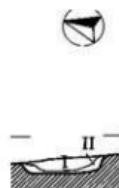
第40図 小豈穴群 (17)



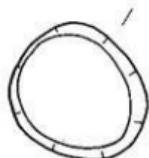
86S



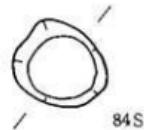
I : 焼土
II : 黒褐色土
III : 黒褐色土 (ロームブロック混入)



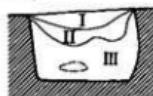
I : 黒褐色土
II : 喻褐色土 (ローム粒混入)



87S



84S

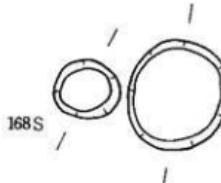


I : 喻褐色
II : 棕色ローム
III : 黑褐色土

0 1 2m



85S



94S

168S

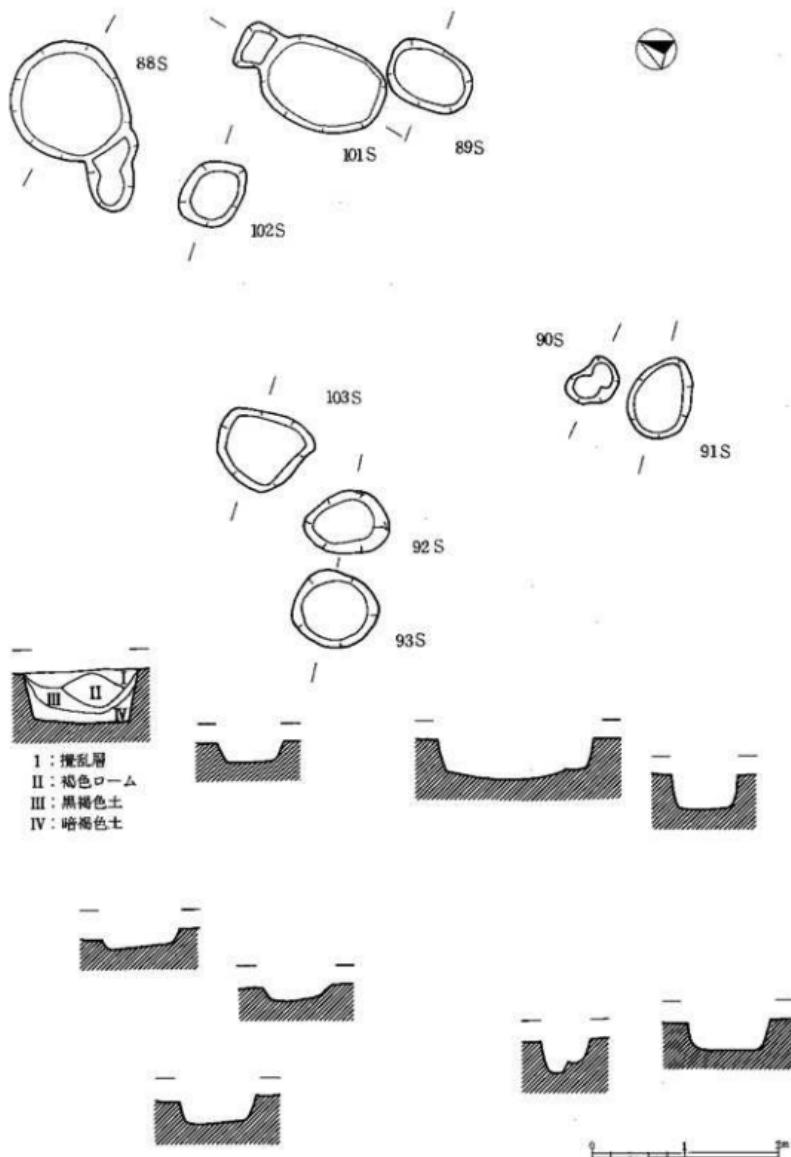


I : 黒褐色土
II : 黒褐色土 (ローム粒含む)

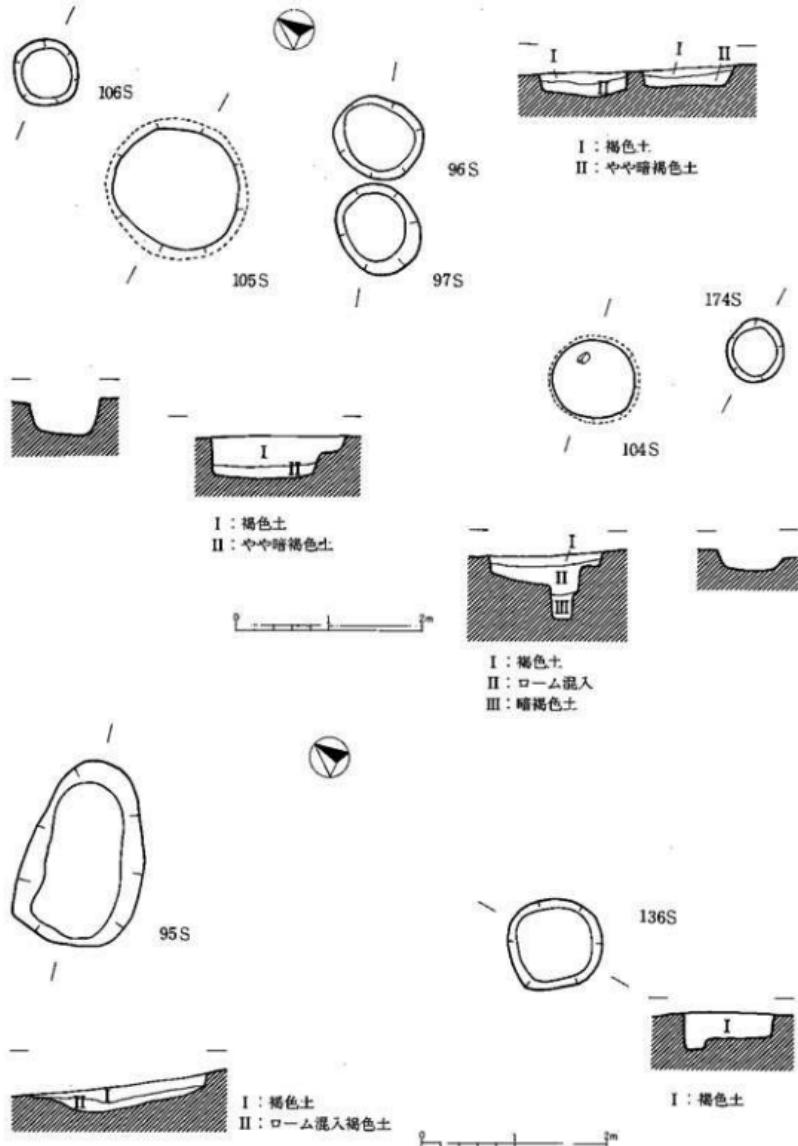


0 1 2m

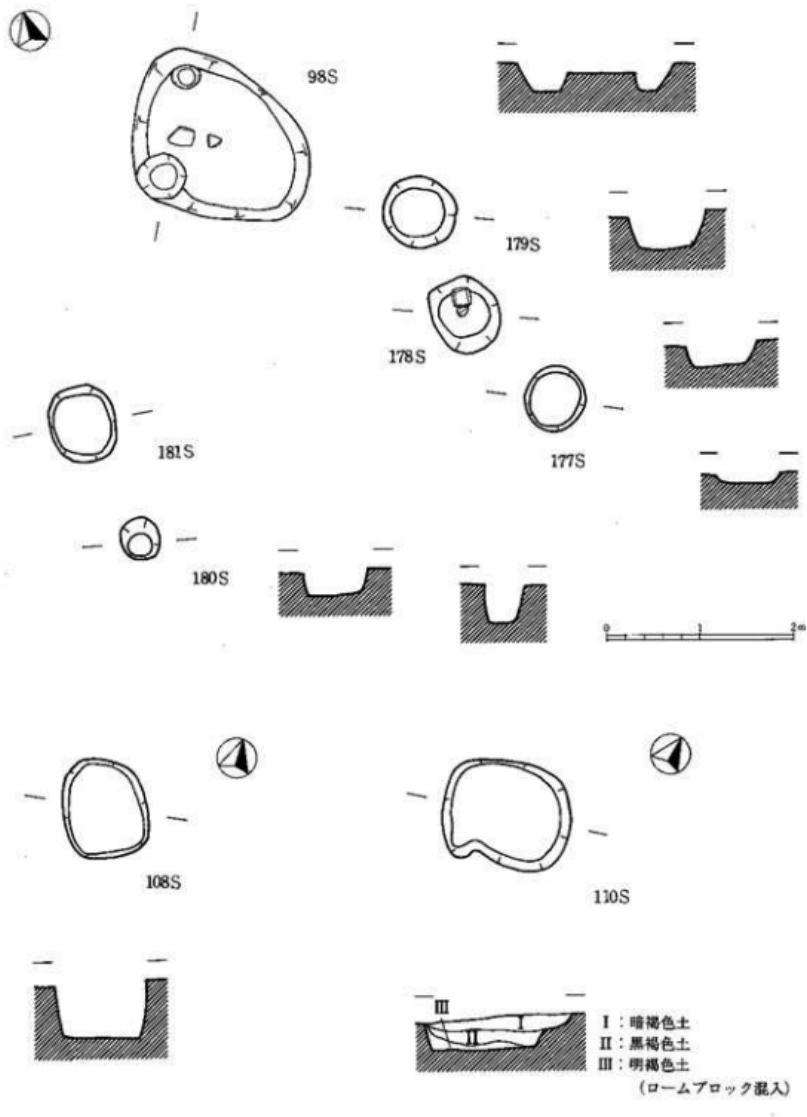
第41図 小型穴群 (18)



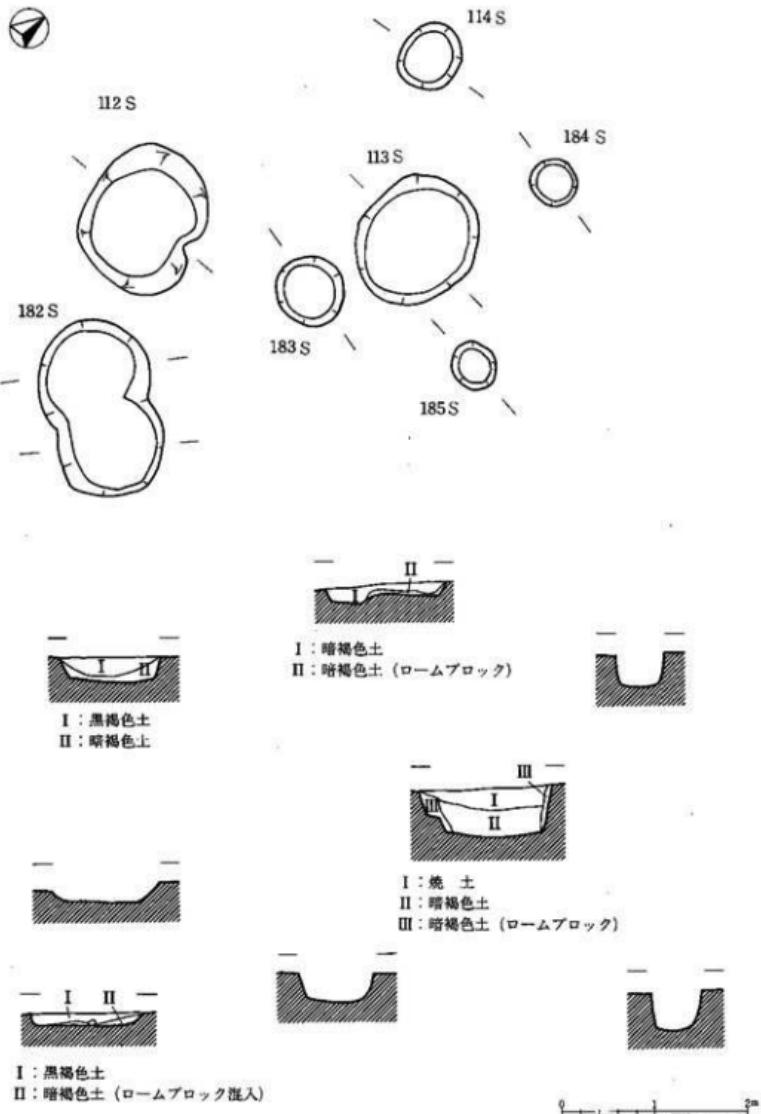
第42図 小竪穴群 (19)



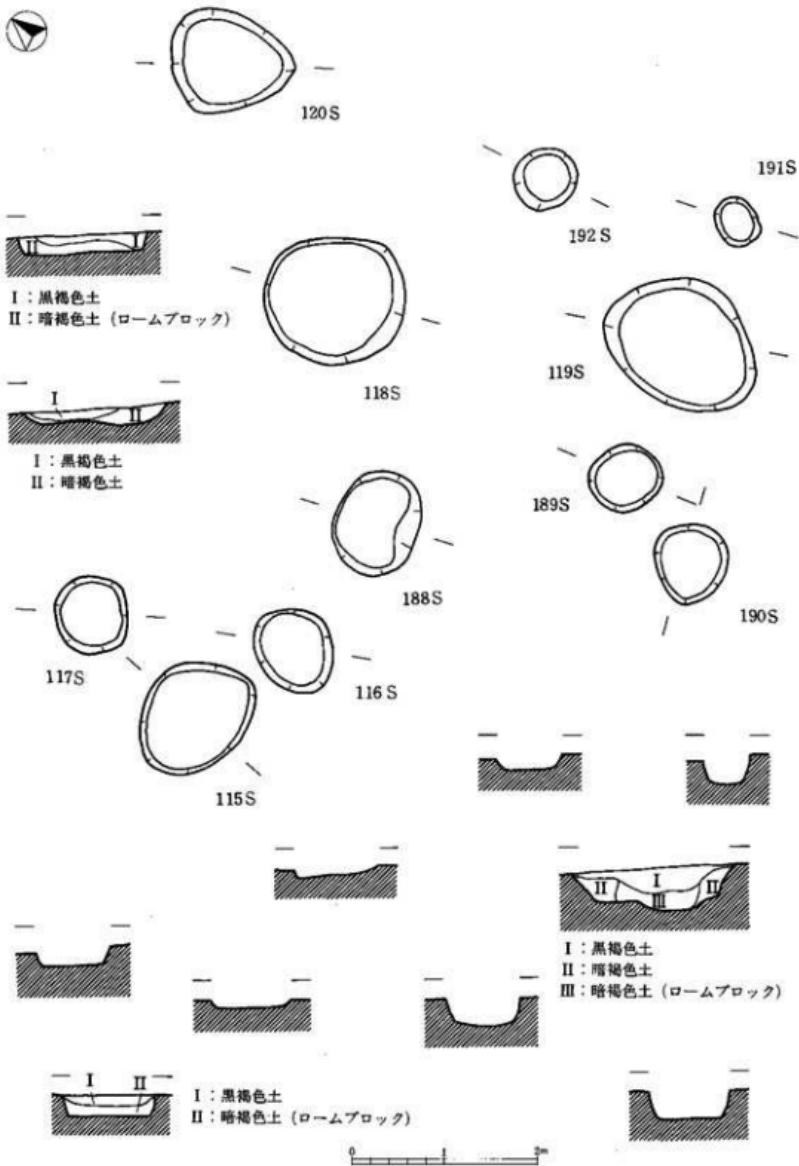
第43図 小豎穴群 (20)



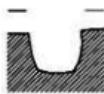
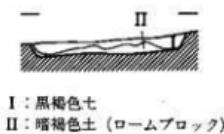
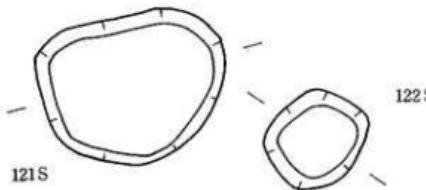
第44図 小豊穴群 (21)



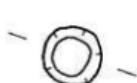
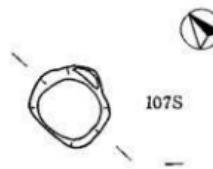
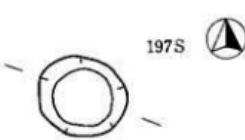
第45図 小型穴群 (22)



第46図 小豎穴群 (23)



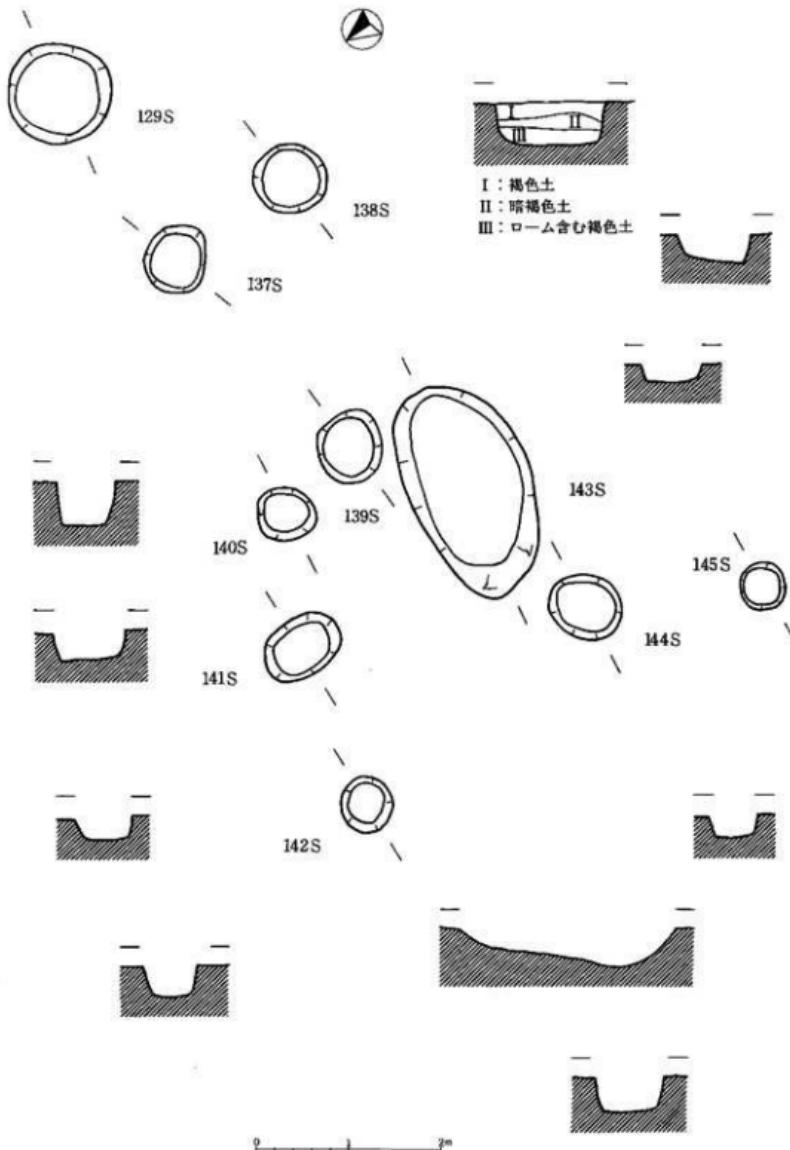
0 1 2m



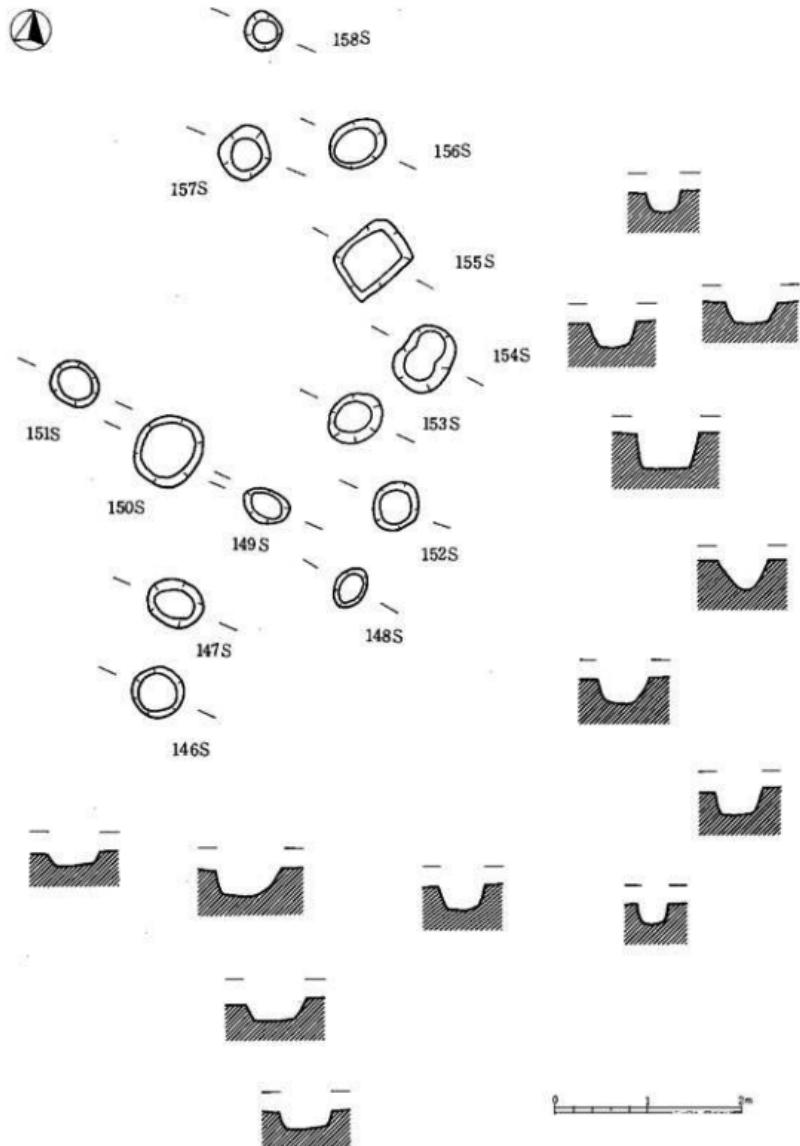
0 1 2m

0 1 2m

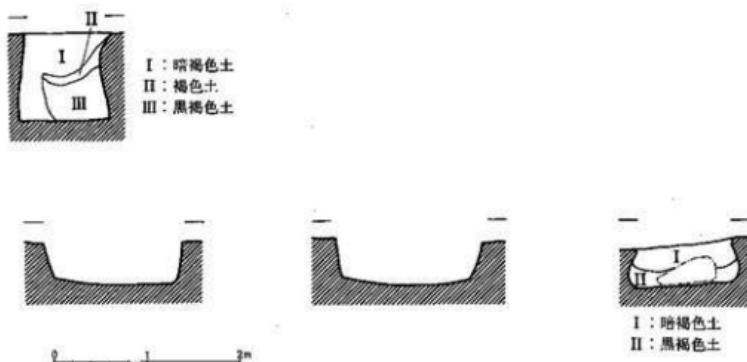
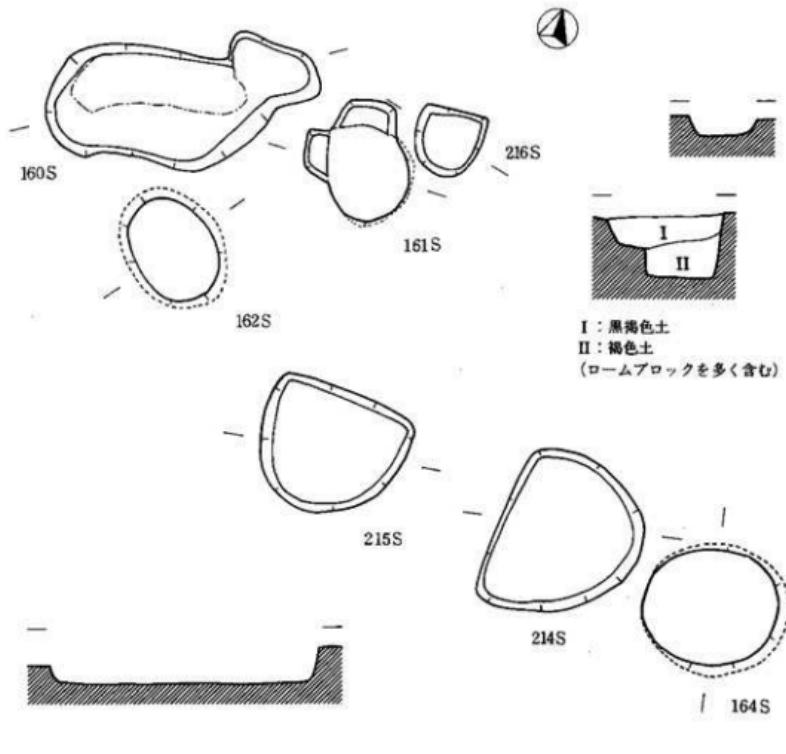
第47図 小竪穴群 (24)



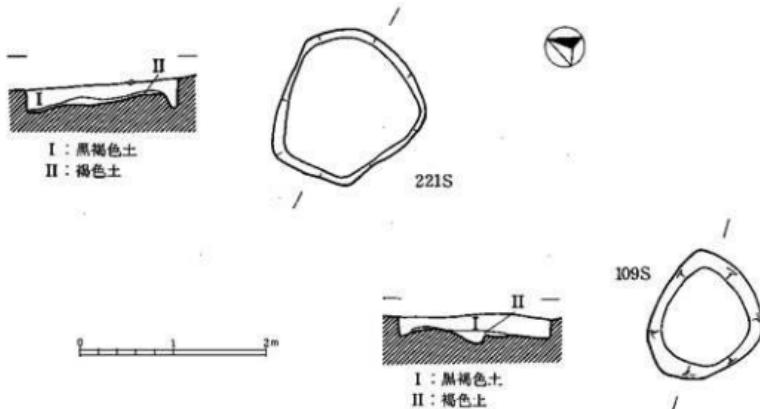
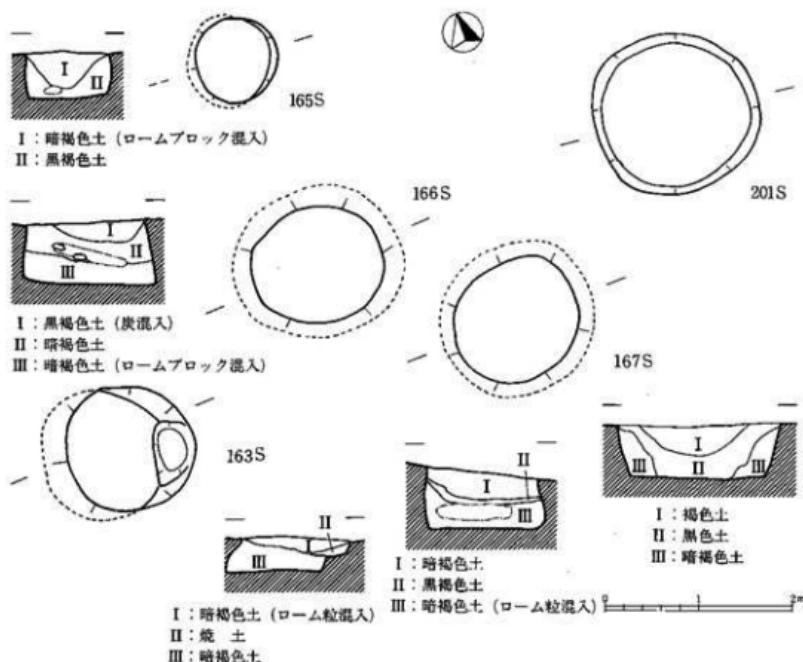
第48図 小豎穴群 (25)



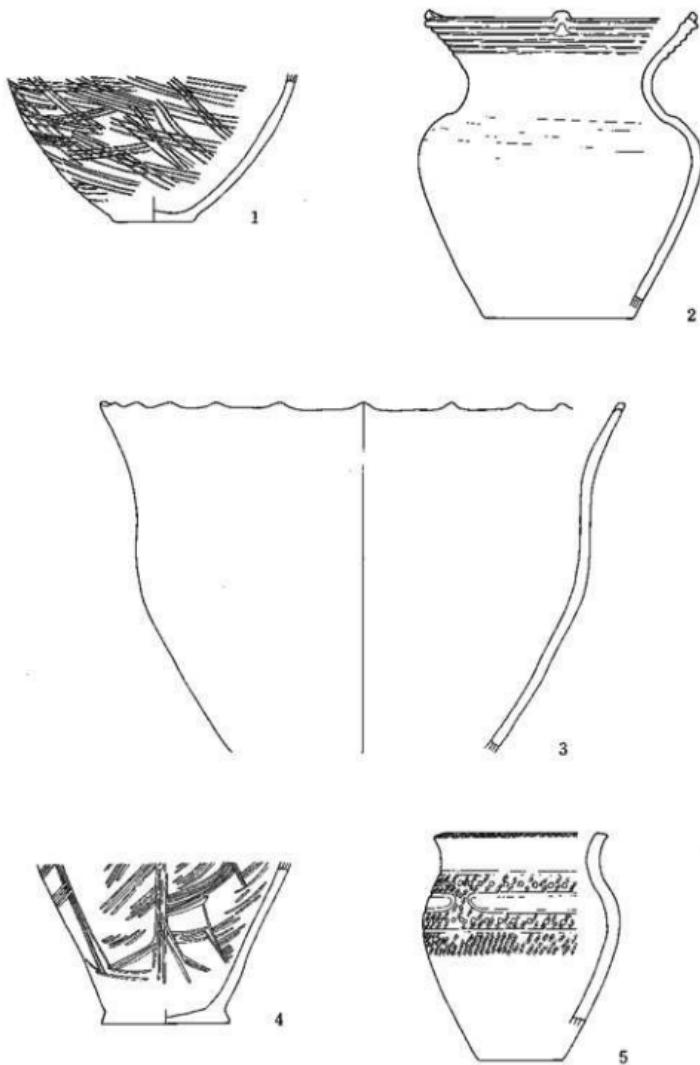
第49図 小豎穴群 (26)



第50図 小堅穴群 (27)

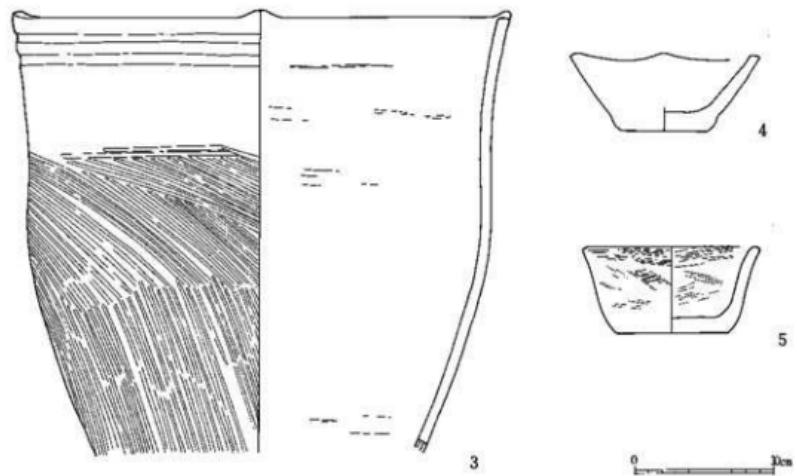
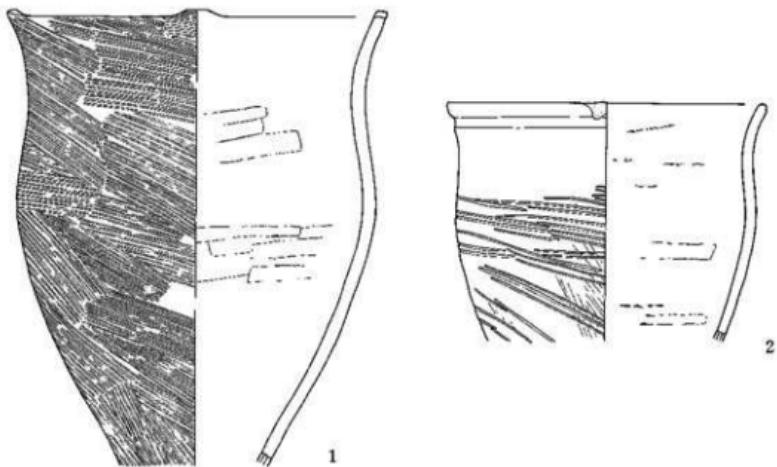


第51図 小野穴群 (28)



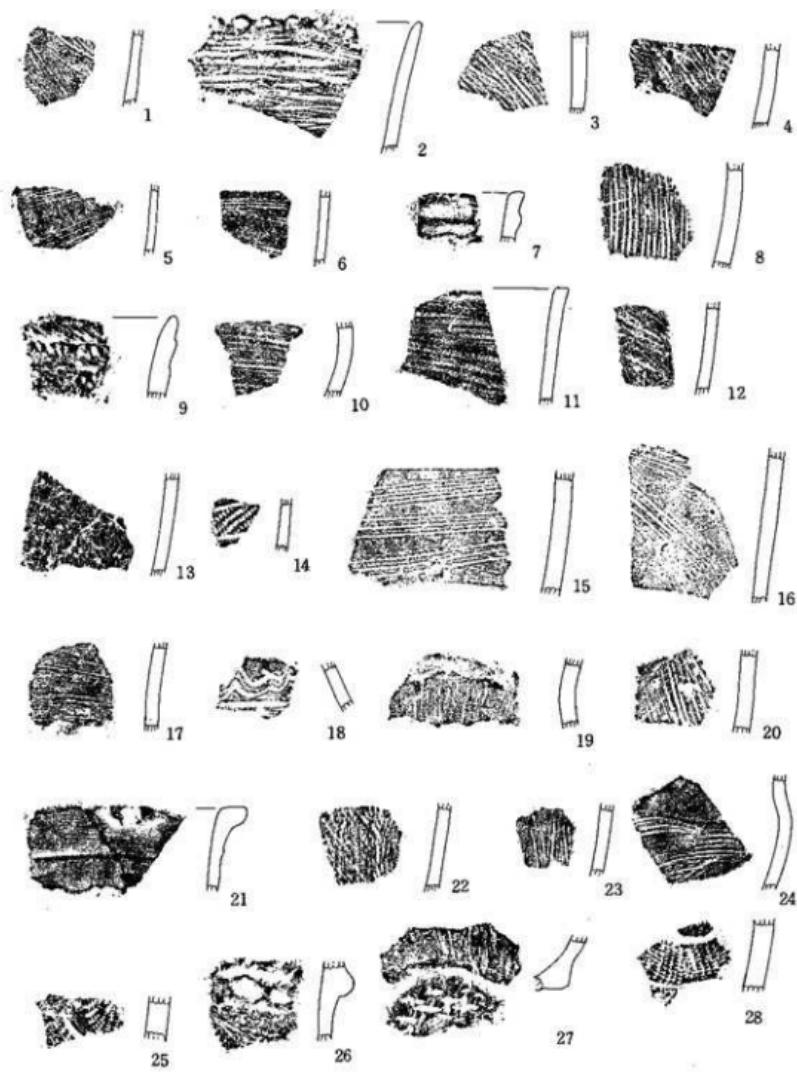
第52図 小堅穴出土土器（1）

1：14号，2・3：58号，4：62号，5：162号



第53圖 小豎穴出土土器（2）

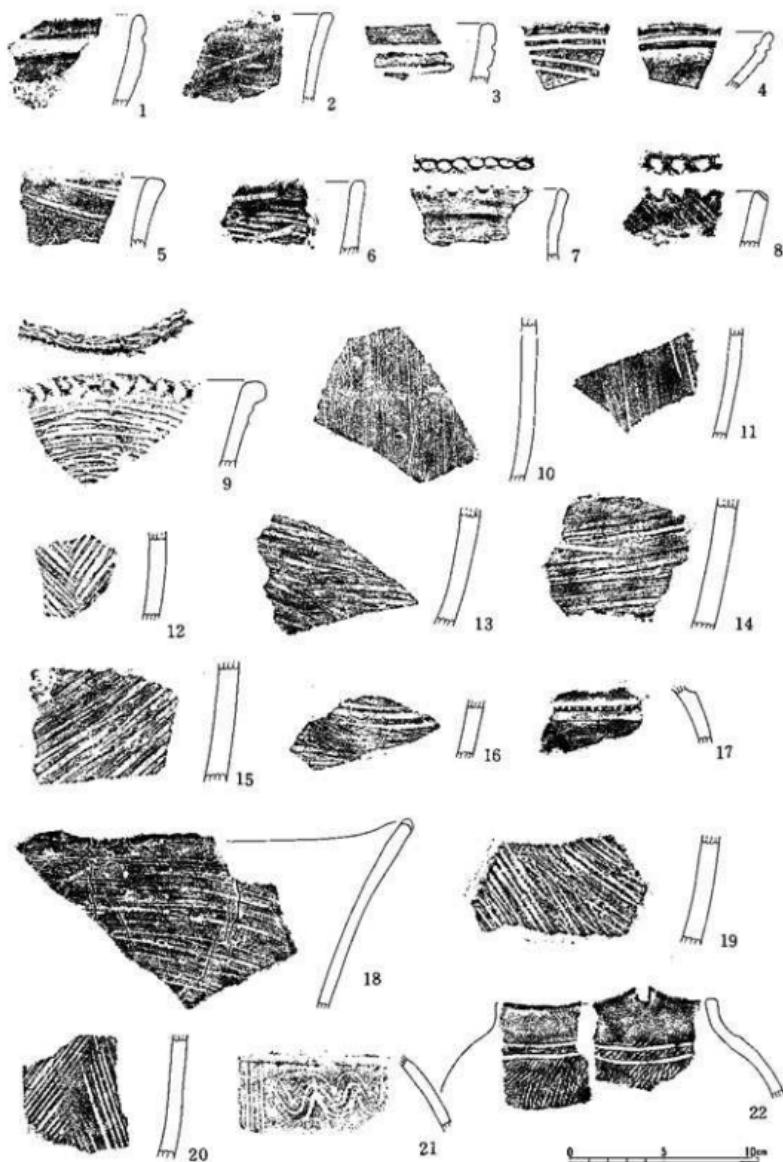
1：167號，2·3：156號，4：193號，5：211號



第54図 小堅穴出土土器（3）

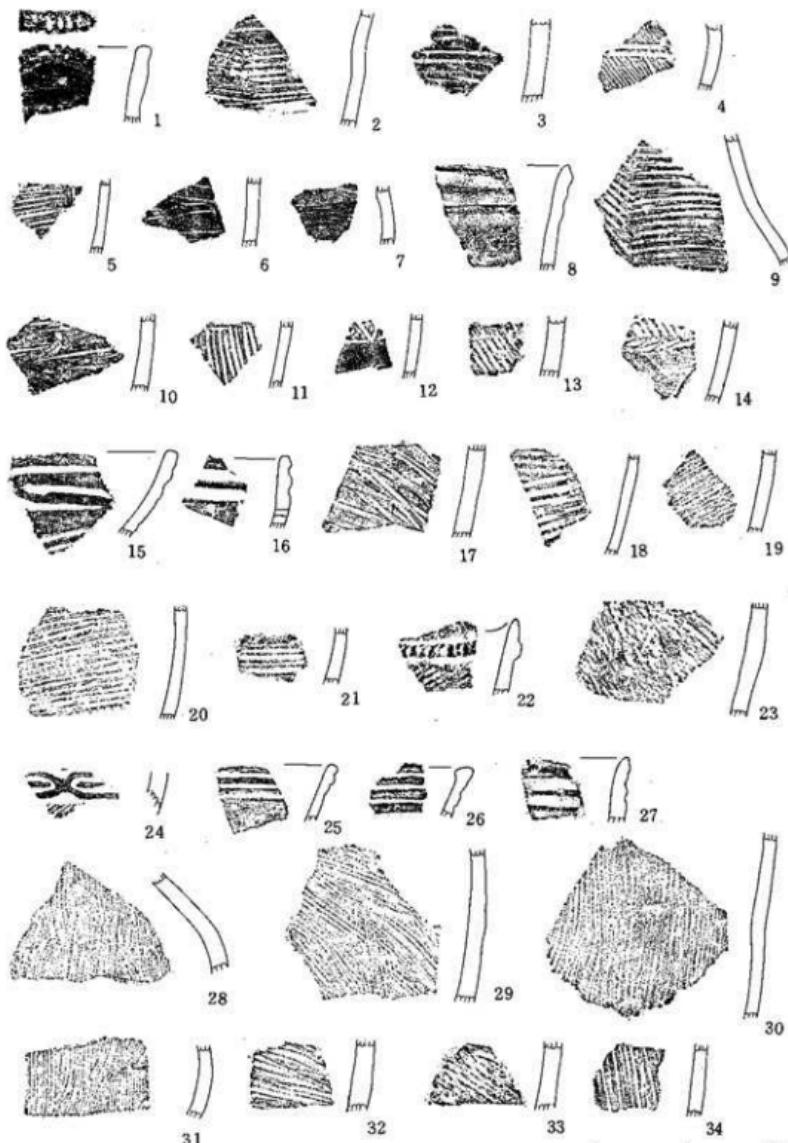
1号・1, 3号・2~5, 6号・6, 7号・7, 8号・8, 9号・9, 10号・10, 11号・11, 12号・12, 11号・13, 14号・13~20号, 15号・21~24号, 19号・25号, 20号・26~28号

0 5 10cm



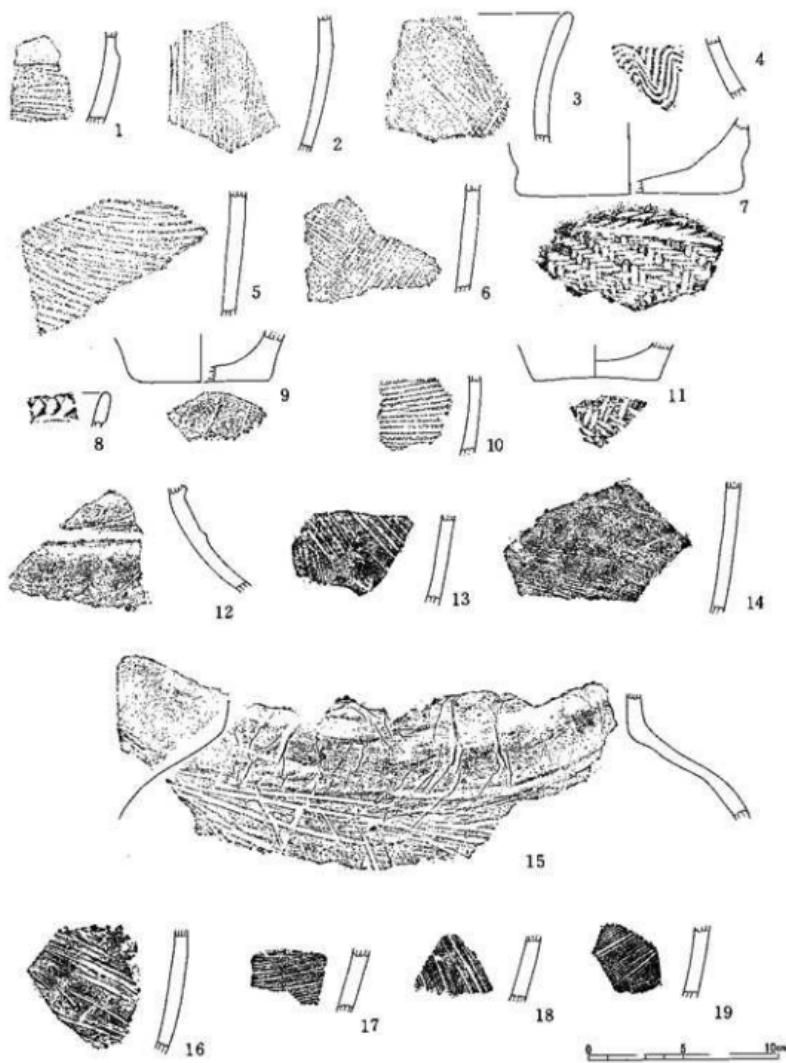
第55図 小豊穴出土土器(4)

14号・1~17, 16号・8~22



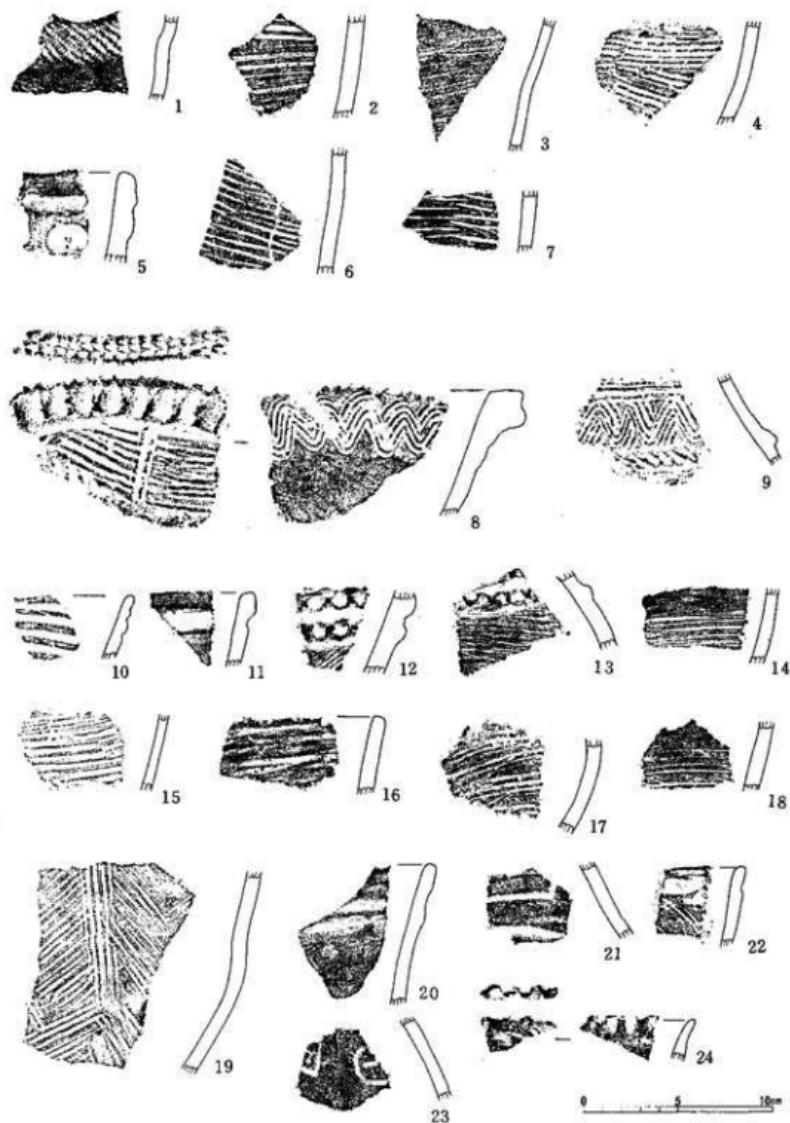
第56図 小豎穴出土土器 (5)

21号・1~4、27号・5~7、28号・8、9、29号・10~12、31号・13、32号・14、33号・15~19、34号・20~22、
36号・23、28号・24、39号・25~34



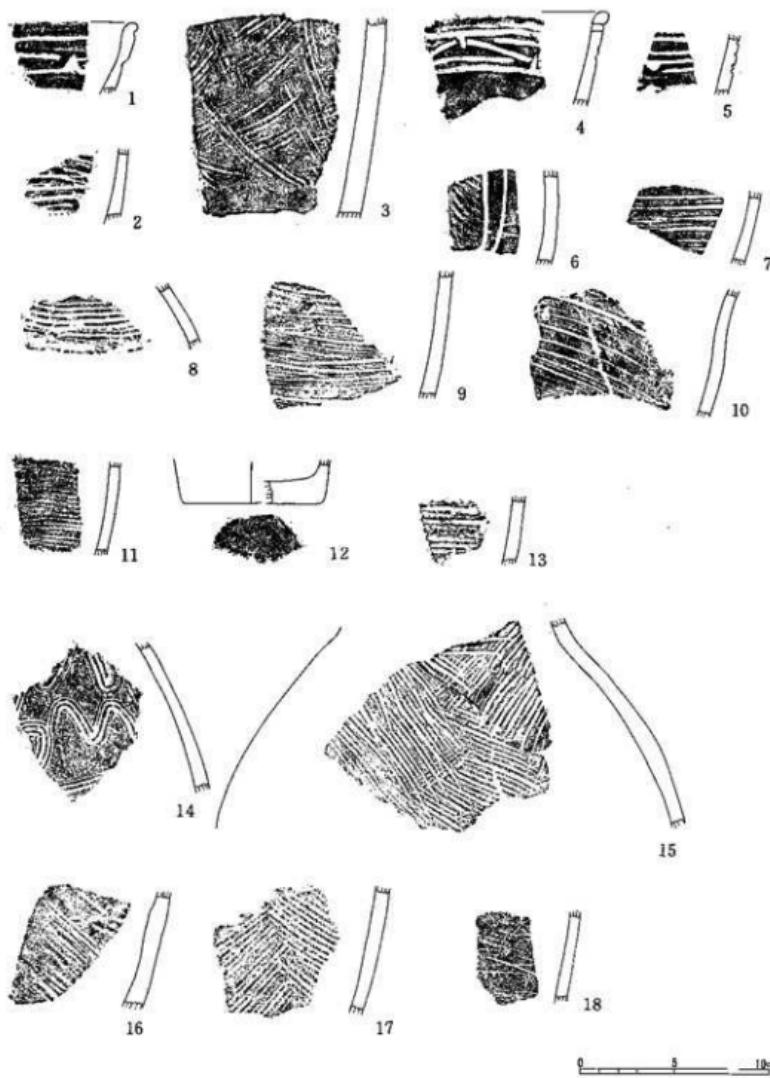
第57圖 小堅穴出土土器（6）

40号・1~7, 41号・8, 9, 42号・10, 43号・11, 46号・12~15, 48号・16~19



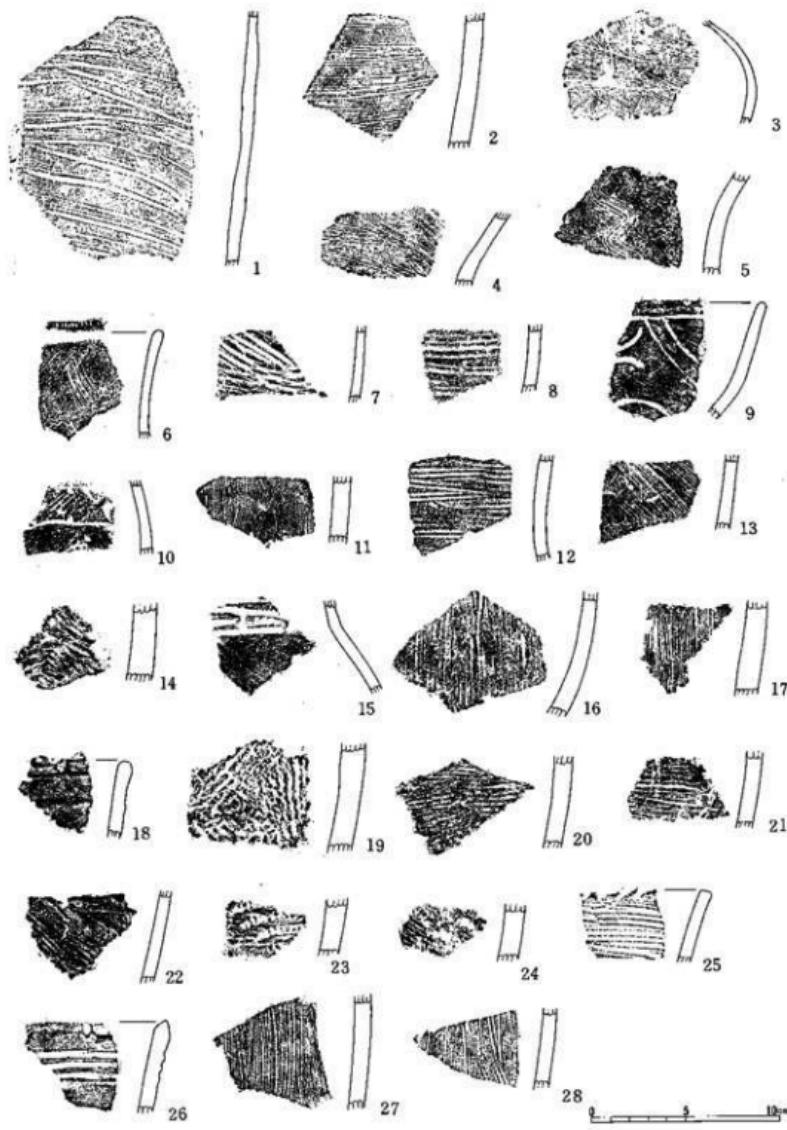
第58図 小豊穴出土土器 (7)

49号・1~3, 51号・4, 52号・5, 56号・6, 7, 57号・8~18, 59号・19~24



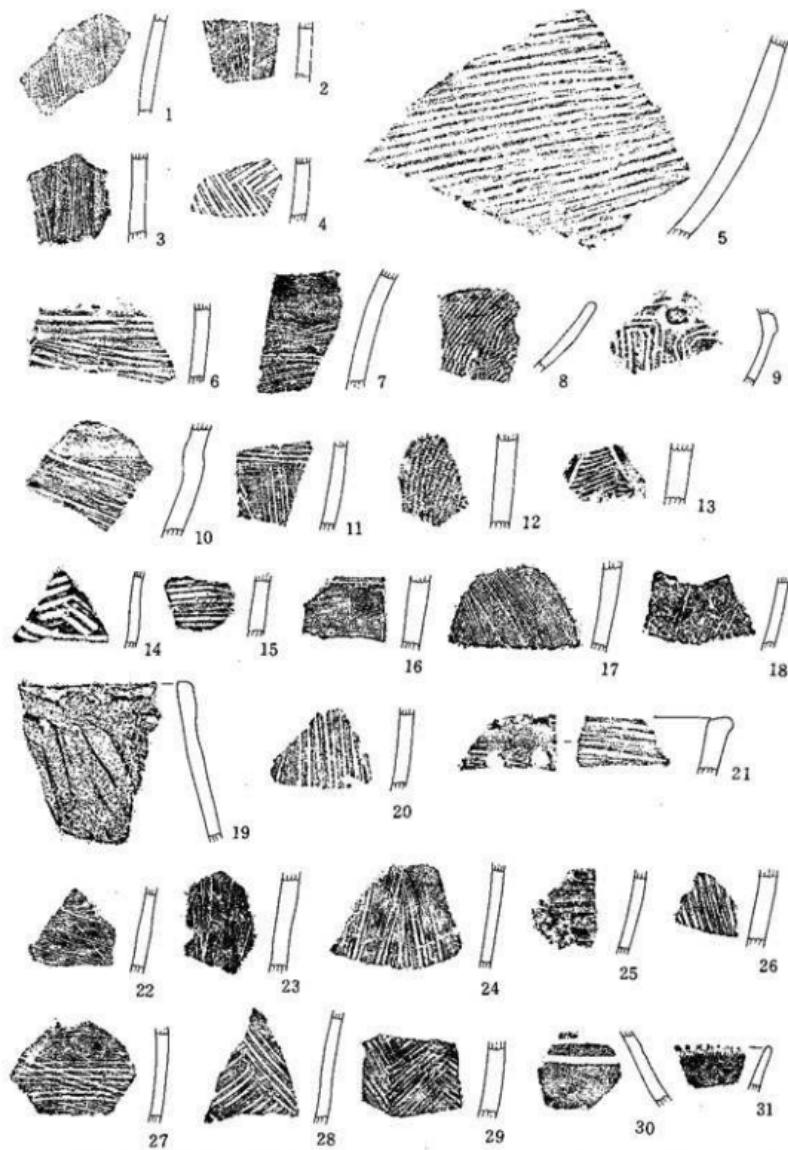
第59図 小型穴出土土器(8)

62号・1~3, 63号・4~10, 64号・11~13, 68号・14~18



第60圖 小堅穴出土土器（9）

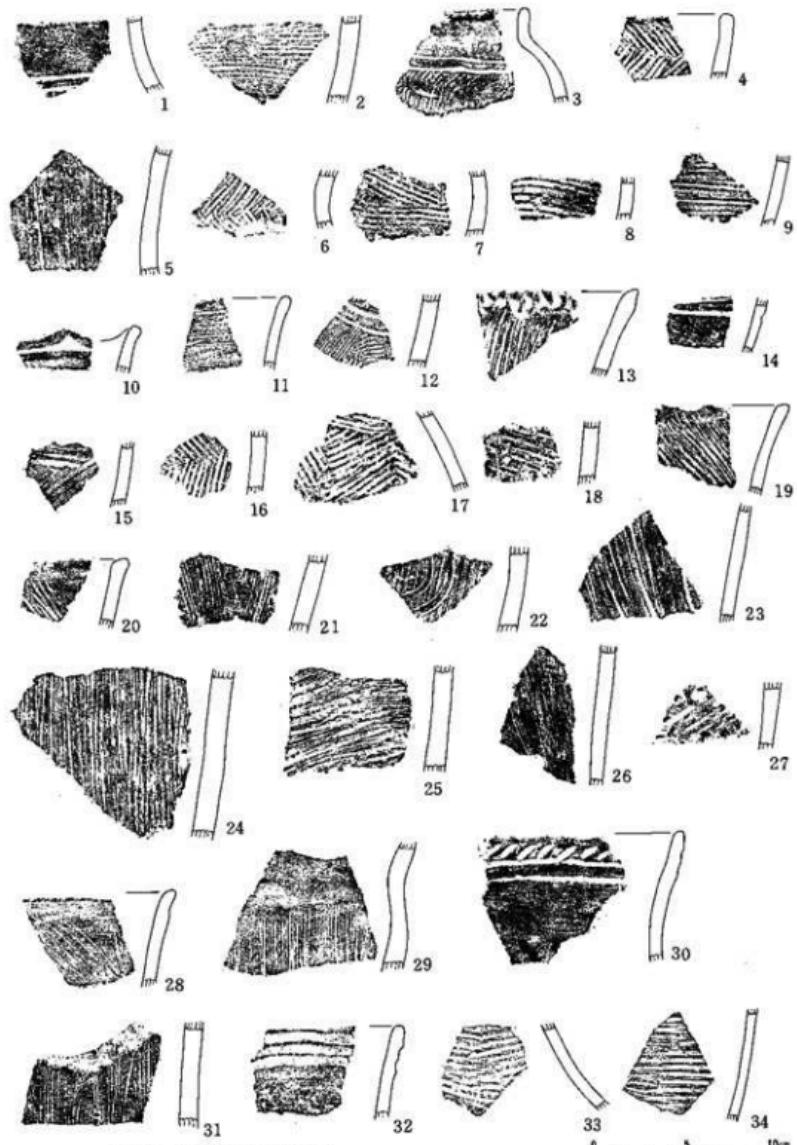
69号·1~5, 71号·6, 73号·7, 8, 85号·9~12, 87号·13, 94号·14, 96号·15~17, 98号·18, 99号·19~24, 101号·25, 107号·26, 27, 110号·28



第61図 小豈穴出土土器 (10)

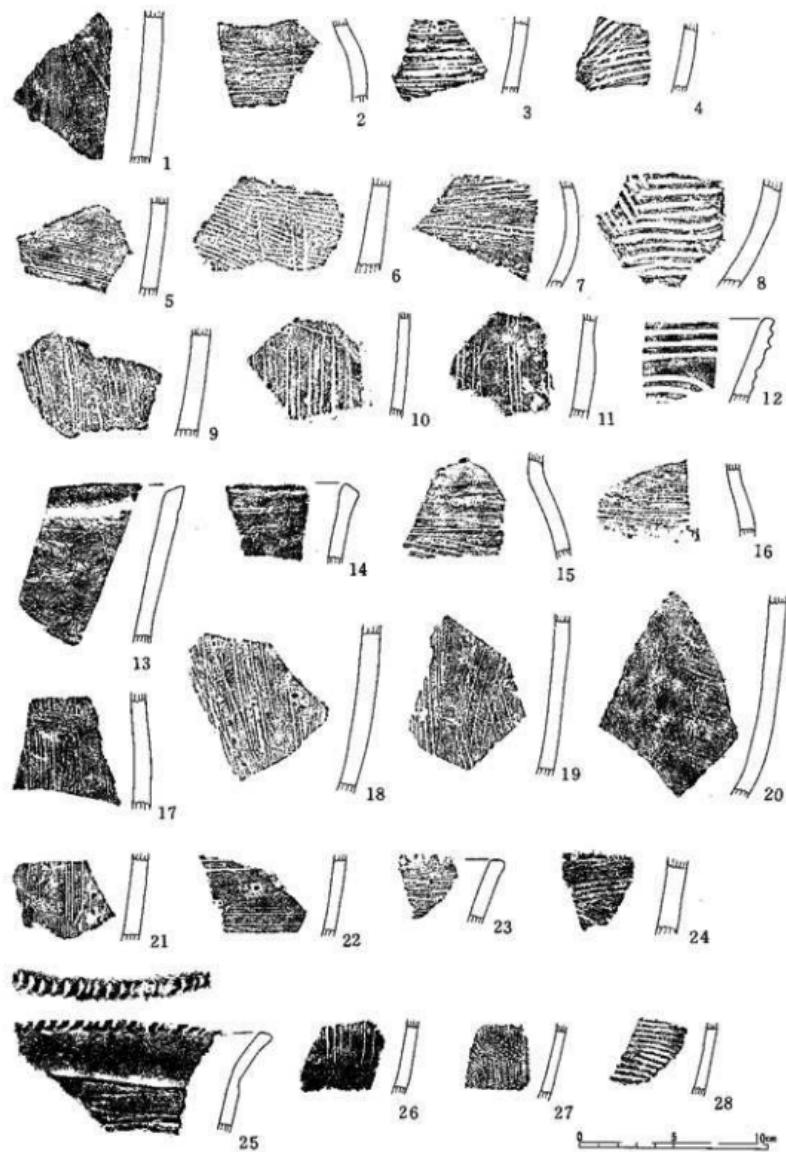
100号・1~9, 113号・10~13, 117号・14, 15, 120号・16, 123号・17~19, 126号・20, 21,
129号・22~24, 131号・25, 26, 132号・27~31

0 5 10cm



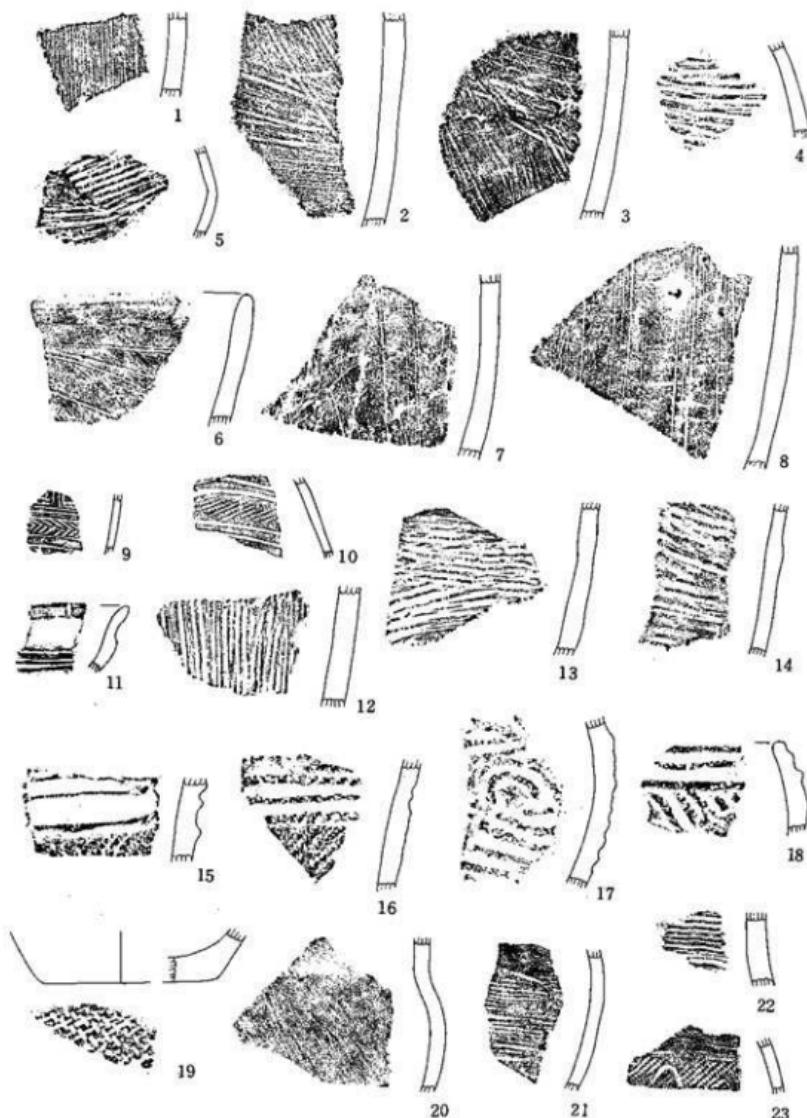
第62図 小竪穴出土土器 (11)

133号・1,2, 135号・3~9, 136号・10,11, 137号・12, 150号・13,14, 155号・15,16, 160号・17,18,
161号・19~21, 162号・22~26, 163号・27, 164号・25~34



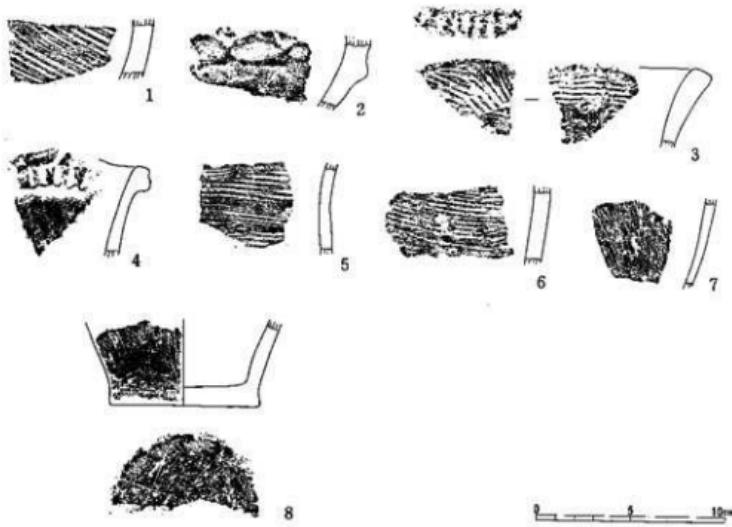
第63図 小豎穴出土土器 (12)

165号・1, 166号・2-11, 167号・12-23, 169号・24, 172号・25-28



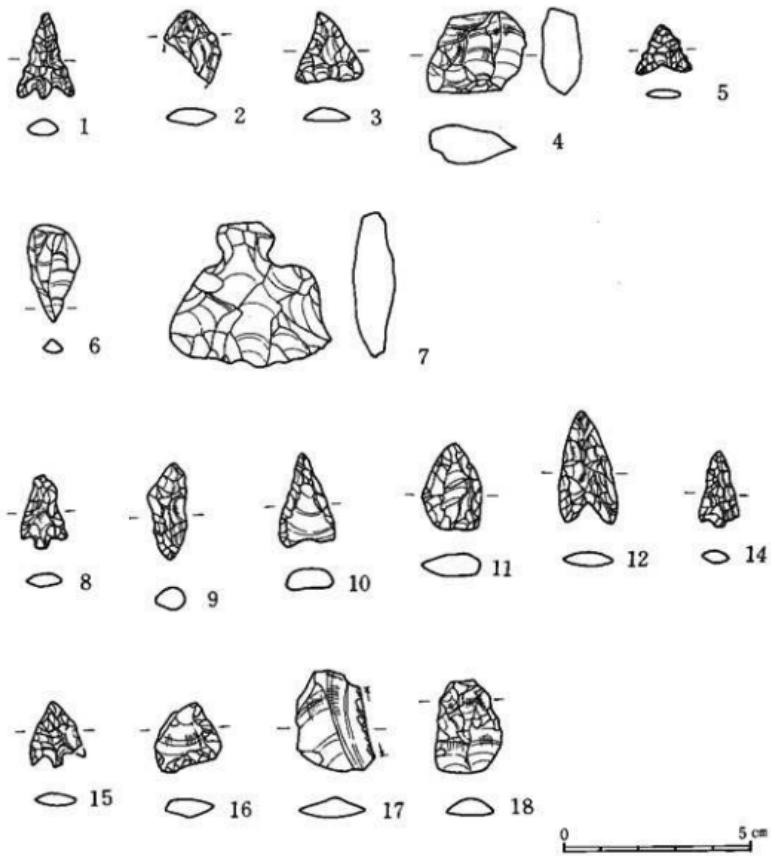
第64図 小竖穴出土土器 (13)

173号・1~5、175号・6~8、184号・9、186号・10~14、194号・15~18、201号・19、20号・20~23



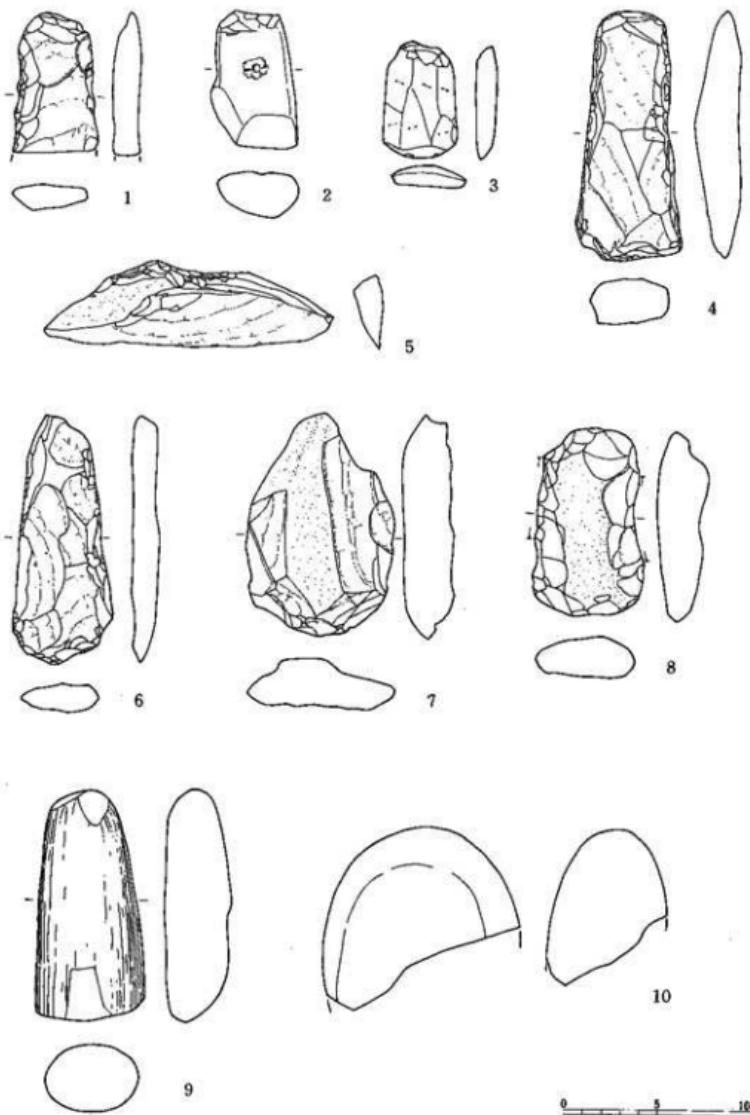
第65図 小堅穴出土土器 (14)

204号・1, 214号・2, 216号・3, 4, 218号・5~8



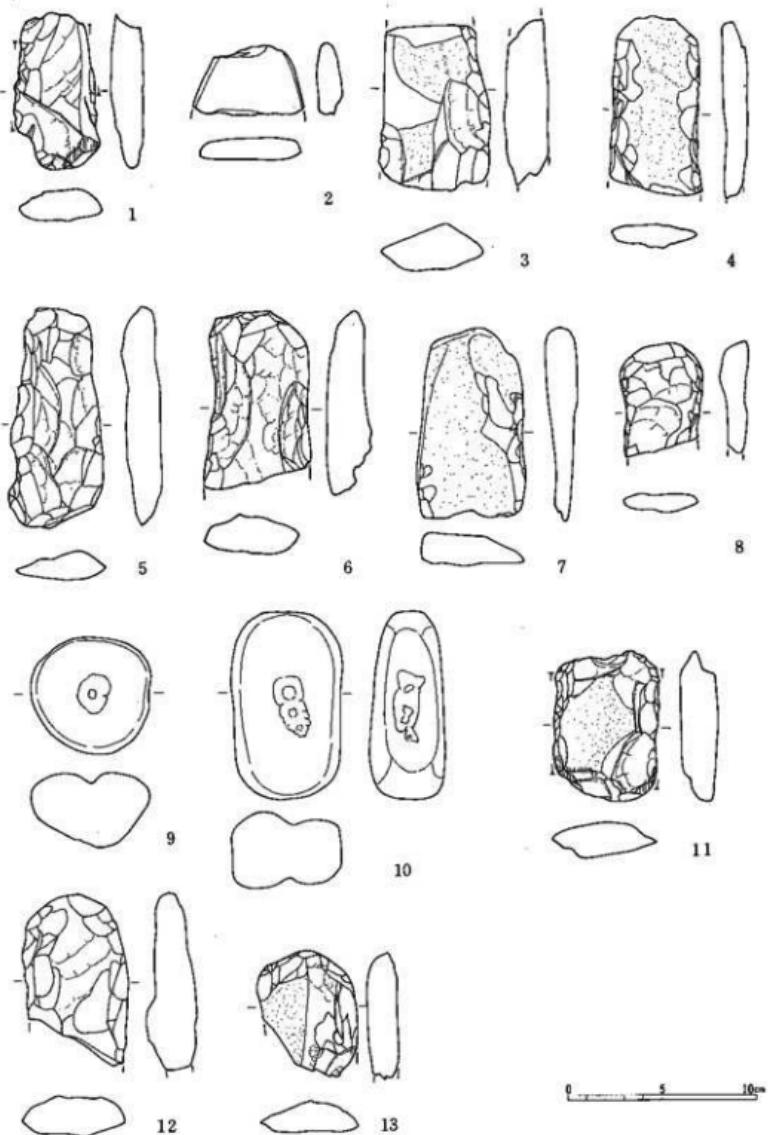
第66圖 住居址・小豎穴出土石器（1）

1:8号住、2:9号住、3:12号住、4:13号住、5,6,7:14号住、8,9:33号小豎穴、10,11:39号小豎穴、
12:49号小豎穴、13:71号小豎穴、14:162号小豎穴、15,16:166号小豎穴、17:172号小豎穴



第67圖 住居址·小整穴出土石器（2）

1:10号住, 2:14号住, 3:1号小整穴, 4:2号小整穴, 5:6号小整穴, 6,7:14号小整穴,
8:21号小整穴, 9:32号小整穴, 10:39号小整穴



第68图 住居址·小竖穴出土石器（3）

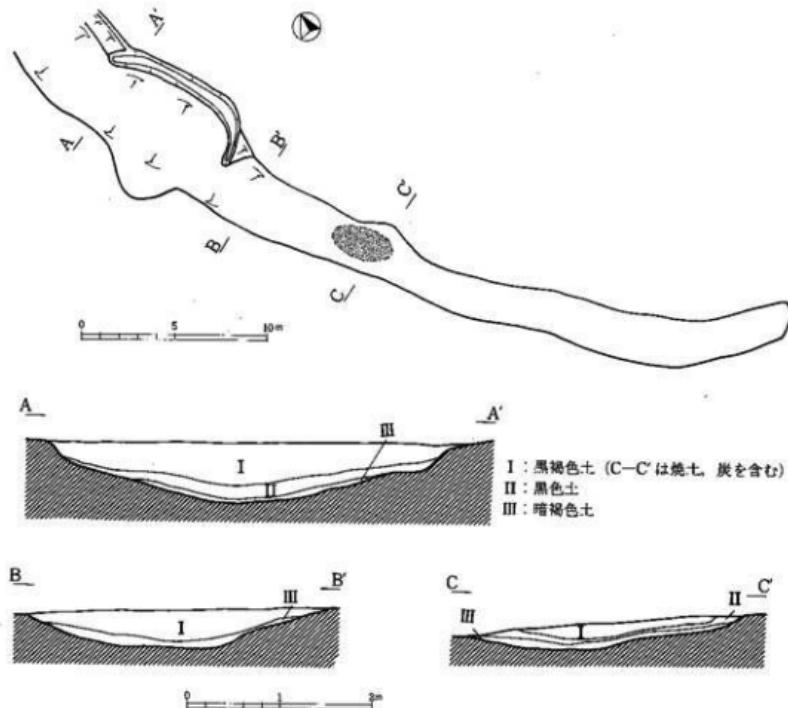
1·68号, 2·88号, 3·123号, 4·132号, 5·136号, 6·160号, 7·161号, 8,9·162号, 10·163号,
11,12·166号, 13·167号

第3節 溝

調査地区のほぼ中央域から北西方向に走っており、その先は北側の調査地区外へと続いている。等高線方向にやや湾曲しているが、調査地区内で43mの長さを測る。

ローム層直上の遺構検出面を精査中、黒褐色の帯を確認し、追跡したところ調査区の約半域を占める溝となる。溝はG-12グリッドでゆるやかな勾配により始まり、F-15グリット付近まで深さ10cm前後の浅い状態で続くが、そこから以西は漸次深くなり断面も急勾配になってくる。北西の端では深さ70cmを測る。覆土は基本的には3層から構成され、これは溝の全域にわかつてあてはまる。ただF-16グリットには検出面の高さで350×150cmの範囲、厚さ15cmの焼土が認められる。D-17グリッドでは溝の北側斜面に深さ15cm、幅100cmの溝が掘られており、特異的な形状をつくっている。

この溝が人為的なものであるのか否かの判断には至らなかった。

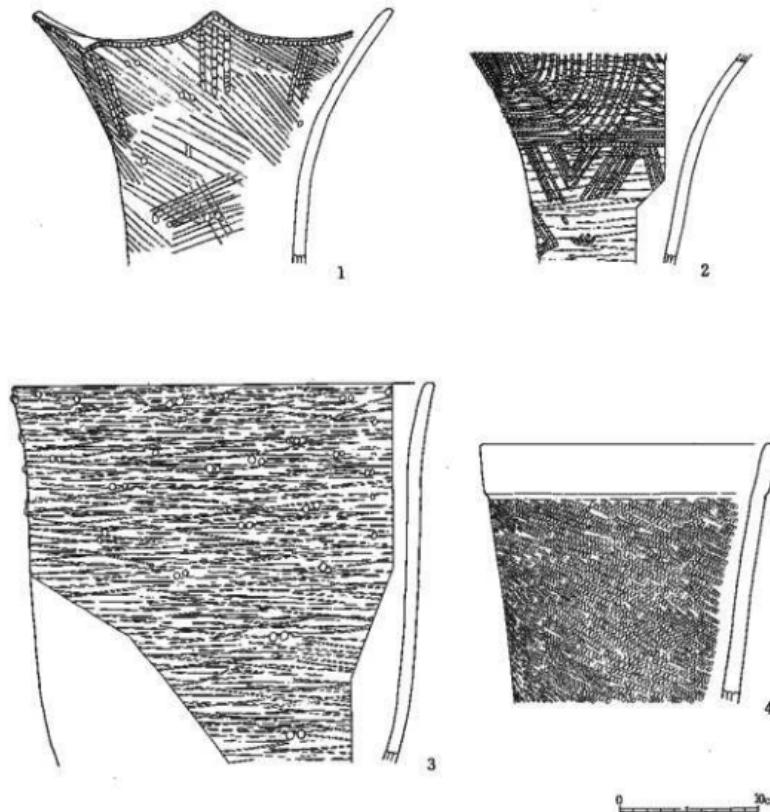


第69図 溝

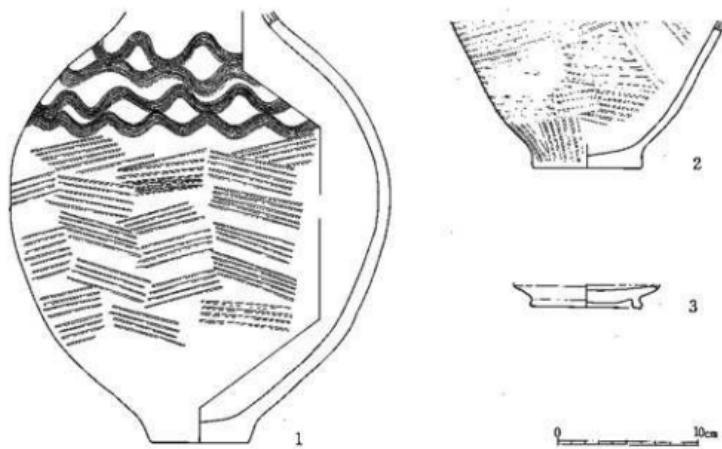
第4節 遺構外出土遺物

遺構外の出土遺物は、調査区全域にわたって多量であるが、とりわけI・J・K-1・2・3・4区の窪地部分からは縄文早期から弥生中期初頭までの各期にわたり多彩な土器、石器が出土しているため、この地区的出土遺物を中心に取り上げておきたい。

土器 72図1～14は、胎土に纖維を含み、縄文早期末に否定される。1は表裏に条痕文を、3～7は絡条体圧痕文を、11・12には縄文をそれぞれ施文する。2は鶴ヶ島台式、10は入海式に該当する。



第70図 遺構外出土土器（1）



第71図 遺構外出土土器（2）

70図1～3、72図15～19、73図1～9は縄文前期諸磯しから前期末に位置する土器である。1は、大きな波状口縁を呈する胴上半部で、口縁に沿って1条の結節浮線文を巡らし、口縁からは3本1組の結束浮線文を車下する。胴部は条線を地文とし、ボタン状貼付文を配する。72図16・18もこれに類似する。70図2は、地文に粗らな条線をもち、結節浮線文を胴上半部は渦巻状に、胴下半部は三角形状に施している。72図15、17もこれに類する。70図3は、座部を欠く大壺で、文様は横位の条線を地文とし、2個1対のボタン状貼付文を全面に配している。図1～4もこれに類似している。76図5～8は半截竹管文を施す。

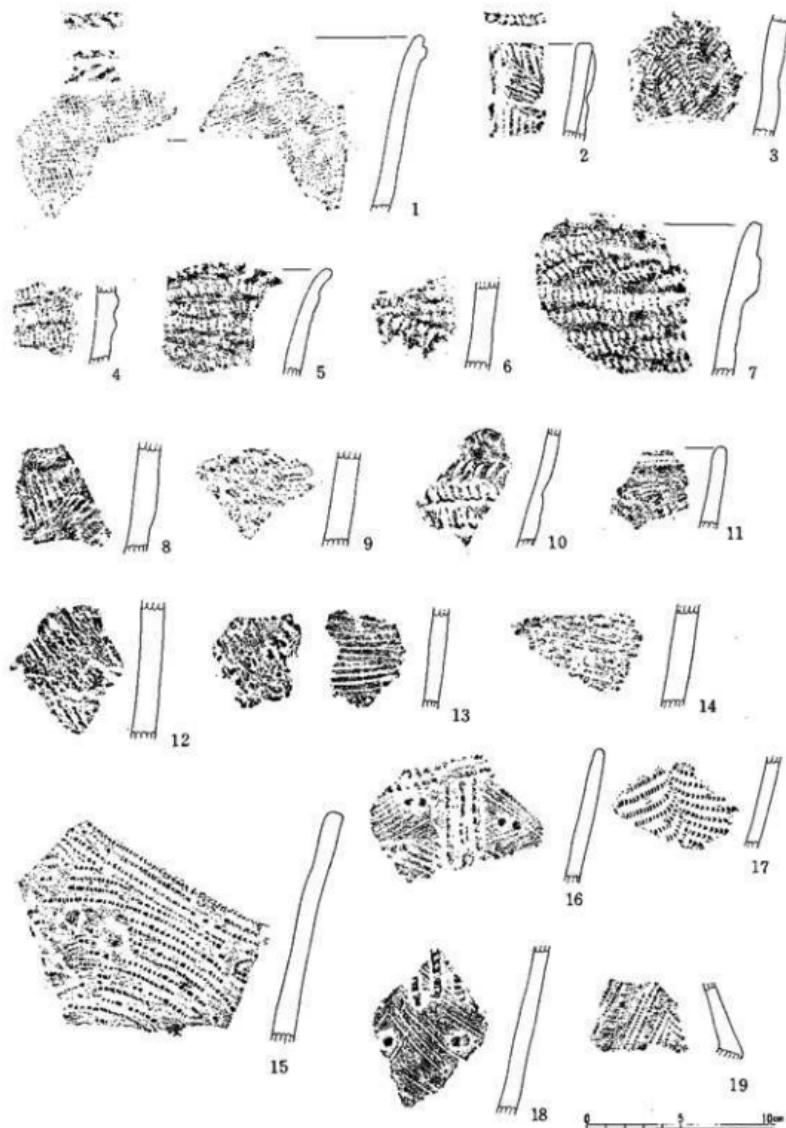
70図4と73図9～19は縄文中期に属する。4は、口辺部に無文帯部を置き、以下は前面を縄文で埋めている。9～12は、中期初頭を比定され、13～18は中期中葉に位置づけられる。ともに量的には少ない。

71図1は、I-14区から出土した弥生中期初頭の壺形土器。口頭部を欠くが、胴部の残りは良い。胴上半部に4条の波文を横走させ、それ以下は縦位の羽状条痕を施している。褐色を呈し、胎土に石英・長石・岩片を含む。78図2も同時期の胴下半部で、条痕を施している。I-18区から出土。

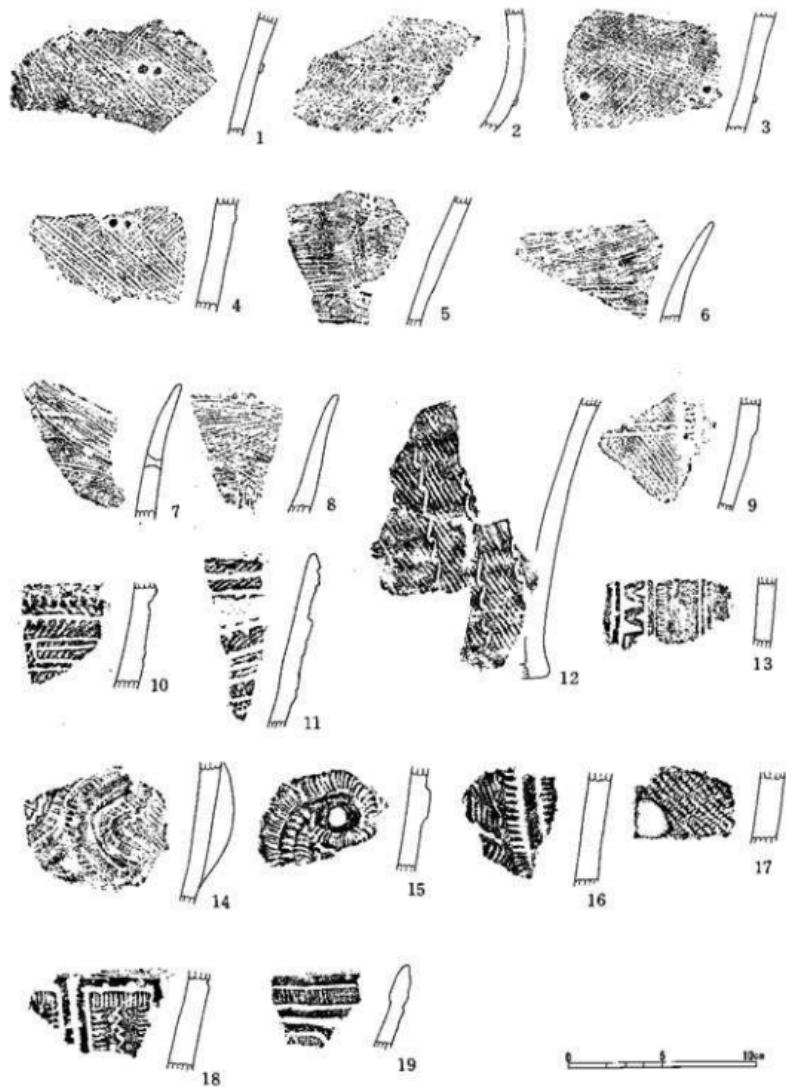
72図3は、須恵器杯の底部で、12-18の溝部分から出土。底平に回転糸切り痕を残す。

石器 土器同様、調査地域全域にわたり石器が出されているが、I・J・K-1・2・3・4区で主体的に発見された。74・75図に示したものがそれである。

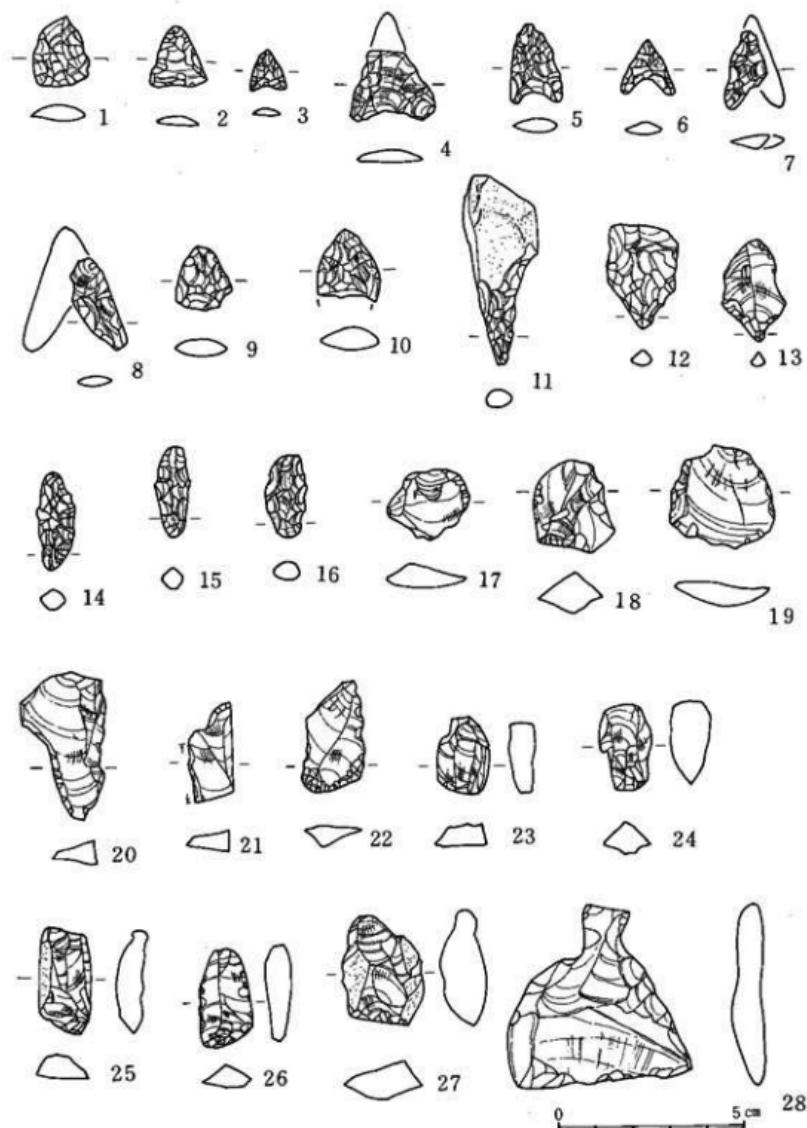
石器は、1～10の10点があり、4・8のような大型品、3の小型品が目につき、縄文早期から中期の遺物集中区という関係から有茎鎌の出土はない。



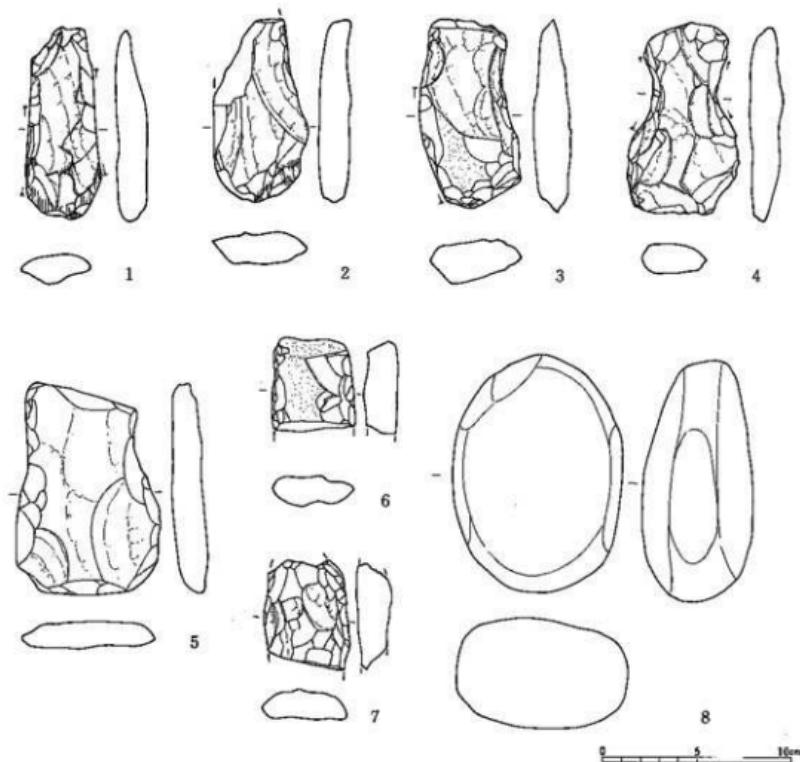
第72図 遺構外出土土器（3）



第73圖 遺構外出土土器（4）



第74図 遺構外出土石器（1）



第75図 遺構外出土石器（2）

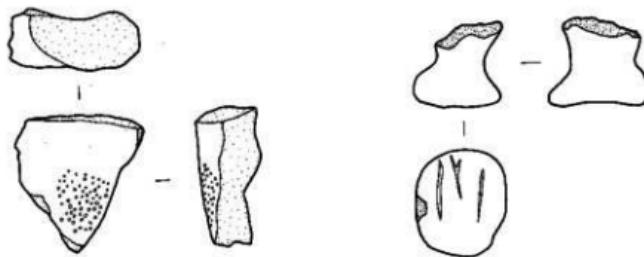
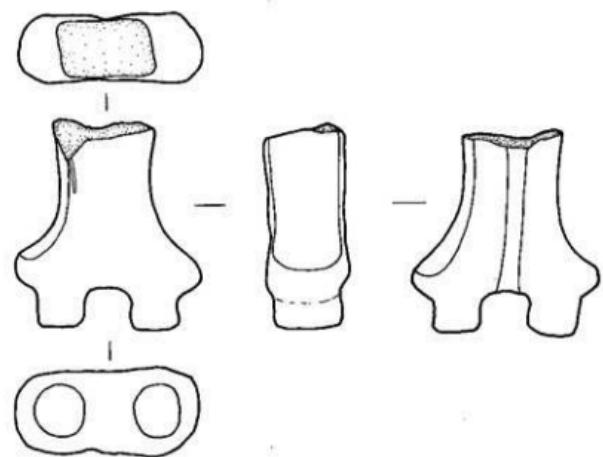
石錐は、11～16の6点があり、11～13はつまみをもち、14～16は錐部のみである。

スクレイバーは17～20の5点。ビーエス・エスキューは23～27の5点が出土している。石匙は28の1点のみ。

打製石斧75図1～7の7点がある。1～3は短冊形で、1、2は刃部に磨耗痕をもつ。4・5は肩部に抉りをもつ。6は頭部、7は胴部の破片である。

磨石は8の1点のみ。両側線に磨痕面をもつ。

土製品 C-1区から76図3に示す土製品で出土している。土偶の足部とも思われるがはつきりしない。下部の平坦面に3条の沈線状で文様らしきものが認められる。



0 5 cm

第76図 土 製 品

1:71号小竖穴, 2:101号小竖穴, 3:C-1区

第V章 まとめ

五輪堂遺跡の発掘調査は、昭和58年度から開始された塩尻東地区県営圃場整備事業に関連する最後の調査となった。この間、柿沢東、堂の前・福沢・爾ノ神古墳・田川端・宗張など多大の成果をあげた発掘が実施してきた。今回の五輪堂遺跡の調査は、この地域の原始・古代史を解明するために不可欠な多数の貴重な資料を提供することとなり、まさに締め括りに相応しいものとなつた。

田川と四沢川とに挟まれた台地上、5300m²にわたった発掘は、縄文時代早期から弥生時代中期初頭にかけての多量の遺構、遺物を発見し、さらに近世に相当する小児人骨1体を我々に提示した。

縄文早期では、住居址1軒、小竪穴6基がある。周辺には、押型文期の住居址2を出した柿沢八窓遺跡があり、田川下流域には本遺跡と同時期の早期末の集落址堂の前遺跡が存在する。早期の住居は、最近ようやくその数を増してきているが、一定地域の中で何カ所かの遺跡が群として捉えられる地域はまだ多くない。そうした意味でこの田川流域での在り方は重要なものとなろう。

縄文前期では、住居址2、小竪穴1が検出された。時期は前期末の諸磯c式を主体としている。市内では諸磯a、b期は比較的多いが、c式は片丘北熊井女夫山ノ神にまとまった資料がある程度で、今回の住居及び略光形土器の発見は注目されよう。

縄文中期では、小竪穴4が発見されたのみで、遺物の出土も断片的であった。当初、本遺跡は中期の大集落址ではないかと考えていたが、中期住居が皆無であったことは予想外であった。当地域での類似台地上には多くの中期遺跡の存在が確認されている。なぜこの台地上に集落が営まれず、小竪穴のみ構築されたかは、一定地域内での集落構造を復元するにあたり興味ある問題を提示しよう。

縄文晩期末から弥生中期初頭は、本遺跡を最も特色づける。8軒の住居址、104基以上の小竪穴は、この時期の集落としては、松本市で初の発見である。住居形態、小竪穴との関連性の究明、豊富な出土土器の分析等と、残された課題は大きいが、いずれにしても該期研究の基礎的資料とする貴重な発見である。

発見時から衆人の注目を集めた近世の小児人骨は、該期の小児の埋葬例が極めて少ないとから、その埋葬立地、形態等の考古学的な面、また身体的特徴等解剖学研究面で貴重な資料となつた。

以上のように、多大の成果を納め、無事調査を終了することができたのは、地元および土地改良区の役員の方々、調査参加物等、多くの方々の深い御理解と御援助の賜であります。衷心より厚く感謝申し上げます。

付章 五輪堂遺跡出土の人骨

信州大学医学部第二解剖学教室 西沢寿晃

出土状態

墓壙内に埋葬された人骨は1体分で、頭部や体幹を左方に向けて横たえ、下肢の股関節と膝関節を強度に屈曲させた横臥屈埋位である。出土の際、頭蓋骨の左半分はほとんど残存しなかったが、この部分の葉や頸椎などは、土中で遊離していて、別個に採り上げられた。

脊椎はほぼ直状で現位置を保持し、脛骨も數本が関節に連結した状態を保っている。上肢骨は両側ともすべての部分が欠失している。横臥位であるが、上肢骨は脊柱付近に見当らず、おそらく消失している胸郭の前方で上腕・前腕を屈曲させた形をとっていたものと推定される。骨盤も左半分はほとんど欠失し、土圧により崩壊して骨粉状となり、下方（右側寛骨）へ圧縮された状態となっている。下肢は足骨を除き、各骨が左右ともに揃い、比較的の形状を保っている。右大腿骨の骨頭は、寛骨臼からやや外れながらも連結している。遠位端は腹部に密接する角度をとり、下腿は膝完結をやや展いて屈曲された位置にある。圧大腿部は右側とやや角度を変え、膝頭が右側の膝下に嵌まり込んだ形となり、下腿もより強く大腿部へ引きつけられ、足部は殿部直下に位置する姿勢となる。俯瞰すると蹲踞・坐位の形で横たえられた埋葬位となる。

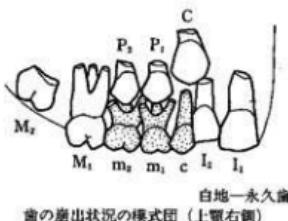
残存状況と形態

頭蓋骨一顎面骨の部分がほぼ正中に縦割された右側が主に残る。頭頂骨は矢状縫合を中心に左右ともに残るが、土圧による偏平化が進み、骨表面も崩壊がはげしい。前頭骨は右側のみで岩様部を除きやや原型を保。前頭骨・後頭骨とともに各縫合の離開を細かな亀裂により、骨表面の剥落と細片化がいちじらしい。眼窩（右側のみ）、鼻腔とも一応形狀を止めている。上顎骨は口蓋の右側部分と右全歯列、左前齒部の歯槽は保存され、各歯は植立して残存する。下顎骨は骨体のはば正中から右半分が完存する。ただし、骨体のはば正中から右半分が完存する。ただし、骨体の内側は骨表面が粗雑となり、稜の発達や筋附着部の性状などは不明である。歯槽の保存はよく、各歯も植立状態で完了する。

齒一上・下顎とも永久歯としての切歯の萌出は完了している。切歯の咬耗がわずかに認められる。乳犬歯は植立する交代期であり、唇側で上・下顎の大歯（永久歯）の歯冠が萌出前の状態で観察される。乳犬歯の歯冠尖頭にもわずかな咬耗が生じている。第1・2乳臼歯は上・下顎ともに残存。各咬頭を含め、中央部の陥没する弱い咬耗痕がみられる。第1大臼歯（永久歯、6歳臼歯ともいう）は、左右に・上下とも萌出は完了している。当然ながら全体的には未咬耗であるが咬頭の内側辺にわずかな滑沢面を生じる部分は、いわゆる初期咬耗とされるもので、出根後一年程で発現が認められるという。咬頭に頂窓の存在する歯もある。第二大臼歯はすべて未萌出であるが、形成された歯冠が埋伏状態で認められる。遊離した歯の歯根をみると上・下顎の第1

残存する歯の歯式

永久歯	$M_2 M_1 \quad C \quad I_1 \quad I_2$	$I \quad C \quad M_1 M_2$
上顎		
乳歯	$m_2 m_1 c$	$c \quad m_1 m_2$
下顎		
永久歯	$M_2 M_1 \quad C \quad I_1 \quad I_2$	$C \quad M_1 M_2$
未萌出		歯冠のみ形成



大臼歯では未だ根端が大きく開口している状態で、これらは一般的に6~10・11歳とみなされている範囲である。また、上・下顎の第2大臼歯は石灰化が歯冠のみに限られている時期で、上顎で6~9歳、下顎で6~10歳とされる。

脊椎骨—発掘に際して、頭骨はすでに散乱して別に採り揚げられていたが、胸椎以下は各突起などを欠くが、仙骨まで椎体は連続し形態を止めている。「肋骨も歯本が上肋骨窓や横突肋骨窓に接合しているが、全体として痕跡的であり、胸郭部位はほとんど消失している。頸椎では椎体の上・下関節面は成長線から離れ、椎弓も椎体への癒合を完成していない模様である。

胸骨—柄部のみが残存する。

鎖骨（左）—骨体の両端を欠く。

肩甲骨（左）—関節窓の周縁が主に残るのみ。

寛骨（右）—腸骨体の一部が残るが、寛骨臼で腸管・坐骨間の軟骨部分から離開している。

大坐骨切痕は緩やかた半円状に観察される。

大腿骨—右、骨頭は寛骨臼に陥入するが、晒骨化した後にわずかに外した位置にある。大腿骨全長は推定約260mm、骨体中央矢状径約15mm、同横径約18mm、同周径58mm、骨頭、大転子はそれぞれ成長線で癒合していない。左、骨体上半がわずかに残る程度である。

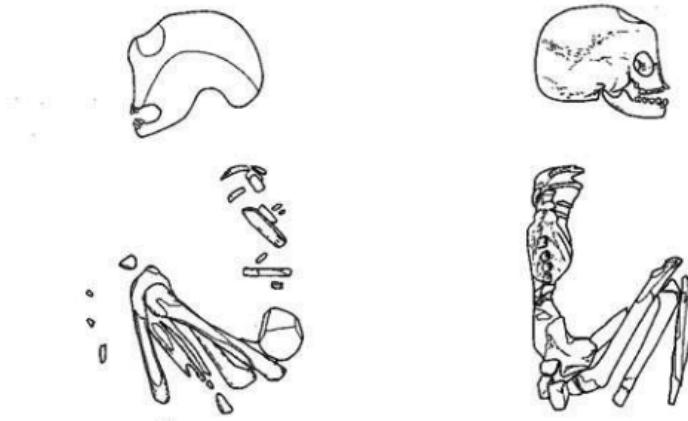
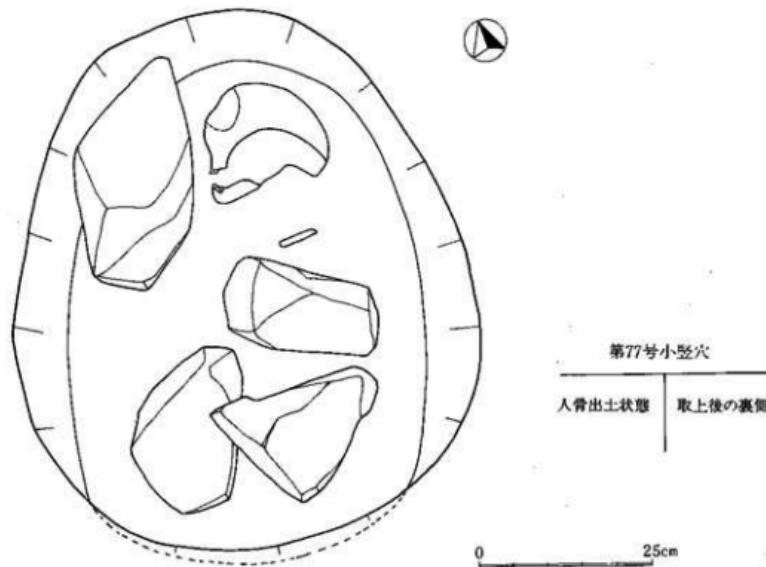
脛骨・腓骨—右の脛骨・腓骨は各骨体が密接し、並列する位置を保ち、左の脛骨骨体はほぼ残り腓骨骨体はわずかであるが、両骨にやや間隔がある。脛骨の近位関節部分が成長線より外れている。

足骨（左）—一部が骨粉状のかたまりとなって残っている。

まとめ

本遺跡出土の人骨は、上肢下肢が屈曲され、左向きに横たえられた横臥屈葬位で、この体型に合わせて掘られた墓壙に埋葬された小児の遺体である。

各骨の部分的な保存状態は必ずしも良好でなく、加えて纖細な小児人骨だったためその形質的な特徴の多くは不明であり、性別や帰属年代についての特定は不可能である。ただし、骨や歯の加齢に伴なう成長の過程から、この人骨の年齢はほぼ明確である。大腿骨や脛骨などの関節部分が成長線で骨化が終了していない現象は15歳以下の若年性を表している。同時に極めて確実性のある



第77図 第77号小竖穴出土人骨

る年齢決定の因子とされる歯の萌出状況をみると、各乳歯の脱落期と、交代する永久歯の石灰化、出根の萌出が重なるいわゆる混合歯弓の形成から、本人骨が7・8歳の小児期のものであると推定できる。

遺跡出土の幼小児人骨は、成長期にある骨格の繊細さから必然的に依存の程度は悪く、現在まで多くの資料は分散された状態である。近年にいたって分部（長崎大学）は発掘幼小児骨を対象に、九州・中国地方の古墳・弥生時代からの資料について、出土状況・出土率・年齢推定計測等について検討を行ない、近代におけるそれとの比較・特徴についての考察を加えている。骨類の保存に不敵な長野県中央部に位置する本遺跡からの小児人骨の出土は、時代の如何に関わらず極めて稀少であり、将来的に個体数の蓄積が求められる折りから貴重な資料の一端となるものと考えられる。



遺跡遠景（南側から）、手前は国道153号線



重機による表土除去

図 版 2



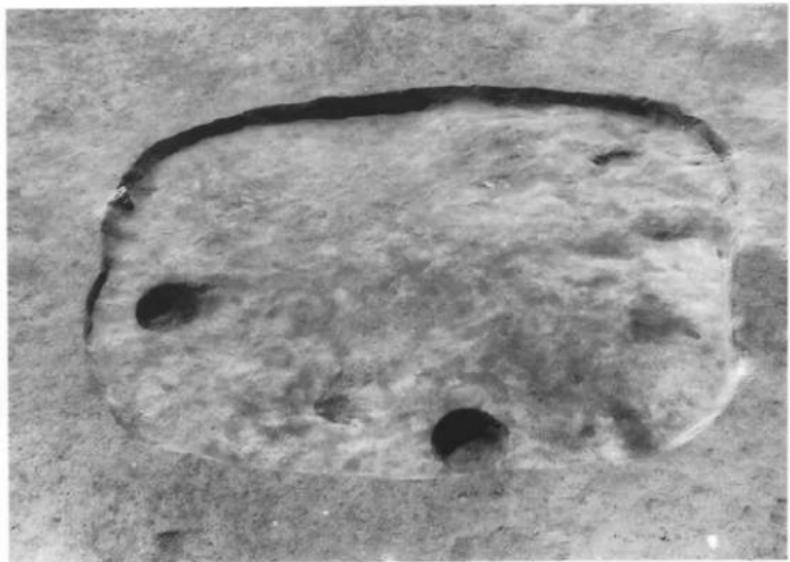
発掘開始時の説明



遺構検出作業



第2号住居址



第4号住居址

図版 4



第11号住居址



擡鉢状地形掘り下げ



第58号小竪穴



小竪穴群（南側から）

図版 6



溝 (南側から)



調査区全景 (東側から)

圖版 7



遺構測量



出土土偶

図版 8



第77号小竪穴人骨出土状態



人骨に伴う漆片

五輪堂遺跡

— 塩尻東地区県営圃場整備事業
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 —

平成元年3月20日 印刷

平成元年3月22日 発行

発行 塩尻市教育委員会
印刷 株高砂印刷所
